特252
883

良書百選

第八輯

社團法人 日本圖書館協會編

始

露光量違いの為重複撮影

特252
883

日支交渉史研究

新刊

秋山謙藏 著

日本と支那との交渉は古くより間斷なく今日に及び、この交渉によつて日本人は絶えず自己の傳統を强化し、現實を調整しつつ次の時代への力强い行進を續け、ここに舊き日本は常に新しき日本となり、我が國勢が著しく進展し來つたことは改めて云ふ迄もない。本書は著者がこの重要にして而も複雜なる史實を文化・思想・物質等の各方面より根本的且つ綜合的に解明すべく意圖し、十有餘年の精進によつて漸く成れる劃期的業績である。從來の研究が多く日本の史料に據りたるに對し、著者は廣く東亞諸國の史料を探り、之に基いて東亞の大勢より國史の動向を考察し、全東亞に於ける日本人の活躍、對外發展の狀況と我が國民生活の發展との微妙なる關係を詳細に檢討しその史實の有する深甚なる意義を明かにしてゐる。著者はこの研究に對し六たび帝國學士院の推薦によつて有栖川宮紀念學術奬勵金を拜し、また本書の卷頭にはわが歷史學界の元老、三上、市村、白鳥三博士も序言を寄せて我が學界に絶大なる寄與をなす重要文獻たることを稱讃されてゐるが、今や東亞協同體の完成が我が國最大の課題たる時、本書の意義は一層大にして廣く識者の精讀を期待する大著である。

四六倍判六九〇頁圖一三
クロース裝上製函入
定價 七・〇〇 送料 四五

東京神田一ツ橋 岩波書店 振替東京二六二四〇

序

わが日本圖書館協會は、昭和六年七月以來文部省援助の下に、社會教育上裨益するところある優良圖書の推薦を行つて來た。本協會はこれがために特に調査部を設け、調査委員十名をあげて新刊圖書の調査に當らしめ、毎月一回調査委員會を開いて愼重審議の上、推薦したる良書を、「圖書館雜誌」及「讀書」に發表して、一般社會人の圖書選擇の利便に供して來たのである。かくて昭和七年五月推薦圖書百種を選んで、「良書百選」第一輯を刊行して全國公私立圖書館竝に各關係方面に頒布して以來すでに第七輯に及んだのであるが、更に今回は昭和十三年四月より本年三月に至る推薦圖書を收錄して、玆に其第八輯を刊行することゝなつたのである。幸にこれが讀書人にとつて圖書選擇上の指針となることを得ば本協會の洵に本懷とするところである。

なほこの機會に於て推薦文を執筆せられた各方面の權威者に對し、深く謝意を表する次第である。

昭和十四年三月

社團法人日本圖書館協會理事長

松本喜一

露光量違いの為重複撮影

特252
883

日支交渉史研究

新刊

秋山謙藏 著

日本と支那との交渉は古くより間斷なく今日に及び、この交渉によつて日本人は絶えず自己の傳統を強化し、現實を調整しつつ次の時代への力强い行進を續け、ここに舊き日本は常に新しき日本となり、我が國勢が著しく進展し來つたことは改めて云ふ迄もない。本書は著者がこの重要にして而も複雜なる史實を文化・思想・物質等の各方面より根本的且つ綜合的に解明すべく意圖し、十有餘年の精進によつて漸く成れる劃期的業績である。從來の研究が多く日本の史料に據りたるに對し、著者は廣く東亞諸國の史料を探り、之に基いて東亞の大勢より國史の動向を考察し、全東亞に於ける日本人の活躍、對外發展の狀況と我が國民生活の發展との微妙なる關係を詳細に檢討しその史實の有する深甚なる意義を明かにしてゐる。著者はこの研究に對し六たび帝國學士院の推薦によつて有栖川宮紀念學術奬勵金を拜し、また本書の卷頭にはわが歴史學界の元老、三上、市村、白鳥三博士も序言を寄せて我が學界に絶大なる寄與をなす重要文獻たることを稱讃されてゐるが、今や東亞協同體の完成が我が國最大の課題たる時、本書の意義は一層大にして廣く識者の精讀を期待する大著である。

四六倍判六九〇頁圖一三
クロース裝上製函入
定價 七・〇〇 送料 四五

東京神田一ツ橋 岩波書店 振替東京二六二〇四

序

わが日本圖書館協會は、昭和六年七月以來文部省援助の下に、社會教育上裨益するところある優良圖書の推薦を行つて來た。本協會はこれがために特に調査部を設け、調査委員十名をあげて新刊圖書の調査に當らしめ、毎月一回調査委員會を開いて愼重審議の上、推薦したる良書を、「圖書館雜誌」及「讀書」に發表して、一般社會人の圖書選擇の利便に供して來たのである。かくて昭和七年五月推薦圖書百種を選んで、「良書百選」第一輯を刊行して全國公私立圖書館竝に各關係方面に頒布して以來すでに第七輯に及んだのであるが、更に今回は昭和十三年四月より本年三月に至る推薦圖書を收錄して、玆に其第八輯を刊行することゝなつたのである。幸にこれが讀書人にとつて圖書選擇上の指針となることを得ば本協會の洵に本懷とするところである。

なほこの機會に於て推薦文を執筆せられた各方面の權威者に對し、深く謝意を表する次第である。

昭和十四年三月

社團法人日本圖書館協會理事長

松本喜一

目次

第一　哲學・宗教

學問と世界の眞實　田村徳治　一
哲學と科學との間　田邊元　二
日本精神讀本　新潮社編　三
支那思想と日本（岩波新書）　津田左右吉　三
プラトン講話　桑木嚴翼　五
文化哲學の諸問題　小塚新一郎（シュプランガー）譯著　五
現代文化と國民教育　小塚新一郎（シュプランガー）譯著　五
二十世紀の神話　上村清延・吹田順助（ローゼンベルク）譯著　七
青年心理學　青木誠四郎　八
ドイツ精神　村上瑚磨雄　九
指導原理としての佛教學　平井巽　一〇
佛教思想物語　増谷文雄　一二

第二　歴史・傳記・地誌・紀行

補公を語る　林彌三吉　一三
乃木希典小話（私を教へた大叔父乃木將軍）　菊地又祐　一三
國際讀本　外務省情報部編　一四
第一　支那讀本
第二　伊太利讀本

第三　中・南米讀本
第四　ソヴイエト讀本
第五　獨逸讀本
第六　佛蘭西・西班牙讀本
第七　英吉利讀本
第八　亞米利加讀本
第十　南太平洋讀本

東海道　田中好・和田篤壽　一五
少年滿洲讀本　長與善郎　一六
滿洲の習俗と傳說・民謠　谷山つる枝　一八
上海漫語　內山完造　一八
中國の西北角　長江茂・松枝夫著譯　一九
蒙古風土記　米內山庸夫　二三
乾燥アジア文化史論　松田壽男・小林元　二三
中央亞細亞探檢記　スウエン・ヘディン著　岩村忍譯　二四
婦人記者の大陸潛行記　エラ・マイアール著　多賀善彥譯　二五
友邦洪牙利　吉川兼光　二六
北緯七十九度　飯塚浩二　二七

第三　政治・法律・經濟・社會・教育・兵事

日本憲政史を語る（上、下）　尾崎咢堂　二八
明治政治史點描　尾佐竹猛　二九
現代支那批判　尾崎秀實　三〇
支那論　內藤虎次郎　三一
新支那論　池崎忠孝　三二
世界の變貌　圓地與四松　三四
國際日本の地位　白鳥敏夫　三五
世界に立つ日本　池崎忠孝　三五
帝國外交の基本政策　鹿島守之助　三六
英國の觀た日支關係　堀江邑一譯　三七
日支事變外交觀　本多熊太郎　三八
魂の外交　日露戰爭に於ける小村侯　本多熊太郎　三九
獨裁政と法律思想　高柳賢三　四〇

日本憲法制定史要　尾佐竹猛　四一
國家總動員法の解說　塚田一市　四二
戰時下の經濟生活　賀屋興宣　四三
戰時經濟の實際問題　東京日日新聞社經濟部編　四三
伸びゆく獨逸　ナチス經濟の實相を觀る　伍堂卓雄　四四
ベスタロッチ小傳　福島政雄　四五
幼兒心理學　山下俊郎　四六
學校少年團の理論と訓練　大沼直輔　四七
獨逸は起ちあがつた　二荒芳德　四八
ヒツトラーと青年　二荒芳德・大日方勝　五〇
兵器讀本　青木保　五一
日本兵食史論（上、中、下）　小澤滋　五二
陸軍讀本　大久保弘一　五三

第四　自然科學・醫學

大陸と科學　陰部一雄　五四
冬の華　中谷宇吉郎　五四
數學文化史　吉岡修一郎　五五
キユリー夫人傳　エーヴ・キユリー著　川口篤等譯　五六
圖說天文講座（全八卷）　山本一清編　五六
生理學なぜ・何故ならば　林髞　五八

第五　工學・産業

堅　岸田日出刀　五九
最新住宅讀本　平尾善保　六〇
航空讀本（改訂版）　小川太一郎　六一
家計讀本　氏家壽子　六二
生産と勞働　暉峻義等　六三
持てる國日本　大河內正敏　六四
農村社會學研究　池田善長　六五
土に叫ぶ　松田甚次郎　六六
滿洲農業移民十講　橋本傳左衛門等監修　六七
魚の國　三浦定之助　六八
戰時日本貿易論　木村增太郎　六九

第六　美術・諸藝

東洋の理想　岡倉天心著　淺野晃譯　七一
レコードによる古典音樂　（野村胡堂）　あらえびす　七三
レコードによるロマン派の音樂　（野村胡堂）　あらえびす　七三
謠曲　風巻景次郎　七五

第七　語學・文學・隨筆

國語尊重の根本義　山田孝雄　七四
方言と方言學　東條操　七五
日本文學案内　菊池寛　七七
夏目漱石　小宮豐隆　七七
文藝の日本的形態　大熊信行　七九
日本文學と英文學　大澤衛　八〇
日本文學評論史（古代中世篇・近世篇・近代篇）　久松潛一　八二
短歌鑑賞論　岡山巖　八三
支那事變歌集　戰地篇　大日本歌人協會編　八三
俳諧文學　頴原退藏　八四
俳句鑑賞の爲に　山口誓子　八六
さざなみ軍記　井伏鱒二　八六
戰爭と二人の婦人　山本有三　八七
麥と兵隊　火野葦平　八八
土と兵隊　火野葦平　八八
馬仲英の逃亡　スヴェン・ヘディン著　小野忍譯　八九
蘆の芽　鏑木清方　九一
いはの群　曾宮一念　九一
丘の書　大澤章　九二
丘の橋　内田百閒　九三
思ひ出すまゝに　正宗白鳥　九四
夜沈々　三好達治　九五
わが旅の記　吉田絃二郎　九六

古事記物語　鈴木三重吉　九七
忠烈美譚　輝く肉彈　長沼依山　九七
子供の天文學　原田三夫　九八
一に十二をかけるのと十二に一をかけるのと　久保田万太郎　九九
級長の探偵　川端康成　一〇〇

良書百選　第八輯

第一　哲學・宗教

田村德治著
學問と世界の眞實

學問と藝術と宗教とは、いづれも皆人類の向上發展に缺かれ得ないもので、そしておのおの獨特の長所を有つて居るが、しかし歷史がこれを示して居るやうに、學問は、人類の進歩が一定の段階に到達して、はじめて成立し、そしてその成立があつて以來、人類の進歩が、最も顯著に急速にせられ、且確實と爲つた。だから人々は、もちろん宗教及び藝術の領域においても偉大なることを爲し得るがしかし亦學問の領域においても、人類の向上、發展に寄與し得ることが甚大であることを、確信し得る。

これが本書に於ける、著者の自序の一節である。簡潔の中によく學問の特異性を道破されて居る。

かくて著者は先づ學問には大衆學問、通俗學問、及び純粹學問の別のあること、そしてそれはそれぞれ操觚者・教育者及び研究者に依つて、もしくはこれらのそれぞれの資格において形成せられるとする。

而して大衆學問は人を動かすための學問であり、通俗學問は、人に理解せしめるための學問であり、純粹學問は自らが領くがための學問であると規定し、三者は、眞理の把握を前提する限り、いづれも固有の長所を有し、一を以つて學者に高邁の精神を鼓吹し、健剛の意氣と不撓の氣慨とを保持せしめるべきであらうと思ふと述べ、この高邁の精神をもつて、純粹學問の建設に從事してゐる人々が、曉天の星の如くに少

いことを慨いてゐる。

「大學の本質と大學精神」「學生々活を有意義にする道」は學問するものの態度、大學の使命、學問への信條を懇切に說かれたもので、學問に志すものゝ一讀すべき好文字である。

「學問の階級性の問題とその超克」及び「プロレタリア科學の優越性」の問題は本書中最も多くの頁を費し、且つ相當難解な論文であるが、プロレタリア學者によつて殆んど無批判に前提せられて居るものを學問的に論駁されたものであり、「學問に對する階級性以外の諸制約の問題」「世界を知ると言ふ意味」「Panpsy-chismus」「マルクシズムと私」等著者の學問に對する極めて眞摯なる態度を述べたもので、啓發さるゝところ尠くないものである。

（昭和一二、一二、一　京都市上京區廣小路寺町東入
立命館出版部　四・判　二四九頁　一・八〇）

田邊　元　著

哲學と科學との間

田邊博士の如きわが哲學界の最高峰に立つてをられる眞の學者が、しばしばわれわれの爲に講壇を下つてジャーナリズムに筆をとつて呉られることは、われわれにとり此の上もない喜びでなくてはならない。

もとより、學者的良心の强い博士の筆は、ジャーナリズムの爲にする場合でも、充分に嚴密であつて、所謂通俗に墮することはないのであるから、一般讀者にとり必ずしも讀み易いものではないかも知れない。しかし、博士の日本文化の正しき進展に對する情熱は、再三再四熟讀吟味する眞面目な讀者の心に、力强い共鳴を起さずには置かないのである。

本書の內容は、一、常識、哲學、科學　二、世界觀と世界像　三、科學性の成立　四、科學政策の矛盾　五、量子論の哲學的意味　六、古代哲學の資料概念と近代物理學の六篇の論文から成つてゐる。

これ等の論文の意圖するところは、なまじわれわれ如きが下手な紹介をするよりも、博士自身の筆によつて見るのが最上の策であると思ふから左に本書の序文を摘錄する。

「愛國の熱情は科學的精神を伴ふことを要する。然らざれば、感激は盲目に陷り、興奮は一時にして醒め、目的の自覺に導かるゝ堅忍持久は期することが出來ない。愛國心の昂揚に次いで、科學的精神の喚起の急なること、今日の如きは少ないであらう。

今や幾多の同胞は我々に代つて、身命を抛ち戰苦に身を捧げる。これに對し我々は無限の感謝を懷くと同時に、其犧牲を無意味に終らしめない爲に、周到にして苟も遺漏なき認識と計畫とを以て、國內諸般の施設を規整するのでなければならぬ。所謂銃後の任務には科學的精神の發揮が重要なる位置を占むべき筈である。私は此の如き信念の下に此書を公にする。……念願する所はたゞ、此非常の時に際して國家の合理的なる進展に、微小なりとも貢獻したいといふことの外にはない」

（昭和一二、一一、三〇　神田區一ツ橋二ノ三　岩波書店
四六判　二四四頁　一・五〇）

新潮社編

日本精神讀本

本書は嘗つて新潮社より出版せる「日本精神講座」中より其の精粹を拔いて　更に執筆諸家の訂正增補を經て集編纂せるものである。執筆者は近衞文麿公を始めとして現代日本に於ける知名の諸氏である。各編共時局と連繫を計つてそれぞれ其卓見を披瀝せるもので、德富猪一郎氏の「聖詔に現はれたる日本精神」河野省三氏の「神ながらの大道」平泉澄氏の「武道の神髓」藤村作氏の「國文學と日本精神」齋藤茂吉氏の「和歌と日本精神」松村武雄氏の「民譚民俗信仰に現れたる日本精神」等で、各々其の專門的立場より日本精神を說いたものである。

深遠なる思想の一大貯水池たる日本精神を體驗する事は容易ならざる事ではあらうが、我國は今まさに國民精神總動員中にあつて官民協力これが鼓吹に努めてゐる折柄、かゝる知名の士の日本精神に對する見解を閱讀する事は自らの思索の糧となり、又我々日本人としても必要な事であらう。その點からみて、時代精神に目覺めんとする大衆に讀を薦める所以である。

（昭和一二、一一、二二　牛込區矢來町七一　新潮社
菊判　三一〇頁　一・五〇）

津田左右吉　著

支那思想と日本　（岩波新書）

この書は日本文化の支那思想よりの獨立宣言の書である。

我々は久しく日支の同文同種なる所以を敎へられて來た。又、日本人の中には「日本の文化と支那の文化とは何となく同じものであるやうに思ひなす人」もあり、支那人のうちには「日本には日本に獨自の文化が無く、過去に於いては支那

の模倣に過ぎず現代に於いては西洋のに追從してゐるのみであるといふやうな誤まつた考へ」の下に毎日の思想を有するものも少ないやうである。かゝる思想を解消せしむるために著者は日本、支那、印度の文化の特異性を研究して本書の論斷に到達したのである。其の要旨は次の如きものである。

日本の文化は日本の民族生活の獨自なる歴史的展開によつて獨自に形づくられて來たものであり、隨つて支那の文化とは全くちがつたものであるといふこと、日本と支那とは別々の歴史をもち別々の文化をもつてゐる別々の世界であつて、文化的にはこの二つを含むものとしての一つの東洋といふ世界はなりたつてゐず、一つの東洋文化といふものは無いといふこと、日本は、過去に於いては、文化財として支那の文物を多くとり入れたけれども決して支那の文化の世界につゝみこまれたのではないといふこと、支那からとり取れた文物が日本の文化の發達に大なるはたらきをしたことは明かであるが、一面またそれを妨げそれをゆがめる力ともなつたといふこと、それにも拘はらず日本人は日本人としての獨自の生活を發展させ獨自の文化を創造して來たといふこと、日本の過去の知識としては支那思想が重んぜられたけれども、それは日本人の實生活とははるかにかけはなれたものである。直接には實生活の上にはたらいてゐないといふことである。日本と支那と　日本人の生活と支那人のそれとは、すべてにおいて全くちがつてゐる。といふのがわたくしの考である。（圏點筆者）

辛直に言へば筆者はこの驚くべき論斷に多大の興味と脅威を感じつゝ二回に亙り通讀した、筆者が本書の論斷に脅威を感じたといふのはこの書の内容が動もすると　偏狭なる日本主義に一層の拍車をかけ、これを驅つて徒なる排外思想を助長するのではないかといふ點と、思想と文化と生活とをあまりに截然と分説してゐる點とである。

本書に於ても日本文化の獨自性は隨所に出ては居るが十分とは言へない。（この事は「まへがき」にも述べられてゐるやうに大正年間に公にされた「文學に現はれたる我が國民思想の研究」によらなければならない）又末節に至つては稍々飛躍があり獨斷と考へらるゝ點がないとは言へない。

然しながら著者の目的はこの異常なる轉換期に際し、支那思想に對する傳統的な考へ方に對して再檢討を加へ、日本の過去の文化の獨自性に對する堅い信念を涵養する必要を强調するものであり、その主張には二十餘年來の研究の裏づけがあり、妥當性があるやうに考へられる。

如上の點に細心の注意を拂ひつゝ熟讀玩味するならば讀者の啓發せらるゝところは蓋し鮮くないであらう。これ敢へて本書を指導階級に薦める所以である。

（昭和一三、一一、二〇　神田區一ッ橋二ノ三　岩波書店
三六判　二〇〇頁　・五〇）

桑木　嚴翼　著

プラトン講話

本書は序文にあるやうに、今年一月二十五日から三十一日まで「プラトンの言葉」といふ題で放送した覺書原稿を整理して成つたものである。ほかに附錄六篇を加へてあるが、それらも近時の放送や講演に係るもので、要するに本書は著者が二三年來講演したものの集錄である。

プラトンはいふまでもなく西洋哲學の淵源である。西洋文化の眞の理解といふことが今日ほど深刻に要求せらるべき時はないのであるが、その際西洋思想の源泉であるプラトンこそは眞先に取上げらるべき一人であらう。この時に當つてわが國西洋哲學界の耆宿桑木博士によつてプラトンの思想が一般に講述せられたことは、極めて有意義なことといはなければならない。多くの讀者の中には毎朝の放送に耳を傾けられた人もあることであらう。短時間の間に豐富な蘊蓄から極めて平明に講述せられる博士のお話は誰にもよく解るものであつた。あのお話が機緣となつてプラトンに興味を抱き、ギリシヤ哲學に關心をよせた人がないとも限らない。それだけでも放送の目的は達したのである。本書はその講演の節略を補ひ、遺漏を充すものとなつてゐるのであるから、聽講者は讀みたいと思ふであらうし、讀めば理解を深める點も多々あらう。しかしなんといつてもプラトンの思想を十分によく理解するには本書だけに止まるといふわけには行かない。本書はあくまでも手引の書であつて、更にこの上著者の西洋哲學史か他の哲學史、進んではプラトンその人の著作について補ひをつけなければならないと思ふ。

附錄には「日本文化に貢献した西洋人に關する放送講演の一節」（ケーベル博士のこと）とか、「文化の創造」「教養の價値」とか、いふやうな注目すべきものがある。

（昭和一三、四、一五　日本橋區吳服橋二ノ五　春秋社
四六判　二三六頁　一・四〇）

シュプランガー教授の

「文化哲學の諸問題」及び「現代文化と國民教育」について

高坂　正顯

「生の形式」によつて、我が國に於ても早くから親しまれて

ゐたシュプランガー教授が、日獨交換教授として來朝されたことは、我國の知識人にとつて、非常な喜びであつた。それは一つには、同博士が現にベルリン大學の教授として積極的に學問の進歩に寄與されつつある現役の大家であるためであり、また一つには、同博士が現在のナチスの運動をもとより白眼視もせず、さりとて學者の矜恃を失つて、徒らにおもねることもたきことを信じたがためであつた。今一年間に汎て同博士が我々の間に於て試みられた講演が、小塚新一郎氏の流暢な飜譯によつて、この二卷の書物に纒められたのを見て我々の期待が欺かれなかつたことを深く喜ばざるを得ない。そこには文化哲學に關する諸問題の優れたる分析と解決がなされてをり、また現代ドイツの精神的運動の、特に我々にとつて教へるところ多き諸側面が示されてゐるからである。

シュプランガー教授の立場は、もとディルタイの生の哲學の立場と最も親近さを示すのであるが他方新カント學派に於ける如き價値の哲學とも必らずしも疎遠ではない。恐らくかかる生の哲學と價値の哲學の綜合として、同教授の文化哲學は建設されてゐると云ふことが出來るであらう。そこに同教授の立場が、深く且つ大なるドイツ觀念論の正しき傳統の上に立つ、と解し得る所以のものもあるのである。同教授の最高の目的は、時間的なるものと永遠なるものの結合と云ふ、あらゆる偉大なる過去の哲學者達の念願を果すことに向けられてゐるのである。ここに集められたいくつかの論文は、その最高潮に於て、しばしば神秘主義的なる色彩をすら帶びてゐるのである。

しかし、かかる同教授の根本思想の上に立つて、最も感銘深いものは、現代文化の極めて巧みなる具體的分析であり、わけても東洋と西洋の文化形態の自らなる比較である。シュプランガー教授は、來朝せられた當初から「文化交換は常に交互的でなければならない。從つて、日本を學ぶと云ふ事が自分に課せられた大きな使命でもある。自分は日本の方々を『教へよう』などと云ふ僭越な考へは少しも持つてゐない。唯、我々の文化的業績を示して、參考に供したいと思ふだけである。新しいナチス獨逸の文化政策に就いても、日本の方々にも參考になると思はれる諸點に就いてのみお傳へしようと思つてゐる」と常に洩して居られた由であるが、私もそのやうなお言葉を伺つた記憶がある。この他國の文化に對する謙讓さ、これこそ同教授の所謂「文化形態學」を一面的なものに終らしめず、深く東洋的なる文化の本質にまで近よる事を可能ならしめた所以のものであらう。時として同教授の賞讃が、叱責以上に我々をして、我々の文化の根柢への深き反省をうながすのもその爲である。人は「文化と諸文化」について實に豐かなる教示を「文化哲學の諸問題」の中に見出し得るであらう。また文化の核心はその文化の價値に對する民族的確信と、かかる價値を創造せんとする意志の中に存在することを力說されたことを私は忘れ得ない。

「現代文化と國民教育」に於ては、かかる文化哲學の上に主として教育の問題が論ぜられてゐる。その中「近世獨逸に於ける國民教育の發展」は同教授の教育學史的造詣の深さを示す力作であり、フレーベルについての一篇を、私は感激なしに讀むことは出來なかつた。また「青年期の教育」「醫術と道德」の如き實際の教育に從事する人、及び經世家にとつて見逃すべからざる文字であるであらう。

私はこの短い紹介を終るにあたつて、そこにいかに豐かなる具體的內容と深く透徹せる思索が結び合はされてゐるかを傳へ、重ねて小塚氏の流暢なる譯筆に敬意を表しておきたいと思ふ。

（文化哲學の諸問題　昭和一二、一〇、一五
菊判　二七六頁　二・〇〇
現代文化と國民教育　昭和一三、三、二五
菊判三〇六頁　二・二〇　神田區一ッ橋二ノ三　岩波書店）

ローゼンベルク著
吹田順助・上村清延譯

二十世紀の神話

その根本思想は一九一七年にまとめられ、一九二五年には大體書き上げられてゐたと著者のいふ本書初版の發行は一九三〇年である。次いで一九三一年には第三版の序を書き添へ更に一九三七年には五十萬部出版の序を書いて「それは、この著が獨逸國民の生活の一片となり、新しい未來に向つて勇敢に突進せんが爲に、時代遲れの考へをかなぐり捨てるだけの勇氣をもつた數百萬人を內面的に占有することが出來たことを示すものである」と豪語するに至らしめ今やナチスの聖書とまでいはれるに至つてゐるのである。

それほどにこの本は大した本である。それを今われ〳〵が譯本によつて讀み得るに至つたことは、吹田・上村・國松諸氏の努力によるものと感謝せざるを得ない、譯は各部において優劣は認められるやうであるが、譯者の苦心の程は十分に察することが出來る。

この書はアーリアン人種の、その實はゲルマン民族の讃歌の書である。嘗て「西洋の沒落」を唱へた西洋自らの聲に對

立する「西洋の建設」といつてもいゝものである。この書はまたアーリアン人種の血の純潔を遵奉し、異人種の混血を殊にユダヤ人の血を憎惡することわれ／＼日本人の想像も及ばぬ熱血の書である。この書はアトランテス神話より始まる所謂北方西洋的文化の系統を探ね、ゲルマン的文化を謳歌し讃美する書である。それ故この書においてはゲーテも民族的なものとしての面を強調せられざるを得なかつた。第二編ゲルマン藝術の本質は蓋し本書の最高潮であり、著者の最も得意とする壇場である。この書は更に印度を、支那を、その該博豐富な詩藻をもつて論じてゐるのであるが、わが日本については、その認識のあまりにも貧弱なことにいふべき言葉がないのである。この書はつまるところ歐羅巴の書であり、眞實には獨逸の書であると思はれる。併しかくも高らかに、意氣軒昂と獨逸精神を高唱してゐるものはあるまいと思はれる。その意味でわれ／＼の一讀に値するし、その豐富な材料とその自由に徹底的な取扱とは十分にわれ／＼の興味をそゝり感歎を喚び起すに足るのである。尚またその所謂意志的行動的ゲルマン精神なるものは、確かに今後の日本人にとつても學ぶべき多くのものを包含すると思はれる。

（昭和一三、八、一三　麴町區丸内ビル内　中央公論社
菊判　五六三頁　二・八〇）

青木誠四郎著

青年心理學

本書は多年青年期の心理學を研究した青木誠四郎氏が、青年教育實踐の基礎として青年に對する心理學的研究を組織附けたものである。

「序論」に於て青年期とは何かを説明して、この期間に最も顯著に精神の動搖が認められ、能力の停滯、異常な性格轉換さへ起つて、人生の所謂第二の誕生期であるとする。

「本論」に於ては第一「青年の身體」に於て心身二方面の發達的特徴を論じ、第二「青年期の精神的特性」に於て青年の知性發達、感情興奮性の增大、性的覺醒、自我の自覺等青年心理の基本的特性及びその形態の變化を説述してゐる。以上は抽象的概念的に青年心理を捉へたものであるが、第三に「青年生活の諸相」なる標題下に青年の精神行動、生活面の具體的分析が企圖されてゐるのは、注目に價する。此處に、第二に於て指摘された基本的特性が、具體的な生活の諸相に於て如何に具現されるかを觀察し、一、青年の官能的傾向、二、青年期の社會生活、三、訓戒叱責の態樣とその反應、四、青年の生活理想、五、農村生活と青年、六、青年期と犯罪、

のそれぞれの項に分ち、多くの文獻及びテストに據つて詳細に考察してある。

最後に「青年期の研究」として研究そのものを論題として今迄の研究の歷史的發展を概括し、今後用ひらるべき研究の方法として從前よりの觀察、記述法、了解心理學的方法の外に、實驗的方法、日記法、作文法、質問法、社會統計の觀察と事例蒐集法、習俗制度の分析及び比較法、その他を擧げ、青年研究の現狀は未だ不完全で、從つて「今後にその發展を俟たねばならぬ」と結んでゐる。其の外に附錄として二宮綾子氏の研究論文「女子青年の涕泣」が掲載されてゐる。

本書を通讀して第一に氣づくことは、著者の文章が極めて平易で呑み込み易く書かれてゐる事であり、第二は青年心理に關する事項が殆ど剩す處なく取上げられ、日本の文獻や習俗等が相當豐富に取入れられてゐるため親しみ深い感を與へる事、更に質問法其の他により蒐集した資料を巧みに組合せて青年の現實相を描出する事に多大の勞を費してゐる事も、本書の特徴であり、示唆多き點である。

（昭和一三、五、三〇　神田神保町一ノ五五　賢文館
菊判　三五九頁　三・二〇）

村上瑚磨雄著

ドイツ精神

獨逸國民性の眞に優れた點を紹介して、わが國民にとつて他山の石たらしめんとしたものである。獨逸民族が非常に優秀な民族であることは、その過去の文化活動、軍事活動が充分實證してゐるが、更に敗戰國から起ち上り、恐ろしい困苦を克服して、現在の如く再興し、再び列强に伍してゐるのを見ると如何に獨逸國民が不撓不屈の精神に富んでゐるかを知ることが出來る。かうした一致團結の精神と不屈の意志力とはわが國民と軌を一にするものがあるが、一方、情感を主とする傾のあるわが國民に較べると、所謂科學的と云はれる獨逸國民は面白い對照をなしてをり、わが國民の學ぶべき點が多々あると思はれる。

著者は成城學園、鎌倉師範、東京女子外語等に歷任、先覺的な教育家として知られてゐるが昭和五年渡歐、同六年より親しくギーセン大學に入學して教育學を專攻し、哲學博士の學位を得て歸朝された。その滯獨中、親しく獨逸上下各層の人々と交り、又各地に民俗を知ることに努力された。本書はかゝる綿密な實地觀察に基いて出來上つたもので、主として

日常生活に現はれてゐる獨逸民族の驚嘆すべき民族精神を描いたものである。從つて豐富な事例に富んだ平易な讀物風のものであつて、所謂獨逸精神を正面より抽象的に論じたものではない。氣輕に讀むことが出來ると同時に、如何に獨逸民族が日常生活に對して、理智的に、科學的に、よく物を考へて行ひ整頓と規律を重んじてゐるかを知ることが出來る。かうした點ではわが國民とは全く對蹠的であるやうに思はれ、大いに學ぶ可きであらう。敢て一讀を薦める次第である。

（昭和一三、二、一　神田區神保町一ノ三　富山房
四六判　三〇九頁　一・五〇）

平井巽著

指導原理としての佛教學

佛教の教義を體系的に叙述することは專門家にとつては左程困難な事ではない。又佛典にあらはれた聖句を中心としてこれを敷衍した所謂聖典講義風の書も尠くはない。だが專門に流れず通俗に墮せず、佛教の教義を古今東西の哲學思想文藝等と關說し、然も終始實際生活の指導を念とするものは蓋し多くはあるまい。

本書は著者が大阪帝大佛教青年會に於いて昭和七年以來一般人の教養と實踐のために講ぜられた佛教倫理學の講演の一部を集錄されたもので、目次は次の如し。

人生を思索する—理想主義的人生觀—哲學と宗教と生—生命充實の根本原理—諸法實相として無我—道德原理としての無我—辯證法的實踐論—煩悶解決の論理的根據—唯物論と唯心論の問題—完全人として教養—教育と宗教と人材育成—指導者への指導原理—佛教の社會事業概觀—政治と宗教と中道—經濟の道德宗教化—理想社會の八大典型—科學の使命と宗教の立場—迷信奇蹟の解剖と最高宗教—信仰の論理と正信の基準—道德と法律と宗教—藝術の世界と宗教の世界—寂びと溢味の藝術

各標題は一見極めて難解に見ゆるが、該博な識見、透徹した叙述、豐富な引例、適切な圖表によつて極めて平易に記されて居る。

何れの題目も一冊の內容となり得る程の大問題であるから是を僅々四百頁未滿の此書に於て說き盡すことは不可能に屬する。從つて叙述を簡單にするために各章に多くの圖表が挿入されて居り相當字組が込み合つてゐるために讀みづらさを感ずるけれども本書は一氣に通讀し終るべき種類の本ではなくて、一講々々を味讀して著者の透徹した佛教的人生觀に觸れ日常生活の指針とすべきものである。

佛教を哲學的に研究し、又日本文化に對する佛教の功績を追憶することは專門家の研究に委ねて差支へない。一千有餘年間我國民の生活を指導して來た佛教が如何なるものであつたか、そして今日以後の國民生活の指標とすべきものは何であるかを知らんとするものにとつては、本書は極めて有益な指針を提供すると信ずる。

（昭和一三、三、二〇　芝區芝公園七ノ一〇　大東出版社
菊判　三八五頁　二・五〇）

增谷文雄著

佛教思想物語

「佛教は宗教にあらず」これは宗教とは神と人との關係の上に成立するものとのみ信じて居た一部歐米宗教學者のあやまれる斷定である。

然しかく斷定せらるゝに至つたのには、佛教が他の宗教と異なる特色がなくてはならない。本書はこの問題を「佛教はいかなる宗教か」の題下に「自覺の宗教」「眞理の宗教」「修行の宗教」として分說されて居る。

次に佛教の分派は「佛教の宗派を語る」に說かれてゐる樣に、我國に現存するもの十三宗五十餘派に及んで居り、其の說く所は一見氷炭相容れないものゝやうである。これ等の宗派を一貫する根本原理は、本書第二項「佛教の根本原理」に收められて居る。

第三項の「佛教生活の諸相」はあるべき佛教生活を示したもので、「三衣一鉢」に佛教の簡易生活を、「和合反省」に教團生活の內容を、「諸惡莫作」に世間の道德的生活との相異を說き、最後に現在に於ては佛教の全體であるかの如く見做されてゐる「供養と追善」「生天と往生」等の佛教的意義を檢討してゐる。

基督教に於ては一卷の聖書はよく該教の全般を包容して居るとされて居るが、佛教經典は廣汎多岐五千餘卷を數へられる。これ等については「佛教の經典を語る」の項下に「經典の結集（編纂）」阿含經並に大衆の四大經典たる「華嚴經」「般若經」「法華經」「涅槃經」の大要を述べて居る。

著者は序文に於て「私は何よりも先づ現代人の言葉を以て佛教を語ることに力を入れた」といふてゐるやうになるべく難解な術語をさけ、已むを得ないものは卷尾の「佛教術語の解說」に懇切に說明を施して居る。又隨所に佛典に基き適切な比喩・物語を挿入して諒解に便ならしめて居るから何人にも理解され得るであらう。

（昭和一二、一一、二五　神田區神保町一ノ二二　同文館
四六判　二三五頁　一・〇〇）

第二　歴史・傳記・地誌・紀行

林彌三吉　著

楠公を語る

楠公の本日本歴史に載つてゐるところはその三十九歳より四十三歳に亙る五年間、正味にして三年八ヶ月にすぎないといふことであるが、その誠忠の萬古不朽であり、現下の時局に於ては楠公精神は一層其の輝を増すものといふべきである。

この書は多年楠公を敬慕し、其德の顯彰に力を致しつゝ著者が新聞社の請に應じて公の行歴を講述したもゝ集錄で、全部總ルビ付二二六頁の小冊であるが、公の幼年時代より湊川の陣歿に至る生涯を手際よく且つ平明に叙述されてある。

特に著者が武人である關係上、楠公の戰術については著者の旅順攻略戰等の體驗に比較しつつ一般人にも理解し得られるやう興味深く說述されてゐるので、一般史書に見ることの出來ない活氣が横溢してゐる。

然し著者は決して戰術家として楠公を顯彰せんとするものではなくて何處までも智謀に裏付けられたその誠忠を語らんとするものである。かくて結論に於いては楠公の犧牲心、實踐躬行、武人としての職分に殉ぜられた點を强調し楠公を以て單なる忠臣とせず、大哲人として居る。

時局は痛切に國民の滅私奉公を要求して居る、從つて楠氏の忠烈を回想することは決して徒爾ではない。敢へて本書を推す所以である。

（昭和一三、一一、二〇　神田區神保町三ノ六　文友堂
四六判　二二六頁　一・五〇）

菊地又祐　著

乃木希典小話

—私を訓へた大叔父乃木將軍—

著者は乃木將軍の姻戚の人。將軍逝去の時十七歳であつた著者が物心つく頃からその最後に至るまでの將軍夫妻の私的生活の半面を語つたものである。

乃木將軍傳は色々の人によつて語られて居りその將軍觀も區々であらうが、軍神として又東郷元帥に比して薄幸の將として畏敬せられて居る點では、その見解は一致して居ると思ふ。

將軍の私生活殊に家族若くは近親に對する態度と、部下若くは一般の人に對する態度とが如何であつたかについて自分は比較研究をしたことはない。しかし近親の見た將軍と、全然他人の見た將軍との間には多くの一致もあるであらうが、又一致しない點のあることも、筆者の體驗からも首肯される。

さうした意味に於て、本書は將軍の半面を識る有力な資料を提供するものといつてよいであらう。著者は序に次のやうに言つてゐる。

私が乃木將軍の追憶を、物語るのは、何も、その書いたものを、興多からしめやうと云ふ爲ではない。また、廣く、多くの人々に讀んで貰はうが爲でもない。……

唯私は、私が、折にふれ、事につけて、接した、何かの事實を、正直に、卒直に、語つてみたゞけである。勿論、乃木將軍の、全部を語らうと云ふのではない　それには、自ら他に人が、あるだらう、私はその人達に、幾分でも、乃木將軍を、研究する、その材料としてかうした私の小さい著書が、寄與する處あれば、それで滿足なのだ。

從つて隨處に一本調子な冷徹な將軍の風丰が出て居る。そしてともすれば、將軍に對する親しみを減殺せしむるおそれがないではない。然し著者は、その冷徹な將軍の日常生活・言動を通して、將軍の眞骨頂を掴むことを心がけて居る。近親の故ではなく、眞に將軍の偉大さを沁々と感じて居るのは、現在の著者の心境であらうと思ふ。

今の教育は被教育者の身心の發達をその規準とし、古い教育者を中心とする。己の受けた教育法によつて人を教育するのが過去の教育法であつた。これも必ずしも乃木將軍の教育に限つたことではない。さうしてそれが必ずしもあやまりではない。斯ういふ見地から現代の教育を見なほすことも必要ではあるまいか。

最後に　明治天皇の御不例、崩御の際に於ける乃木將軍の

動靜が語られて居る。將軍の痛ましい心境には自ら眼頭が熱くなるを覺える。

（昭和一三、一、三一　目黒區下目黒二ノ三七二　第一出版社　四六判　三五五頁　一・八〇）

外務省情報部　編

「國際讀本」の意味

尾崎秀實

外務省情報部編の「國際讀本」は二月の始め第一卷の支那讀本が出てから今日までに、第二卷伊太利讀本、第三卷中南米讀本、第四卷ソヴエト讀本、第七卷英吉利讀本、第八卷亞米利加讀本、第九卷滿洲讀本と既に七卷を出し殘り三卷をもつて一應完結するらしいのである。第一卷の支那讀本などは既に十九も版を重ねて居り、讀書界の支持の程もうかゞはれるのである。

河相情報部長の發刊の辭によれば、時局に關する出版の「或ひはあまりに高踏に過ぎ、或ひは執筆の用意に缺くるところもある」のを斥けて「時局解說の正宗たらしめん」とする意氣ごみの如くである。從來あまりに高踏的であつた外務省自ら、かゝる積極的態度に出で來つたことは喜ぶべき現象である。

もとより全般的批評の紙數を許されてはゐないから、二三氣のついた點をのべ望蜀の希望を副へるにとゞめよう。

この讀本が現在非常時局の影響下の所產であることは、この讀本の長所であると共にまた時に短所でもあり得る。一體に戰時調を帶びてゐて、必ずしも劃一的な構成を示してゐないことなどは誰にでもすぐ氣のつくことであらう。中南米讀本を讀むものと滿洲讀本を讀むものとは、全然異つた空氣を感ずるに違ひないのである。滿洲讀本の如きは多分に筆者の所謂滿洲「イデオロギー」が盛られて居り、宣傳案內記の色彩を帶びてゐる。滿洲讀本に於ては歷史的叙述の意味なきことを攻擊してゐるに反し、たとへばアメリカ讀本の如きは全篇の半以上が歷史的記述を骨子としてゐる。中南米讀本は地理讀本的性質を帶びてゐる。

筆者が異り、對象たる各國の事情が異るのであるから無理な劃一は無意味であるが、多少內容構成の統一をとる必要があるだらう。

流石にいづれも現實にその土地を知り、事情を知つた人が書いてゐることが感ぜられる。いづれも手際のいゝものである。時としてわる達者にさへ見える程ジヤーナリスチツクであるのも讀本の性質上長所の方に入るべきものであらう。全體としてもつと易しく書いてもいいと思はれる、大衆の中に國際問題の理解を持ちこむのが第一の使命であらうから。

ところで寫眞だけはもつと美しい印刷にならないものであらうか、地圖のすぐれてゐるのは支那だけで後はおほむねお義理につけた如き觀がある。菊版百頁內外であの體裁なら、五十錢であまり安い方ではあるまい。

日本の長い封建時代の鎖國主義は、物質的文明の上での立ち後れを取り戻した後でも民族の種々なる意識の上に幾多の後進性を殘してゐる國際的環境に對する理解の缺乏はその特徵の一つである。近年における種々の國際的變革の渦中に投じた際の我が國人の國際的認識について深く考へさせられるものがある。

この意味に於て外交問題についての指導本部たる外務省の情報部からこの種の啓蒙的讀本の出たことはまことに時期に適したものといはねばならない。

然しながら我々が注意を喚起したいのは單に啓蒙するといふだけでなく、それにも益して重要な啓蒙の仕方である。

もしも眼先の必要からして事實や考へ方を歪めて客觀性を失はしむるならばわざはひは必ずや將來に現はれるに違ひないのである。

我々はこの讀本に生き生きとしたものであると共に、一時的でなく恒久性をもつた讀本として繼續して行くことを要求したいのである。

（昭和一三、三—四　芝區新橋七ノ一二　改造社　菊判　各約一〇〇頁　各〇・五〇）

田中好　和田篤憲　著

東海道

歷史と云ふものにその國の民族の傳統が窺へるやうに、地理——も少し廣い意味の言葉を用ふれば風土と云ふものにも、同じ樣に民族の匂ひがするものである。

例へば鎌倉、こゝは賴朝が開幕して所謂武家文化の輝かしい歷史を有つ土地であるが、今日電車が通ひ、自動車が馳り、道路は舗裝されて近代文化の粹を集めてゐる。然し一度この地に足を運び、鶴ヶ岡八幡の大銀杏を仰ぎ、稻村ヶ崎に松籟を聞く時は、忽ちにして影も形もない實朝を偲び、義貞のことを懷はざるを得ないのは全く不思議と云ふより外はない。この本の著者も云つてゐるやうに、歷史と地理とがどのやうな微妙な關係を有つてゐるかは、その地を踏んで始めて

解ることである。

この本は、その様な不可分の狀態にある歴史と地理の關係を、徳川時代最も交通の頻繁であつた東海道に於て描き出さうとしたのである。著者の一人田中氏はその序文からも推察出來るやうに土木技術家である。故に所謂東海道今昔物語と多少趣を異にして、東海道の東海道の所以たる變遷について、極めて近代的な感觸を以て執筆されてある。例へば由比附近では「西倉澤の附近で海道と鐵道と交叉してゐる危險な箇所を除く爲に、昭和七年内務省の手で、長さ二二三五米を幅員二・七米に改良し、コンクリートで路面を舗裝しました。之には九十三萬圓も費つてゐます。之と並んで由比川に架けられた由比橋も、昭和七年靜岡縣の手に依つて架換せられました。云々」と記されてある。勿論この地が由比正雪の出産地であること、その正雪がどんな人物であつたかなどと云ふことも落す所なく記されてある。

斯樣なわけで讀んでまことに面白く、知識的であると共に趣味的なものとして、又程度から云つても中等學校生徒以上なら誰でも面白く讀める比較的讀者層の廣範圍のものとして一般にすすめ度い。

（昭和一三、四、一六　小石川區諏訪町五五　好文館

四六判　三二五頁　二・〇〇

長興善郎著　少年滿洲讀本

長岡伊八

滿洲事變勃發後今年は既に八年目に當る。その間滿洲には非常な變化が起り昔日の滿洲ではない。種々の試練を經た結果今日では皇帝を戴く立派な獨立國となり、日本初め「サルヴァドル」、獨逸、伊太利諸國の正式承認を受け、其の他の國との間にも修交條約締結の議ありと聞いて居る。露國も北鐵讓渡の契約を結んで居る等の點から見て事實上の承認を與へて居るものと云ひ得る。爾餘の國際聯盟加入國と雖も「リットン」報告當時の如く、之を支那の一部と見るとか支那の宗主權を認めよう等と云ひ出し得るものは恐らくあるまいと思ふ。只從來の主張並對支關係等の點に鑑み、今直に正式承認を與へ得ないであらう。内部に於ても各般の制度整備し、治安の改善、產業交通の進歩發達、實に著しきものあり、之を滿洲事變當時に比すれば雲泥の相違と云ふべきであらう。從

て我日本は治外法權を撤廢し滿鐵鐵道附屬地行政權をも返還した程であつて、滿洲國の前途實に洋々たるものあり、誠に慶賀に堪へない次第である。只滿洲國の獨立は日本と不可分關係に立つ所に其の特異性を認められるのであり、又滿洲が日本の生命線であることに今日と雖も何等變化はない。何等かの原因に依つて一度滿洲の治安が亂れんか、又他國よりの侵害を受くるが如き事態發生せんか、それは直に我日本の存亡に關係して來る問題である。そして滿洲の開發は日本の人口食糧問題解決に重大なる關聯を持つてゐる。

斯樣な關係にある日本としては、滿洲國の誘掖指導に力を注ぎ決して策を誤つてはならぬ。極く細心の注意を以て臨む必要がある。從つて問題はまだ〳〵今後に殘されて居るのである。之が爲日本の誰もが滿洲の實態を充分認識する事は必要缺く可からざることである。然るに事實は果して如何であらうか。聊か疑念なき能はざるものがある。頗る極端な例ではあるが、旅順に馬賊が出ませぬかと尋ねる人があるかと思へば、又滿洲にさへ渡れば何等勞せずして千金の富を爲し得るものと夢を見て居る人もあるやうだ。甚だ以て心細い話で、此等の人々には日滿不可分の關係も過去の歴史も亦現に在滿同胞が如何に滿洲國開發の爲に苦心して居るかも解る筈がない。尙燈臺下暗しの例もあり、滿洲に居り乍ら滿洲の實情をよく諒解して居らぬ人がありはすまいか。

少年滿洲讀本は此等の人々に是非とも讀んで貰ひたい本の一つだと思ふ。「少年」の字が冠せられて居る故、大人の讀むに足らぬ本だと早合點してはならぬ。文部大臣は其の序文の末に「一般の父兄家族の人達をも啓發し滿洲國を知らしめ之に親しましむるに多大の效果ある」旨を書いて居られる。私は寧ろ之は大人の讀むべき本だと思ふ。内容は「豫備の知識」と「旅程の上」の二大項目に分けてあり、一面地理書であると同時に他面歴史書である。滿洲の現狀を知る爲には是非其の歴史を知る必要がある。現在の日滿關係を解するが爲には、滿洲事變前からの日滿關係を承知せねばならぬ。滿洲事變は單に柳條溝事件丈で起つたのでなく深い原因があつたのだ。舊東北政權時代には今日の樣に日滿關係は明朗のものではなかつた。滿鐵關係丈けでもその權益侵害が一寸と數へきれない程あつたのである。此の事情が解らぬ限り滿洲國現在の機構が生れた眞の經緯は知るべくもない。「少年滿洲讀本」には此等各般の事情に亘り平易に說明を加へてあるから滿洲を知るに最も好い手引だと思ふ。全然滿洲を知らない人には主要都市丈を素通りするよりも却て效果的であり、又滿洲在住の人も一讀されれば成る程とうなづかれる點があると思考する。尙中に、日本人の滿洲に臨むべき態度に對する著者の意

見と見るべき點があるが、私は至極同感である。

（昭和一三、五、二〇　麹町區日比谷公園　市政會館内　日本文化協會　菊判　二八四頁　一・〇〇）

谷山　つる枝　著

滿洲の習俗と傳說・民謠

滿洲事情紹介に關する圖書は尠くはない。然しその多くは風土、經濟、產業、政治を中心とした案内記風のものや、旅行スケッチで、どことなくあはたゞしく且つ上すべりの感がなくはない。

本書は十餘年間滿洲生活を送つた著者が女性らしい精緻さを以て觀察した「住民と聚落」「性情の特徵」「儀禮と年中行事」「食物飲物」「住居の樣式」「服裝と裝身」「家庭及び趣味娛樂」を始めとし宗教、象徵、傳說、民謠等從來の圖書にあまり紹介されなかつた方面を取り纒め極めて平明な筆致を以て表現して居るから、本物の滿洲生活に接する思ひあらしむものである。殊に儀禮、飲食物、家庭生活の微細な點に至ると著者の獨壇場といつてもよいであらう。敎養ある婦人の精細なる滿洲民俗の紹介として一讀に値する。

內山　完造　著

上海漫語

歷史上より見た支那論、經濟關係よりながめた支那論、所謂支那通の支那觀、支那一巡記、支那社會記等支那關係の書籍は事變以來格別その數を增して居る。

本書は在滬廿七年、其の大部分を一書籍商として支那各層の大衆を相手とし、又多くの知人を有し具さに支那民衆と生活を共にして來た著者の支那漫談集である。

久しい間日支は東洋の二大勢力として相互に提携すべきことが論ぜられて來た。この場合一般には日本を中心とする一元的東洋平和が前提されて居るやうである。然しこの事が果して可能であるかどうかは頗る疑はしい。

眞の東洋平和は兩國民の心からなる提携であることも又屢々我々の敎へられた處である。然し、それにしては兩國民はあまりに他を知らなすぎるのではないだらうか。この書には日本人の生格、風習とは異なつた多くの支那人のそれが語られて居る。しかもそれには小にしては日常生活上のものもあり、大にしては一國の政治についての動向の底流が暗示されてある。

これ等の活ける支那民衆の生活は單なる机上の研究や十回廿回の漫遊によつて獲得出來るものではない。眞に支那語を解し、民衆の生活に直接する人によつてのみ把握出來るのである。

我々は日本人の性格をすてゝ支那人の性格に追隨することは欲しない。然しながら日本人自らの尺度によつてのみ支那人を律することは出來ない。又これによつて東洋の和平をもち來すことは不可能であると信ずる。

この意味に於て本書が事實に卽した支那人を提示してくれたことは多とすべきであらう。

（昭和一三、七、一八　芝區新橋七丁目一二　改造社　四六判　三五六頁　一・五〇）

長江　著
松枝　茂夫　譯

中國の西北角

後藤　朝太郎

中華民國の西北方面一帶は時局の重大性に影響され、近來頓に世人の注意を喚起して來た。日支事變の局面の進むにつれて、ソ支關係はいよいよ緊密の度を加へ來たり、中國の西北隅だからと云つて馬耳東風視するものは今やゐなくなつたやうである。日支の干戈を交へてゐる戰線の擴がれば擴がるほど、陝西・甘肅・青海・新疆の方面は北支や中南支同樣に目を張つて、その形勢を見てゐなくてはならなくなつた。ところが從來この方面は、西人の試みた學的探檢による旅行記の類としては幾種類も出てゐたが支那人自身による發表は比較的なかつた。少ないと云つても自分の手許にあるものを見ると三十餘種になるのである。

陝西の部
東西女學洞記　唐　杜光庭
華清湯池記　唐　陳鴻
登蓮花峰記　宋　王得臣

游玉華山記　宋　張岷
華山四記　元　王履
華山記　明　李裕
記棧道　明　楊慎
游終南山記　明　都穆
登華記　清　屈大均
商洛行程記　清　王昶
游華山記　清　王闓運
太白記游略　清　趙嘉祥
游喜雨亭記　清　徐文駒
游釣臺記　清　董詔
游磻溪記　清　喬光烈
秦還日記　韻秋
游南五臺記　段民逵
游華嶽記　袁布壽
華山游記　康耀辰

甘肅の部

青唐錄　清　李遠
首陽山記　清　（失名）
蘭州風土記　清　（失名）
泉蘭載筆　清　陳奕禧
青海考略　清　龔柴
蘭州瑣記　劍雄

泉蘭客語　匿交
隴游回顧錄　蛸厂

新疆の部

阿爾泰山附近情形　耐道人
新疆風土記　（西人集）
伊犂旅行記　（耿某譯）

これに肅州（崑崙山）・涼州・固原・平涼・漢中・鳳翔・西安等の西北名勝舊蹟の紀行類を集めて來ると百五十種以上に達するものがある。これらは何れも過去に於ける記錄といふに過ぎぬので、その現狀を見るにはおのづから隔靴搔痒の感があつた。ところが現代の中國西北角を紹介したものとして表題に示す如き好著が天津大公報の旅行記者として知られた長江によつて公にされた。續いて之が松枝茂夫氏の麗筆によつて正しく邦譯せられた。これは一九三五年の夏七月から一ケ年にわたり四川成都を立ち、大雪山を越え、甘肅・青海・寧夏・綏遠と著者が各省を親しく踏破したところの實際の內容多き記錄なのである。

自分たち平素支那內地を跋涉遊歷してゐるものから云ふと既に四川成都をふり出しに出發してゐると云ふことが大變なことなのである。上海から長江を溯ること千三百五十餘哩にして重慶に達する、そこから更に轎子で九日を要する（自動車なら二日間）といふ雲煙萬里の天涯にあるのが成都なのである。蔣政權が南京の舊首都を思ひ切りて重慶を臨時首都にさだめた事を考へて見るだに、何となく鰻の巢の奥に這入つた感じさへする。人口七十萬の住民が長江の江水を飲料水にとり、岩路をたどり水汲みに大童となつてゐることを思ふだけでも大變な處なのである。

又四川の土豪が白雲たなびく高峰の頂上にその住ひを構へ茂林で周りを固めてゐる現狀を見ると、更に中原支那と樣子の異なつてゐることが判る。巴蜀の天地を離れて更に漢中に西安に又蘭州に嘉峪關にとひろがり、著者の足迹の西北地方に普く行つてゐることは、日本人の目から見ると白雲鄉の天涯にも比べられるかも知れぬ。今旅行者の足迹を見ると、略その範圍の大體がわかる。

一　成都—松藩—岷—蘭州
二、蘭州—西安—平涼—蘭州
三、蘭州—西寧—張掖—玉門—敦煌
四、敦煌—玉門—酒泉—武威—蘭州
五、蘭州—寧夏—臨河—五原—包頭

これら邊境の各地についてその行脚中の印象と感想を一々述べ、古人の詩を偲び、古戰場を弔ひ、回教徒西藏人の社會には鋭い頭腦をひらめかせ、ラマと語らひ、寒外の桃源敦煌の古代文化の遺蹟に思ひを馳せ、歷史に地理に、民間生活にと周密なる觀察を試みてゐる。又寧夏の紙幣・鴉片・宗教から羊皮筏の奇習など他地方に見られぬ珍現象が面白く紹介されてゐる。これらは貴重なる十數個の寫眞版と地圖によつて、一段と興味深く讀者に印象づけられてゐる

日本では時局の關係から西北支那に目を配るものを昨今やつと見ると云ふ位で、本來その邊りの土俗・民族宗教の方面、わけても異徒との深刻な爭、軍閥と政治のいきさつ、中國共產軍の亂暴、勞農細民の生活苦と云つた方面のことにつけてはあまり注意を拂つてゐなかつた。本書出るに及んで、そのソ支關係のどうやら複雜味の加へらるゝことに平氣になつてゐられないだけに、我が讀書界にても親しくその實際の世相を一々掴まんとする情、切なるものがあるのである。巴蜀の地理風土でさへ大分中原から隔たり變つてゐるに、更にかうした西北支那の世相風物は、唐の時代から玉關の情として斷腸の思ひあらしむる處である。日本の讀書界には支那の新聞や雜誌書籍のわりに來なかつた爲め、いつもその眞價のあるものが知られずにゐることが多かつた。當局者の手加減もあることであらうが、なるべく良書の移入を希ひたい。こゝには本書原著者の勞を多とすると同時に譯者の飜譯奉公を謝し、併せて發行者改造社主山本大人の社主ぶりをうれしく思ふ次

第である。

（昭和一三、一、二〇　芝區新橋七ノ一二　改造社
四六判　三九九頁　一・七〇）

米内山庸夫　著

蒙古風土記

米内山庸夫氏は滿洲國興安北省海拉爾（ハイラル）に領事として昭和八年十月より在任二年十ケ月、その間、蒙古ホロンバイルの草原地帶を旅行すること數回、蒙古民族に接して彼等の生活を親しく見て來られた。本書はその間の見聞、觀察によつて執筆されたもので、ホロンバイルの自然と蒙古民族を語つて餘すところがない。

試みに滿洲の地圖　按じてみるがよい。ホロンバイルはシベリアと外蒙古とに挾まれて突出した地帶である。ソ聯邦の越境、外蒙との國境紛爭等の重要なる問題が繰返され、常に我々の關心を去ることがない。本書はこのホロンバイルの全貌を傳へるに最もすぐれたものと云ふべきであり、まことに貴重なる一本である。同時にその數頁を開いたものが直ちに感ずるであらうことは、著者の流麗な行文である。眼界の限りたゞつらなるは空と草のみで、一物も之を遮ろものゝない茫漠たるホロンバイル草原の風物を描く、詩情といさゝかの感傷をこめたその筆致は我等をしてこの大草原の草の中に身を置くの思ひを起さしめるものがあり、高雅な讀物としても又すぐれたものである。

著者は更に考古學、地質學に造詣が深く、またその寫眞撮影は素人の餘技を遙かに拔くものがあるとのことである。草原の中に點在する砂丘の谷間に石器を求め、玉を求めつゝ行くところを述べた條が所々にみられることや、豐富に挿入された大草原や蒙古民族の美しい寫眞は之を裏書してゐる。

大草原の旅行はその主なるものは三回であるが、いづれも海拉爾（ハイラル）を西に數十哩、ホロン湖、ボイル湖とこれを結ぶウルシュン河の流域につらなる大草原で、即ち蒙古民族の集ふて遊牧する地域である。一眸千里たゞ草につゞく草である。この間を時速三十哩の自動車を驅つてゆく時、めぐり逢ふものは數千の馬群、或は萬と數へて白雲の如く悠々と移動して行く羊群である。牧畜は蒙古民族の生活の全部である。彼等は馬群や羊群を追ふて移動し、草原の中に包（パオ）を組んで眠る。或は喇嘛教の信仰のために廟に集ふのである。かうした蒙古民族の生活や風習が詳しく述べられてゐる。又夏ともなれば百花燎亂と咲き亂れる草原の美しさが描かれてゐる。本書を

通讀して感じられるのは著者のホロンバイル草原と天眞流露の蒙古民族に對するなみ〳〵ならぬ愛着である。それは讃歌に近いものと云ひ得るかも知れない。云ひかへれば汚濁した文化に對する自嘲である。嚴冬には零下四十度に達する異境に外交官として住みつゝ、この感傷をいつくしんだ著者に深い敬意を表してやまない。

（昭和一三、八、一九　芝區新橋七ノ一二　改造社
四六判　四四七頁　二・七〇）

松田壽男
小林元　著

乾燥アジア文化史論

乾燥アジアと云ふ名稱は聞慣れない言葉である。著者はアジアをその地形地勢により乾燥アジア、濕潤アジア並にその中間に位置する亞乾燥、亞濕潤の四區に分たんと　てゐる。濕潤アジアとは日本・支那・印度等の海洋に接する地帶を指し、乾燥アジアとは中央アジア・西アジアの草原砂漠をその大部分に有する地帶を指すのである。そして著者の序文によると、從來の東洋史は濕潤アジアを中心として取扱つてゐるが、乾燥アジアは今日歐洲諸國の文化的植民地と墮し去つてゐるものゝ、嘗てはこゝを舞臺として大いなる文明の發達があり、今も尙ほ回教圏として重要なる位置を占めてゐるに拘らず、兎角閑却され勝ちであるのは實に遺憾であるとして中央並に西アジアの文化史を傳へんとするものである。本書は嘗てBKより放送されたものであるが、著者は更に之に加筆增補せられたものである。

全卷を中央アジアと西アジアの二部に分けてあるが、論述はいづれもその民族とその文化を說き、次にその文化史上に於ける意義を述べてゐる。この兩アジア共に注目すべきはいづれも乾燥地帶であり、從てその民族はいづれも遊牧を生業としたことである。然して遊牧生活の停滯を打破せんとする時、彼等は砂漠中のオアシスに集結した。即ち中央アジアにあつては東トルキスタン（支那新疆省）の天山南北路に多數の小獨立都市國家を建設し、西アジアはメソポタミヤの河間の沃土に國家を經營した。そして二者とも東西兩洋の貿易通路の位置を占めるが故に、仲繼商業的國家として隆昌を極めたのである。從つてこの兩オアシスが各民族の爭奪の中心となるのは自然の理であつた。即ち東トルキスタンにかける主權を奪ひ、商業圏中心地のヘゲモニーを掌握するためには支那、蒙古、チムール、ウイグル、サラセン等の諸民族が各時代に亙つて交互に覇を稱へて最後に突厥族即ち土耳古族の定

住するところとなつた。その間佛教、景教、回教が交易と共にこのオアシスを通過して支那、日本へ將來されてをり、又支那の絹、陶器等が希臘に移された。又メソポタミヤを中心とする商業圏の奪取にはイラン、イラク、イスラム、サラセン、ギリシヤ、オスマン等の諸民族が交互した。著者の主張するところになると諸民族の移動、攻略は凡てこの商業圏の擴大を主眼とするものであるとするのを結論としてゐるやうである。かゝる考察の論評はしばらく措くとして、本書が乾燥アジア文化の全貌を充分傳へてゐることは云ふまでもない。吾々は本書を通讀することによつて支那、印度の外に中央、西部アジアをハツキリと認識することが出來る。まことに優れたる良書である。

惜むらくは本書の行文に用ひられた用語が放送講演を基調とするにも拘らず、兎角聞慣れぬ言葉が多いことで、これは徒らに容易なる理解の障碍となつてゐるのが本書の短所であらう。

（昭和一三、七、五　豐島區巣鴨七ノ一六九四　四海書房
菊判　二四一頁　二・三〇）

スウェン・ヘディン著
岩村　忍　譯

中央亞細亞探檢記

別面に於てヘディンの「馬仲英の逃亡」を紹介したが、圖らずも相次いでヘディンの新疆省探檢記が譯出上梓され、再度ヘディンの著を推薦することになつた。前著も本書も等しく舞臺は新疆者であるが、前者が一九三五年の記錄であるのに對して、本書は實に一八九五年のものであり、相距ること四十年、ヘディンは當時、未だ白面の青年探檢家であり、而も初めて第一歩を新疆省に踏入れたのであつたが、白人にして嘗てタクラ・マカン砂漠を横斷したるものはなく、又その記錄は素よりない。ヘディンは死を懸けて之を成就し、最後にロブ・ノール問題に決定的な解決を與へた。かくて彼の功績は中央亞細亞探檢史上不朽のものとなつた。本書は貴重なるその報告書である。

本書は二部分からなり前編は「タクラ・マカンの横斷」後編は「ロブ・ノールへ」である。この砂漠横斷は最もスリルに富んだ報告であるが、ヘディン一行は死の一歩前まで行つたのであつて、この間に於けるヘディン初め隊員の不屈不撓の意志力は全く讀者を烈しくうつものがある。一行はカシュガールを出發し、まづマラル・バシイにて準備を整へ、次にヤルカンド・ダリヤに沿ふて南進、更に東折してコータン・ダリヤに到達せんものと砂漠へかゝつたのであるが、前人未踏の地域に踏みこんで一行の計畫は全く齟齬してゐた。即ち貯藏する飲料水は砂漠の中央に於て最後の一滴まで飲みつくされてしまつたのである。かくてまづ荷物を運搬する駱駝が倒れ、隊員に隨行する土人も倒れ、只一人ヘディンは着のみ着のまゝにて砂漠を彷徨し死の直前にして辛くもコータン・ダリヤの森林に達することが出來、水を得ることが出來た。ダリヤとは河のことであつて、この砂漠を横斷する河はなほこの外にケリヤ・ダリヤ、チエルチエン・ダリヤがあるが、いづれも蜿蜒として砂漠中を走り、鬱蒼たる森林を伴つてゐるものである。しかし、河水の奔流するのは夏季に於けるカラコルム山脈の雪解の季節であり、その他の季節には河床は地下水或は沼地となつて殘る外全く水を見ないのである。この事は我々の砂漠に對する常識には豫期しないことである。後編はコータンよりケリヤ・ダリヤを北上してタリム河に達せんとしたもので、この時も水盡きて再び一行は死の手に近づいたが、この時は比較的平易にタリム河に到着することが出來た。一行はコルラに進み、これより南下してロブ・ノールを探檢した譯である。

ヘディンの報告は「馬仲英の逃亡」に於いて既に知られる如く、筆致に味があり、單なる記錄として終らざるものである。本書の如きも讀者は一氣に讀了せざるを得ないのであらう。

（昭和一三、一一、一〇　神田區神保町一ノ三　冨山房
特小判　二六二頁　・六〇）

エラ・マイアール著
多賀善彦譯

婦人記者の大陸潛行記

著者は瑞西人で三十歳前後、波瀾に富んだ生活を經驗した鋭い氣鋒と朗かな性格の婦人である。既にコウカサスとロシア・トルキスタンの旅行記を發表して、ルポルタージュの大家として名聲を得てゐる。本書は昭和十一年、女史が「プチ・パリジアン」の特派員として北京を出發、青海、新疆の二省を經て印度のカシミールへ抜けた五千哩、二百數十日の紀行で塞外の荒地、沙漠、高山に起臥してつぶさに辛酸を嘗めた記錄であるが、觀察の緻密さと才筆とはみるべきものがあ

る。

青海省の紹介は得難いものであるが、清徹な乾燥した空氣の中に何哩にも擴つて凍りついてゐる青海や四百哩につらなる荒涼たる柴達木の大濕原の描寫は最も魅力に富んでゐる。更に新疆省へ入つてはタクラマカン沙漠南部に蟠居する東干人の世界が活寫されてゐる。就中、和闐に於て東干軍の總指揮馬芳三將軍との會見はヘディンの「馬仲英の逃亡」に描かれてゐるところの、ソ聯の勢力に對抗して、鋭意再擧の機會到來を待ちつゝある東干軍の後日譚とも云ふべきもので、女史は特に新疆省の政情について一章を設けてその經緯を詳論してゐる。更にカシュガルやパミール越えのあたりは本書中の壓卷であつて、同地方の民俗習慣や自然を知るに本書は得難い資料であらう。カシュガルでわが國のチェリーが喫はれてゐる等の面白い挿話も加へられてゐる。

（昭和一三、一一、二〇　四谷區愛住町一九　創元社
四六判　四六九頁　二・〇〇）

吉川兼光著

友邦洪牙利

ナチス獨逸の澳太利併合、續いてズデーテン地方の獨逸歸屬は歐洲をして再び大戰勃發の危地にまで追ひ込まんとして辛くも喰ひとめることが出來た。この機會に從來逼塞してゐた洪牙利は再び歐洲政局の表面に登場して、チェコはその版圖の一部を洪牙利に割讓するに至つたと傳へられる。歐洲大戰に於て同盟軍に參加したため慘敗を喫して歐洲の片隅に屏息せしめられたる洪牙利は玆にやゝその氣息を回復しつゝあると云ふべきである。我々は餘り洪牙利に就ての知識を持たない。ドナウ河がその中央を貫通し、ブタペストをその首都とする等の小量の知識をもつに過ぎない。然るに洪牙利は親日敬日に於ては歐洲第一であると著者は述べてゐる。著者は滯歐中昭和十一年三月、五月の二回に亙り洪牙利を親しく訪問し、講演、放送等を行つたが、その際非常な、豫期せざる大歡迎を受けた經驗を述べてゐる。

洪牙利の親日の一例をあげると、同國は日露戰爭の時、英國を除いては日本に對して好意を持つた唯一の國であつた。日本の戰勝を祈念し日本の勝利が決定せられた時、國民はわが事の如く狂喜したと云はれる。更に歐洲大戰當時露西亞に捕虜となつてゐた同國民が西伯利流謫の際、當時西伯利に出兵せる皇軍の厚遇に感激、歸朝後親日に拍車をかけるに至つた。現在はもとより、嘗て日本人の一人もゐない時に既にブタペスト大學には日本語の講座が設けられ、日本語を理解するもの三百餘人に達したと云はれてゐる。現在日洪協會が兩國親善の楔子をなしてゐる。しからばこの洪牙利の親日の原因は奈邊にあるかといふと、それは同國民の信ずるツラニズムに由來するのである。洪牙利國民卽ちマヂヤール族はウラルアルタイの北方より出で歐洲に入つて現在の地に定住したもので、歐洲に於ける唯一の東洋民族である。而してこのアルタイ山系より出發せる民族は二つに分れ一つは日本、朝鮮滿洲、蒙古に擴り、一は西走してマヂヤール族になつた。故に洪牙利國民は日本と血緣であり、兄弟民族であると信ずるのである。この說はもとより確實なる證憑もなく、學術上も承認されてゐる譯ではないが、元來洪牙利の名稱は匈奴に發してをり、嘗て匈奴の版圖に屬してゐた。その後アヴアレン族の時代を經てマヂヤール族の古據するところとなつたものであり、東洋に由緣深いことは否定できない。兎に角洪牙利が親日敬日國であるのは我國にとつて祝福すべきであり、友邦洪牙利を充分に理解認識してをくべき必要と義務が我々にあらう。本書はかゝる要求を充たすために生れでたものであり著者が該地を訪問した際、文部書記官ナジイ・イストワン氏から贈られた「文化案內書」に基いて叙述されたものである。民族移動より、建國、光輝ある墺太利征服、墺太利への併合等より新洪牙利王國の創建に至る歷史を第一として、同國の現勢が詳細に述べられ、之を補ふに豐富に寫眞が挿入されてゐる。稍々記述的にすぎる缺點はあるが、親日洪牙利を紹介する良書として一讀を薦めたい。

（昭和一三、九、二〇　赤坂區表町三ノ二四　新英社
四六判　二七八頁　三・五〇）

飯塚浩二著

北緯七十九度

この北緯七十九度とはスピツツベルゲンを指してゐる。本書は卽ち一九三三年佛蘭西のダンケルクを出航した夏季遊覽船フーコー號によつてスピツツベルゲンまで旅行した著者の紀行である。歐洲の旅行記は甚だ數多い、しかしそのコースは型の如くである。挿入されてゐる寫眞も亦見慣れたものが多い。僅かに安倍能成氏の「フイヨール行」が諾威の西海岸の美しさを傳へたのみであらう。然るに本書は我々が未だ知らぬフエロエ、氷島、ジヤン・マイヤン、北極圈、スピツツベルゲンの印象をその流暢な筆致を以て語つてゐる。著者は現在、外務省文化事業部の囑託であるが、この旅行の際は巴里大學に在學中であつた。

フエロエとはスコットランドより二二〇浬の海上に浮ぶ玄武岩臺地よりなる一小群島で、北洋の中に「粗らく層を示して露出する岩肌のはざまを雜草の埋める」荒涼たる風物は遊子の旅情をそゝるものがあらう。イスランドはわが國にお馴染のピエル・ロティの「氷島の漁夫」によつて親しみがあり歐洲の觀光地として最たるものである。昔は海の王者ヴイキング達の活躍の地であり、今は海の幸に輝く島であるジヤンマイヤン島は誰もが、その歐洲地誌の記憶の中にはあるまい。しかし諾威政府はこの絶海の孤島に觀測所を設けて、ラヂオにより嵐の襲來を豫報させてゐる。フーコー號が通過した時、人の世のたよりの懐しさにか、合圖の如く島から狼煙があげられたとある。スピツツベルゲンは北極探檢の根據地マグダレーナの氷河の美しさは恍惚たるものがあるといふ。

更に本書には南歐プロヴアンスの洞窟に先史人類の描いた繪をみるの記とテイロールの滯在記がある。考古學紀行もさることながら、インスブルツクの初秋の澄んだ美しさは著者の麗筆を以て、私等をして異郷の風物の中にあるの思ひを抱かせる。まことに得難き美しい紀行集である。

（昭和一三、六、一　神田區神保町一ノ一　三省堂
菊判　二六五頁　二・五〇）

第三　政治・法律・經濟・社會・教育・兵事

尾崎　咢堂　著

日本憲政史を語る（上・下）

これは尾崎行雄氏の自叙傳である。憲政の神樣といはれる程に、その全生活を日本憲政の爲めに打込んで來た尾崎氏の生活記錄であるから、それはそのまゝ「日本憲政史を語る」ことゝもなるのである。

全世界を通じて獨裁政治の傾向が強く、議會政治の危機が叫ばれてゐる今日、わが國に於ても同樣のことが避けられざる運命であるかのやうに考へられてゐる。しかし尾崎氏によれば、

日本に於て、立憲政治とは、申すまでもなく、一君萬民の政治である。萬民心を一にして、皇謨を翼賛したてまつる政治である。いかに强大なる權力を與へられたりとも、これを濫用するを許さぬ政治である。眞の擧國一致とは、高壓的に上から强要されるものではなくして、下から組み上げられる大組織である。そこに立憲政治の妙味がある。上から强要しなければ、擧國一致の實があがらぬと考へるが如きものあらば、それは日本の國民性を輕侮するの甚だしきものといはねばならぬ。

だからわれ〳〵は、今日假りに立憲政治が不滿足な狀態にあるとしても、早急にそれを落膽し、これを見限つてはならないのであつて、明治天皇も「不磨の大典」と宣はせ給ふた帝國憲法によつて行はれる政治―「憲政を、一歩づゝ進歩發達せしむるために辛抱强い努力をつゞけねばならぬ」のである。

尾崎氏が本書を世に送られる本意も結局は、これがわが憲政の進歩に寄與するところあるを信ぜられるからである。

本書を讀むと、尾崎氏が眞にわが憲政の發達に多大の貢献をせられたことがわかるのであつて、極端ないひ方かも知れないが、若し一尾崎氏の存在をわが憲政史から除くならば、それは恐らく今日のものとは異つた方向へ進んでゐたに相違ないとさへ思はれるのである。

（昭和一三、四、五　小石川區竹早町三五　モナス
四六判　上、四八七頁　下、四九〇頁　各一・八〇）

尾佐竹　猛　著

明治政治史點描

尾佐竹博士の近著としては別面「日本憲政制定史要」を紹介推薦したが、本書も殆ど之と時を同じうして出版され、內容の上からも關係する所深いものである。

第一章「政治の時と人」はそれ自身一つの完結した小論文と見るべきもので、古代より現代迄の各時代に於ける政治とその時代を背景とした政治家について概說したもので、極めて簡單に記された日本政治史と云ふことが出來、本書に於ては正に「序論」と云ふ立場のものである。次に文武對立問題、軍人と政治、軍隊勅諭發布の時代、西南戰役に關する一考察の題下に、明治初年の政界に於ける軍人の占めた位置並に西南役を契機に次第に軍人が政界の第一線より後退して行つた經路が示されてある。次は明治政治史の中最も重要で華やかであつた憲法制定と國會の問題、並に之に關聯した政黨の問

題が集められてある。例へば政黨の發生、憲法草按の先驅、憲法論爭の追憶、藩議院と地方民會、伊藤案以前に於ける憲法諸按等。又司法權の獨立と大審院の創設の一文があるが、之は法律專門家としての博士の獨壇上とも云ふ可き研究で、實證史家として又法律學者としての著者の面目の最も躍如たるものがある。

然し大體に於て本書は研究書であつて平易な讀物ではない。記述は平易であるが內容は明治政治史樂屋咄とも云ふ云き玄人藝に屬するものと思はれる。それだけにこの方面の研究家にはなくてならぬ名著である。

（昭和一三、二、二〇　神田區錦町三ノ二〇　育生社
菊判　三〇五頁　二・六〇）

尾崎秀實著

現代支那批判

日本本國の人々の、わけても都會人の、支那事變或は日支關係に對する無關心が屢々問題にされてゐる。しかし苟しくも日本國民の中に今日の時局に對し冷淡無關心なものが一般的にゐようとは思はれぬ。必ず日支關係が眞面目に話題に上るではないか。が、それにもかゝはらず、一般に日本人の對支認識が極めて不確なのであることは、これを認めざるを得ないであらう。

實際のところ相當の識者といはれる人々の間でさへも、初めからこの事變の重大性を充分に覺つてこのやうな長期戰に發展する場合に對して日本國民としての心構へが出來てゐたとはいへなかつた。「上海をとれば支那が參るであらう」「南京が陷れば勝負は決つたのである」などといふことが一般民衆ばかりでなく、指導的地位にあるものゝ間でさへも考へられてゐたのではなかつたらうか。

このやうに一方に於て日支關係に對する國民的關心が盛んなのにかゝはらず、かくの如くこれに對する認識が不足してゐるといふことは一つには支那自體の國家、社會、經濟等の構造の特殊性複雜性によると思はれるが、また民衆の立場からいへば、われ〳〵がこれを正しく認識するためのよき手段に乏しいのだといふこともあるのである。いふまでもなく、この國民的要求に應じて、ジャーナリズムは筆を揃へてこの問題を取扱つてゐるし、支那或は支那事變に關する著書も汗牛充棟といつていゝ程次々に出版されてゐる。そしてそれ等の筆者はそれ〳〵「支那通」といはれる人々である。

だが、これ等多くの支那或は支那事變觀乃至その紹介が、どこまで支那或は支那事變を本質的に見てゐるかといふことになると一寸問題だと思はれる。この「支那通」といふことについて、前南京總領事須磨彌吉郎氏が面白いことをいはれたことがある。氏の考によると所謂「支那通」といふのに三種ある。第一は一ヶ月か二ヶ月の僅かの期間に支那の各地を通つて來た人、それでも歸つて來ると一かど支那通ぶつて盛んにあちらの話をする。第二は常に支那服を纏ひ、支那式に物を考へる、つまり支那のする通り、支那のいふ通りの人、といふ意味での「支那通」だ。この種の人は感情的に何でも彼でも支那と妥協提携すべしと說く。第三は、支那を凡ゆる方面から科學的に研究し、眞の支那を充分に理解した上で、これに對し積極的な批判精神を有するほんとの意味での「支那通」だ。

今日「支那通」と名乘つて盛んに書き立てる人々の中に、この第一種第二種に屬する人が果してゐないであらうか。

本書の著者尾崎秀實氏は疑ひもなく第三種の「支那通」として自他共に許す人。恐らく氏の意見は何かの形で我國策の方向に影響を與へてゐると思はれる。

さて、本書は氏が最近雜誌に發表した論文を集めて整理したもので、支那政治批判、日支時局批判、支那經濟批判の三部から成つてゐる。

支那事變に關連して、われ〳〵の念頭を往來する問題は無數にある。支那は果して近代國家であるだらうか。支那民族の統一は實現され得るであらうか。支那に於ける國民黨と共產黨との統一戰線は何うであらうか。支那事變は民族對民族戰であるか否か。支那事變に於ける列國の態度、日本の大陸經營は成功するだらうか。このために日本の經濟機構は如何に改造されなくてはならぬか、等々。

これ等の諸問題に對し、本書は極めて明快な解釋を下し、長期建設に對する國民の覺悟に正しい力を與へんことに努めてゐるのである。

（昭和一三、一一、二〇　麴町區丸ノ內　丸ビル內　中央公論社
四六判　三八三頁　一・七〇）

內藤虎次郎著

支那論

事變發生以來支那關係圖書は所謂汗牛充棟も啻ならざる狀態であり、我々はその取捨選擇に異常なる困難を生ずるものである。

これ等の支那論を大別すると或は三となり、或は四となる

やうである。第一は所謂支那通の支那論で支那の社會風習、支那國民性を描寫するものである。支那人の表裏を知るには一應興味を以て讀まれるがこれによつては支那の動く原理も、支那の將來の見透しをつけることも出來ない。最も多く出る際物的讀物若くは見聞記の如きは大部分この類に屬すると言つて然るべきであらう。

第二のものは赤色支那、若しくは新興支那を傳へんとするもので、第一の見方よりは進歩的ではあるが、あまりに神經衰弱的ではないだらうか、歴代爲政者の搾取多年軍閥の壓制になやんで來た支那の民衆が赤化に感染し易いことは吾人も一應是を認める。然し古來あらゆる政治的試練を經て來た四億の民衆がマルキシズムの公式によつて果して動くであらうか。

第三の論者は新生活運動進行中であつた現代支那を見ようとするものである。この見方はかなり現實的であり、尤も將來性のあるものと考へられるが現狀に於て果して如何なる程度にこれが實現されて居るかは疑問である。

以上の三つの見方は何れも現代支那を主とするもので其の何れにも幾分の依るべき點がないではない。然しこれ等は論者の立場に偏し、その一面を強調し過ぎる傾向がありはしないであらうか。從つて我々はその見方に對して何かしら淺薄さを感ぜざるを得ない。

これ等に對して支那の歴史に徴し、民族性に根ざす支那を論ずるものがあつたならば如何であらうか。其の所說は或は迂遠に聞えるかも知れぬ、又現實の對策樹立には稍々不向きであるかも知れぬ。然し我々は祖國の歴史を反省して其處に祖國の眞面目を發見すると同樣、支那の本質の理解には支那の底流を探らねばならぬと信ずる。

故内藤博士（京都帝國大學教授東洋文化史の權威）の支那論こそはこの類に屬するものであると思ふ。この書は大正三年三月發表した「支那論」、大正十三年七月發表した「新支那論」、昭和三年七月の講演「現代支那の文化生活」の三編を合したもので、何れも舊稿に屬するが、現代支那觀察の尺度とするには極めて劃切である。

その内容は、「支那論」に於ては、

君主制か共和制か—領土問題—内治問題（地方制度、財政、政治上の德義及び國是）

「新支那論」に於ては、

支那對外關係の危機—支那の政治及び社會組織—支那の革新と日本—自發的革新の可能性—支那の國民性とその經濟的變化—支那の文化問題）

を取扱つて居る。

その内容は透徹せる史眼と該博なる識見より生れ出たもので、その要領を把握するには精讀を必要とする。其の要領を一々摘記することは紙面の許さない處であるが、滿洲事變以前に於て已に滿洲獨立の必要を說き、日支關係破裂の必至を論じ儒教國教論の不可、現下問題となりつゝある聯邦組織を示唆する地方分權の必要を述べられて居る。

又我國による軍事的統一、日本人による支那經濟組織の改革の必要をも論ぜられて居り全く新支那建設の豫言者といつてもよい。然もそれは單なる放言ではなくて悉く支那研究の成果の綜合である。この意味に於て本書は指導階級の必讀書の一に加ふべきであると信ずる。

（昭和一三、五、二〇　四谷區愛住町一九　創元社
四六判　三七八頁　二・〇〇）

池崎忠孝著

新支那論

著者は卷頭に於て「我が國に私の所謂新らしい支那——即ち辛亥革命以後における支那について論じた書物といふものが、ほとんど皆無とも言つていゝ狀態だ」と述べ、本書を以て著者の所謂「辛亥革命以後に於ける新らしい支那」を理解するの資に供せんとする熱意を披瀝してゐる。

著者は、嚴密な意味に於ての「新支那の紀元」は大清帝國が滅びて中華民國が新しく生れた民國元年（大正元年）二月十三日たるべきことを强調し、それ以後を次の三期に分つて概觀を爲してゐる。

第一期——民國元年から八年迄（三民主義の時代）
第二期——民國八年から二十三年迄（思想混亂時代）
第三期——民國廿三年から現在迄（新生活運動時代）

第二期は更に之を二つに分割して、民國八年の五四運動から民國十六年の國共分離に至る迄の間を國共合作時代と呼び、民國十六年の國共分離から民國二十三年の新生活運動に至る迄を國共對立時代と呼んで、是等の時代についての說明を詳しくしてゐるのである。第三期の新生活運動時代に關しては、第十章「新生活運動の宣言」以下第十八章「新生活卽日本化」迄の實に九章を充てゝ說述に努めてゐる。これによつて吾々は蔣介石提唱の「一種の國民精神總動員」とも稱すべき新生活運動に關する詳細な說明によつて、現代支那の實際生活がどんなものであるか、且又新支那は如何なる方向へ進路をとらんとしつゝあつたかを知り得るのである。

最後に著者は「日本の使命」に言及して、「新しき支那への

理解」と「新しき支那との協力」を強調し本論を結んでゐる。

現代支那の歩んで來た道を斯くも鮮明に且つ系統的に說述し、批判した本書の如きは、蓋し時局柄世人を益すること最も多いものであらう。

（昭和一三、一〇、六　麹町區内幸町大阪ビル内　モダン日本社　四六判　二八八頁　一・五〇）

圓地與四松　著

世界の變貌

最近に於ける世界の動きは、世界大戰前の不安を想はせるものがある。先般チエツコ問題はあはや第二の世界戰爭かと世界中をして手に汗を握らせたが、ミュンヘンの四國會議は辛くもこれを寸前に喰止めることに成功した。

しかし、其後といへども世界時局は決して安定せるものとは云ひ難く、バルカンに對するドイツの經濟的進出、ソ波不可侵協定、チュニス問題等次々と展開する問題に彩られて、世界情勢はいよ〳〵急迫の相を呈し來つた如く思はれる。

しかもこのやうな急迫した情勢の下では、局面の轉變は實に急激で、その道の人達でさへこれが眞相を把握することの困難を嘆じ、況んや將來に對する豫測の至難なことを告白してゐるのである。

しかし、今日の國際的緊張の時に際し、世界政局の推移動向を知らんとすることは、國民當然の要求であり、これに應ずべき適當な解說を國民に提供することは、今日の如く非常時下の學者、ジヤーナリスト等其の任に堪ふるものゝ責務でなくてはならぬ。無論われ〳〵は先づ日日の新聞紙上に速報されるニュースに不斷の注意を拂つて、各自の能力の及ぶ限り時局の眞相把握に努力すべきであるが、しかもかゝる非系統的斷片のみでは、やゝもすれば時局の複雜性の前に問題全體の見透しを逸せしめ、五里霧中の感を抱かしめる虞れなしとしない。この不便を防ぐためにはどうしても洞察力ある專門家により、一つの見透しの下に纏められた全體的な記述の助を借りることが必要であらう。

本書は東日記者たりし著者が、最近雜誌に發表した時局解說、並にラヂオ講演を集めたもので、國際的情勢と世界經濟の動向、列强の焦燥、獨墺合邦以後、蘇滿國境問題、建艦競爭とその底を流れるもの、世界の新開界、世界を動かす人々、放送抗日戰線、內外政局時論、放送講演の諸稿を收めてゐる。

（昭和一三、一〇、二五　京都市河原町二條下ル　人文書院　四六判　三六二頁　二・〇〇）

白鳥敏夫　著

國際日本の地位

著者は前瑞典公使、先般締結された日獨防共協定には大いに盡力された人で、日支協力による防共はこの著者の持論である。

著者によれば、今日の世界は英、米、佛の如きデモクラシーの資本主義國と、ソ聯の如き共產主義國とを同一平面に含む唯物史觀的世界觀を根本思想として、所謂人民戰線を形成する國家群と、獨、伊の如く、全然唯物史觀的の物の觀方と個人的、階級的人生觀を昂揚した全體主義的世界觀に立つ所謂ファツショ國家群との二つに色分けすることが出來、しかして日本がこのファツショ・ループに入ることは、その國家觀の根柢をなす哲學的理念から見て否定し難きところだとされる。

然るに、日獨防共協定に對して示された日本國民の無理解無關心ぶりは甚だしくこの著者を慨嘆させたらしく、こゝに「一大啓蒙運動」の必要を痛感した著者が昨年この方、この目的の爲に、前述の如き理解の上に立つて世界の動きを概觀し、その動きの中に於ける日本の地位を闡明せんとして、諸所で講演をしたり、雜誌に書いたりしたものを集めたのが本書である。

今この著書の態度を具體的な問題について見るならば、例へば今次の支那事變について、所謂「持つ國と持たざる國」の理論を一途にふり廻すことを非とする。曰く「日本の大陸政策の正當性を、物質上の需要のみに求めようとすれば、結局日本の行動を以て侵略主義といはれ、帝國主義といはれても一言もない譯であつて、これはこの際、日本の國民として深く考へなければならぬ。日本の大陸政策に關しては、精神的の基礎、卽ち日本民族の使命、日本建國の理想といふやうな點をはつきりと認識して、その大使命遂行の爲の大陸進出であるといふことでなくてはならぬ」と。

（昭和一三、二、一七　神田區西神田二ノ二一　三笠書房　四六判　二四四頁　一・二〇）

池崎忠孝　著

世界に立つ日本

著者は人も知る如く軍事評論家として嘖々たる名聲あり、

今は文部參與官として活躍せられてゐる。本書は近時歐洲の大勢を論じて日本の位する世界的位置を明らかにせんとしたものである。今世界の動きは專ら歐洲の動きであり、それと共に支那事變を契機として捲き起つた東亞の動きである。著者はまづ歐洲大戰後における歐洲の情勢より說き起す。これを三期に分ち、戰後歐洲の國際正義を沒却した强壓的安定と獨逸の衰頽、それに續く轉換期、並にナチス勃興以來としてゐる。著者の筆法は濶達自在であり大所高所より歐洲政局の大きな動きを說いて明快である。こゝを讀めば先般世界の耳目を聳動せしめた獨逸のオウストリー合併、並に現下重大な注意を喚起してゐるチェツコ・スロバキヤの問題等も明瞭に理解することが出來る。こゝに現はれてゐる佛蘭西は最も影薄く、苦難の重荷を背負つてゐるやうである。英國についてはよくその國情或は國民性を察して同情ある觀方であり、歐洲政局に處する微妙な態度を說き明かしてゐる。

次に日本の勃興、東亞の情勢に轉じて歐洲の動きに對する關係を論述してゐるのであるが、日本の支那事變並に世界に對する態度が現內閣の屢々聲明するところを一貫してゐることを力說するは無論であり、聲を大にして國際正義を說くのであるが、讀者は今少しく國際正義の精神根據ともいふべきものを明確に力說せられることを望みたいやうにおもふ。

本書は流石に文筆に長じた著者の快作であり筆力平明にして而も雄健、視野は廣大にして而も的確である。大衆の讀物としては上乘のものとおもはれる。それにつけても今少しく國際正義觀念を明說して、大衆の徹底的理解を促進せんことを要求したくおもふのである。

（昭和一二、一二、一二　芝區田村町四ノ一八　今日の問題社　四六判　二六六頁　一・〇〇）

鹿島守之助　著

帝國外交の基本政策

本書は三國干涉以後一九二五年の日露國交回復に至るまでの、日本を中心とする極東外交を歷史的に記述したものである。本書の題名は「帝國外交の基本政策」となつてゐるが、直接に基本政策そのものを取扱つたと云ふよりは、寧ろ日本の同盟協商制度の發達を歷史的に解明し、以て帝國外交の基本的潮流を把握せしめんとするものである。

その主なる內容は日淸戰爭以後日英同盟の締結に至るまでの經緯、第一回日英同盟、第二・第三回の日英同盟の發達及びその消滅、日露戰爭以後の第一回日露協商、第二・第三・第四の日露協商及び秘密條約を取扱ひ、高平ルート協約、石井ランシング協定等の日米協商を說き、世界大戰當時の日本の東亞に於ける國際的地位を論じ、九ヶ國條約及び四ヶ國條約成立の由來とその性質を述べ、日露國交回復問題を記してゐる。最後に「我が大陸政策の史的考察」の章に於て、前十八章中に詳說した日本の大陸政策の全貌を要約し、帝國の大陸政策否外交政策が初めには朝鮮次に滿洲、支那大陸を中心に展開し、英露獨佛米等の諸國との外交が發展して來た經路を簡明に記述し、滿蒙支那に於ける列國の帝國主義的角逐を論じ、東亞に於ける日本の使命とその向ふべき方向を歷史的事實により解明してゐる。

本書の資料は實に豐富で出典正しく、著者自らが序文に於て述べてゐる如く、外務省から大日本外交文書が出版されても之等事實の覆へることは絕對にないと自認してゐる程である。極東外交を歷史的、科學的組織的に取扱つた殆ど唯一の書である。

大陸經營の叫ばれる今日、本書の如き史的研究は今後の日本民族の發展と帝國外交の向ふべき方向を知る上に絕對に必要である。

（昭和一三、五、二五　神田區神保町二ノ二　巖松堂　菊判　四八四頁　四・五〇）

堀江邑一　譯

英國の觀た日支關係

廣東・武漢落ちて支那事變は所謂第四段階に入つたのであるが、蔣介石及蔣政權一派の抗日意識は其後も一向後退の模樣なく、軍事再調、政治、外交、財政强化に大童となつてこの新段階に對處せんとあせつてゐるらしい。殊に外交に關しては、ソ聯、英、米、佛の援助を求めるため、しきりに策動を試みてゐるが、その背後に於けるカー英大使の暗躍は奇怪といふべきである。これに應じて、最近の英國の極東政策は對蔣援助の積極化、對日壓迫の一途をたどりつつあるかに見える。英議會に於けるプリマス外務次官の九ヶ國條約尊重宣言、對支輸出信用保證、わけても最近報ぜられる如き、英國の音頭とりによる英米共同の對日經濟報復の計畫等はいよ〳〵蔣政權をして無謀なる長期抗日意識に拍車をかけてゐるのである。

かゝる英國の極東政策が、極東の新情勢に對する認識不足に由來することは、われ〳〵の固く信ぜんと欲するところであるが、病を治療するためにはその病の根源を確めねばならぬやうに、英國の誤まれる政策に對處するためには先づ英國が支那事變を如何に見てゐるかを知る必要がある。

本書は英國王室國際問題研究所情報部の編纂になる "China and Japan, Information Department Paper, No. 21 1938" を堀江氏が全譯されたものである。譯者の序文に、「本書は日支何れにも偏しない第三者的立場に立ち比較的公平に、この複雜な問題を手際よく說明してゐる。」といつてゐるが、今日英國がこの事變に關して、第三國と呼ばれるに適しないことは明白で、從つて本書が表見的には「比較的公平」に說明してゐることは認め得るとしても、なほ前述のやうな英國の立場が、少くとも底流として存することを讀者は念頭に置いてゐなくてはならぬ。

ともあれ本書は、ハッキリした觀點に立ち、しかもかなり正確な資料に基いて書かれてゐるので、日本のことに關しても、われ〳〵が讀んでも、よくこゝまで見たものだと屢々感心させられる程である。

（昭和一三、七、九　神田區小川町二ノ二　清和書店
四六判　二六二頁　一・四〇）

本多熊太郎　著

日支事變外交觀

廣田內閣の對支國交調整三原則、防共協定より今次事變の外交を檢討し特に對英强硬外交を强調したものである。內容は次の如くなつてゐる。

成都事件から西安事件まで—外交立直しの要を說く—來るべきもの逢に來る—日支事變はどう終局するか—南京陷落を前にして—轉換期の東洋—防共協定の政治的意義—事變外交の全面的檢討—イーデン外相顚落の意義—講和策謀に惑はず舉國意見確立の秋—改造內閣の新外相に誨ふ—英國の常套手段を警戒せよ

對英外交に限らず著者の主張は强硬外交にある。局に當つた場合この方針が常に成功するか否かは別として國民は久しく我が追隨外交にあきたらず思つて居る。國外に於ては已に公にされて居ることが國內に於てはひた隱しに隱され、外交は爲政者の獨占的技術の如く思惟せられて居る現狀は、國際關係の複雜なる現代に於ては決して喜ぶべき現象ではあるまい。

無論國民は半可通の外交論を振り廻すべきではないことは言ふまでもない。然しながら政治教育の一部としての外交教育は所謂ケースメソッドによつて諒得せらるべきものと信ず

る。

今次事變に於ける英國の對日外交に就いては「第三國云々」の語によつてその片鱗は常にきかされて居るが、この書の如く明白に具體的にその對日壓迫を記述してゐるものは多くあるまい。事變當初に於ける事變の見透し、廣東攻略敢行の强調等著者の主張は次々に實現されつつある。

內容右の如く本書は國民の外交問題に關する關心を高めるための有力なる資料と信ずる。

（昭和一三、一〇、一六　京橋區京橋第一相互館內　千倉書房
四六判　四一〇頁　一・八〇）

本多熊太郎　著

魂の外交

—日露戰爭に於ける小村侯—

著者は大正十五年獨逸大使を辭する迄多年我國外交の實際に携り、日露戰爭の頃、小村壽太郎侯が外相時代その祕書官を勤められてゐた。

本書は著者が侯に親炙して得た所を經とし、その外交眼に映ずる當時の外交事情を緯として「所謂小村外交の本領を讀者の心目に髣髴」せしめ、「憂國の諸士と共に時艱思偉人の欝懷を伸べん」とて公にされた一書である。その內容は「小村侯を語る」「再び小村侯を語る」「小村侯と滿洲」「日英同盟と日露戰爭」「日露戰爭の眞意義」「講和外交祕話」「日露戰爭と小村侯」「日露戰爭と世界政局の轉換」の八篇より成り何れも滿洲事變以來各方面の求めによつて著者が講演或は執筆したものである。

日清役後露國が三國干涉に成功するや、支那に露支密約を强要して滿洲の占據を固め、南下して朝鮮半島に於ける我勢力を甚しく脅すに至り、我國の安危に關する重大問題となつた。そこで我廟議に於ても一時、滿洲を露國に與へ韓國を我勢力範圍たらしめんとする所謂滿韓交換に依る日露協和政策も考へられてゐた。小村侯が明治三十四年桂內閣の外相に迎へられたのは、かゝる外交危局の秋であつた。小村侯は夙に朝鮮問題の解決は卽ち滿洲の領土保全に在ることに深く着眼し、之が爲露國との一戰の避くべからざるを見透し、日露問題の解決に列强干與の機會を排除しつゝ飽迄自主外交を以て日露戰爭の國際環境を整へ戰爭の結末を完うし、多年の滿韓問題に解決を與へ、東亞に於ける日本の指導的位置を築き上げた。この間に於て侯が心血を濺がれた小村外交の一步一步の建設が、著者に依つて、力强く且つ侯の面目躍如たる挿話を加へて興味深く本書中に描き出され、讀む者をして小村侯

に對する感銘を深からしめると共に我日本の大陸への巨歩を感ぜしめずにはおかない。

今次事變終局の目的達成上、國民の東亞に對する認識確把が要望されてゐる今日、本書の如き、我大陸政策への信念と感激とを與ふる一書を得たことを喜ぶと共に廣く一般の閲讀に推奨したいと思ふ。

（昭和一三、七、一九　京橋區京橋第一相互館内　千倉書房　四六判　三五八頁　一・六〇）

高柳賢三　著

獨裁政と法律思想

最近世界各國の政治が「獨裁政」的傾向を辿りつゝあることは覆ひ難き事實である。ソ聯や伊・獨の如くハッキリしたものはいふまでもないが、英・米の如き民主國でも、獨裁國とはいへないにしても、權力の一手への集中强化、經濟の國家的統制等、法に對して政治の優位を認め得る點で、多かれ少かれ獨裁政的傾向をもつといひ得ると思はれる。

ソ聯・伊・獨の獨裁政に共通のものとして、まづその政治的權力が被治者の意向にかゝはらず、これと獨立して存在することが指摘される。この點は民主的原理の國とは根本的に異なる。次にこれ等の獨裁國に於ては、權力者の意志を被治者に强制するために反自由主義的な技術が用ひられる。一面言論自由や結社の自由を抑壓し、他面新聞やラヂオ等による權力者のイデオロギーと政策とを大衆に「宣傳」することが行はれる。

獨裁政においては、ある種の理想主義が高調される。ソ聯では「階級なき社會」、伊では「優越的な國家」、獨では「ノルデイツク的種族」といふ如きである。

獨裁政と經濟組織との間には、ある必然的な關係はないと考へらる。たゞ獨裁政においては、國家主義的計畫經濟と結びつく傾向はある。資本家の利潤制限、勞働者の失業の減少とを目的とする政策がとられる。

階級關係においては、伊・獨では嚴に階級鬪爭が禁止され國民全體の利益が高調される。ソ聯ではプロレタリアートの利益が高調されること周知の通りである。

獨裁政と法の內容との關係については、公法における中央集權的傾向と、行政權の優位との傾向が注意される。

法の理論において、法の合理的要素（正義、衡平）よりも政治的要素（命令性）が高調される傾向がある。ソ聯にあつては、法の本質を「支配階級の命令」と見、獨ではそれを「指導者の命令」とする。伊でも法の理論のファシズム的政治への從屬性が說かれてゐる。

本書は以上三獨裁國の法律思想をそれ〴〵に詳說すると共に、民主・自由國家たる點、米の法律思想、就中「ニオ・リアリズム」とその權力主義的傾向を辿る法律理論をも紹介してゐる。

（昭和一三、四、一五　日本橋區通三丁目　河出書房　四六判　四四四頁・二・五〇）

尾佐竹猛　著

日本憲法制定史要

尾佐竹博士が明治憲政史の研究の爲につくされた功績は、著述だけでも既に五指を屈して餘りあるが、更にその實證史家としての研究態度は、斯學研究の上に大きな足跡を印したものと云へる。然るが故に今回「本格的に憲法制定史を編せんとの野望」を懷かれ、その前奏として「一般的、啓蒙的の讀物として」の本書をものさるゝに當つても、敢然として「憲法發布より五十年の歲月を經て居るのに、その制定史實に關して何等觀るべき著書のないのは學界の名譽ではあるまい」と云ひ切ることが出來たのであらうと思はれる。勿論博士として憲法制定關係史料の蒐集が、殆んど不可能に近い程困難である事情は知悉して居られる。然も尙この「野望」を抱かれたことに對して、われわれは大いに敬意を表すると共に期待するのである。

本書執筆に就いては、著者は序文に繰り返して、決して本書が學者の參考となるべきものではなく、書肆の要望に基き「一般的、啓蒙的讀物」として公にされたことを云つて居られるが、この意圖がよく現れて極めて讀み易い。

內容は三編に分たれてゐる。第一編は「憲政の胎動期」として、公議輿論の結果列藩會議論が起り、更に五箇條御誓文の發布から憲法制定論の發生迄を記したもので、大體舊著「維新前後に於ける立憲思想」その他の諸著に基いたものと思はれる。第二編は「憲政の準備期」で、明治初年より十五六年頃までの自由民權思想の發達が僅々百頁の中に壓縮され、第三編「憲法制定」に至つて愈々具體的な憲法起草、並に憲法會議について述べられてあるが、こゝでは伊藤公が渡歐して獨墺に於て師事されたグナイスト、モツセ、シュタイン等の諸學者の、日本憲法起草に就いて與へられた多くの示唆を、公の書簡・手記の中に求めて記された部分が最も多い。兎角觀念論的に、主觀的に陷り易い昨今の史學界に、博士の如く

嚴然實證史家の立場を持せらるる學者を見ることは、洵に意義あることゝ云はなければならない。

（昭和一三、二、二一　神田區錦町三ノ二〇　育生社
菊判　二九七頁　二・五〇）

塚田一甫　著

國家總動員法の解説

近代戰爭の一つの特徴は總力戰であることである。兵器戰であると同時に、經濟戰をもつて之をバックアップしてこそ初めて獲られる勝利である。歐洲大戰の折、アメリカは參戰して、平時經濟から戰時經濟への編成替へを完成する爲には實に十八ケ月を要したさうである。又フランスが砲彈の製造能力の擴大を完成した時には、戰爭は既に終末をつげてゐたとのことである。これでは悲劇を通り越して喜劇である。今後の戰爭ではこんなことは許されない。然るが故に列國は何れも歐洲大戰の苦き經驗に基いて夫々國家總動員に關する法制及びその施設を定めてゐる。去る七十三議會に於て成立した我國の國家總動員法も固より目的を同じうするもので、國防經濟の完璧を期して一朝事ある時に備へようとするものである。

本書は我國の國家總動員法を解説したものであるが、逐條解説ではない。本書を選擇するに當つては、殆ど時を同じうして刊行された唐島基智三氏の「國家總動員法解説」、長島又男氏の「國家總動員法と國民生活」も參照して見、その何れもが異つた立場に於て意味のあるものであることを知つたのである。卽ち唐島氏のは逐條解説を主とし、長島氏のは條文を離れて大摑みに總動員法の概念を與へて、國民生活にある反省を促したもので、こゝに掲げた塚田氏のものは、その中間を行くもので、例へば戰時中、國民勞務に關する措置としてどんなことが規定されてゐるかとか、物資の統制とは、資金の動員とは、と云つた工合に、ある主題を中心にして結局總動員法の全貌を解説したものである。

比較參考の爲に英米獨佛伊並にチエツコスロヴアキアの總動員法に關しても可也詳細に紹介解説されてある。又國家總動員法の全文、施行令要綱、既存法との關係一覽等は附錄として卷末に附してある。著者は東京日日新聞經濟部副部長である。

（昭和一三、四、三　神田區小川町一ノ六　秋豐園出版部
四六判　二四一頁　一・五〇）

賀屋興宣　著

戰時下の經濟生活

本書は前大藏大臣賀屋興宣氏が支那事變下における國民に戰時經濟の重要性を認識せしめんがために、色々な機會において講演し、執筆せられたものを、岡村信吉氏が編纂したものである。題目は多樣に上つてゐるが、その主旨は一貫してゐるものと見られる。

「生産力の擴充」「國際收支の均衡」「物資需給の調整」といふことは、所謂財政經濟の三原則として强調せられたところであるが、その根本原則は今日と雖も毫も變更されてはゐないわけである。寧ろ益々その原則の强化を見てゐるといつて差支ない。賀屋前藏相はこの根本原則を理解せしめ、國民の協力を徹底せしめんがためにあらゆる機會に國民に訴へるところがあつた。本書によつてその全貌を知り得るといつてよい。

「日本の經濟力の問題」「國家經濟の計畫性」「財政經濟の三原則」「現下の財政經濟政策」「銃後の財政經濟と國民の協力」「資金調整と金融政策」「長期戰と經濟報國」「戰時經濟道德の提唱」「戰爭と國民貯蓄」「貯蓄報國の途」「銃後の女性」

右が本書收錄の全篇である。右の中終の三篇は特に國民貯蓄に就て强調せられたもので、それらは特に婦人の必讀すべきものと思はれる。「銃後の財政經濟と國民の協力」は大每主催講演會における演説であり、「長期戰と經濟報國」は大朝主催講演會における演説であるが、この二篇だけでも、大體本書全般の趣旨を了解することが出來よう。わが國の經濟力を以てすれば「二百億圓の戰費可能」であるといふ。「國民貯蓄八十億圓」を當面目標として勤儉貯蓄しなければならないといふ。國民は勇猛一番、總國力を傾注してこの難局を突破し、長期に亙る新東亞の建設に邁進しなければならぬ。時局柄一般通俗の讀物として適切なものである。

（昭和一三、九、一八　芝區田村町四ノ一八　今日の問題社
四六判　二七三頁　一・三〇）

東京日日新聞社經濟部編

戰時經濟の實際問題

『この書は、東日經濟部が、「物資總動員の驀進」及び「戰時經濟投影下の國民生活」と題し東日紙上に連載し好評を博したものを修正加筆、上梓したもので、最近の我國經濟界の情勢を、物語つて餘すところがない』ものである。第一編

「物資總動員の全貌」、第二編「價格統制の役割」、第三編「戰時經濟投影下の國民生活」、第四編「戰時下の失業者・轉業對策」の四編から成り、附錄「戰時經濟關係重要法規集」が約後半を占めてゐる。

第一編は物動計畫の全貌に亘つてそのアウトラインを述べたものであり、第二編は物動計畫の最も大きな影響であり、重大問題でもある物價問題を中心にして說いたものであり、第三編はそれが國民生活の全面に及ぼした影響を、各重要産業部門に就て詳細記述したものである。本書においてはこの編が最もよくジヤーナリズムの特色を發揮した興味ある記述となつてゐる。一般世人はかゝる日常生活の實際に卽した通常卑近な探訪的記述によつて、現下戰時經濟の實相をまざまざと知ることが出來、且つ知らんと欲してゐるのである。第四編はその後を受けて失業・轉業の問題を取扱つてゐるのである。國民すべてが各々その處を得て國家の爲に働くことこそ萬民輔翼の道であることは、平沼首相によつて幾度か力强く說かれたところである。內外を通ずる今後の經營こそは最も重大である。

國民は戰時經濟の統制を厭ふところではない。しかもそれと共に國民は各々その處を得、分に應じて國家に奉仕し得る經世の大道の確立せんことを只管希つてやまないのである。物動計畫に惱むもの、苦しむものも、單に己が一個の問題ではない。戰時非常の波に乘るものも國家奉公の誠を思ふべきである。失業・轉業を對岸の火災と見るべきでない。國民すべてわが事として將來の國運を慮るべきである。

（昭和一三、一、一一　麴町區有樂町一ノ一一　東京日日新聞發行所　四六判　四六八頁　一・五〇）

伍堂卓雄著

伸びゆく獨逸

——ナチス經濟の實相を視る——

本書は、昭和十二年より十三年に亘つて遣獨使節として渡歐された著者が滯獨中使節としての使命を果される傍、時間の許す限り審に獨逸國內の實情を視察調査され、又政府首腦部と屢々會談せられて得た「伸びゆく獨逸」に對する觀察を纏められたものである。

著者は言ふまでもなく、我國現時產業界に重きをなす人である。從つて本書に說かれてゐる現時獨逸經濟界に對する考察卽ち書中の「第一次四ケ年計畫」「第二次四ケ年計畫」「獨逸鐵鋼雜話」「獨逸の人造石油工業」「ライヒスアウトバーン（國營自動車專用道路）」等は、本書中に併せ收められてゐる、「前回獨逸視察談（昭和十一年講演）」と共に我國產業關係者に貴重な示唆を與ふる點の尠くないことは勿論であるが、一般に讀みよく記述せられてをり、一般讀者も多大の感銘を以て獨逸國民の經濟的努力の現狀を知り得るであらう。

獨逸の經濟的發展をよく理解するためには、單に四ケ年計畫による經濟界の外形的相貌を觀るに止まらず、その發展の基礎的推進力や廣く國力培養の諸要因を深く究めねばならぬ。著者は、本書中「獨逸と防共」の節に於てその防共精神を明らかにし「ドイツチエ・アルバイト・フロント（獨逸勤勞戰線）」の節に於てナチス全體主義による生產從事者協力の本體について述べ、この勤勞戰線本部の外局をなす「クラフト・ドウルヒ・フロイデ（歡喜を通しての力）」について一節を設けて、勤勞者をして生活の快樂と仕事の喜悅を享受せしめんとする此の事業の內容を說明し、更に進んで「ヒツトラー・ユーゲント」の節に於て次代國民に對する眞劍なる政治教育と見らるゝ青年運動の實相を傳へられてゐる。何れも記述は簡潔であるが各事業の精神と組織の要點を摑んで、その核心が鮮明に物語られてゐる。更に「獨逸は何處へ行く」に於て獨逸興隆の總觀が與へられてをる。本書には尙此の外に、「訪獨の旅」等數編の記述がある。

獨逸に關する著書としては、最近種々の角度よりなされた觀察記や調査、研究書等が世に出てゐるが、國力興隆の重要素の一たる經濟的方面を中心として本書の如く讀みよく書かれてゐるものは少いと思ふ。國情に於て幾多の類似點を有する我國に於ける一般向讀物として推奬したい所以もこゝにある。

（昭一三、一〇、二八　京橋區京橋三ノ四　日本評論社　四六判　二六〇頁　一・五〇）

福島政雄著

ペスタロツチ小傳

この書はペスタロツチに憧憬し、その研究を主要なる題目として居る著者のこの偉大なる教育家に對する感激的記錄で、前半はペスタロツチ小傳、後半は遺蹟巡歷記よりなつて居る。

自序に、

「今此の小傳においてはペスタロツチの生涯に就いて吾人の感激の焦點を明かにしようと努めたものである。」

「その閱歷とその思想とが渾然として融化せる點に於てペスタロ

ッチの生命は著しき特筆を有する。此の小傳においては此の點に殊に留意して、ペスタロッチの著作中の注目すべきものに就いては假令一言一句を以てしてなりとも、之を紹介しようと試みたるものである。」

といふてゐるやうに、ペスタロッチの教育的生命の要點を遺憾なく描出して居る。

著者は又「吾人は今此の小傳を世の初等教育者諸氏に献げんと欲するものである」といつて居るが、ペスタロッチの母スザンナの母性愛やその家庭的雰圍氣、ペスタロッチの仕事に對する熱愛の態度は取つてもつて一般大衆の範とするに相應しいものである。

かゝる意味に於てこの書は單に教育者のみならず、一般人の一讀に値するものと信ずる。

（昭和一三、一〇、一　芝區田村町三ノ一　渾沌社出版部　四六判　二一二頁　一・三〇）

山下俊郎著

幼兒心理學

「三つ兒の魂百まで」といふ俚諺がある。乳幼兒の時期が精神の發育から見て非常に大事な時期であるといふのは、その時期がずつと後々の精神生活にとつて非常に大切な意味を持つてゐるからである。乳幼兒の死亡率といふ樣な問題が近年喧しく言はれる樣になり、身體の上から考へて乳幼兒の時期が大事な時期であることは、最近一般に認識される樣になつて來てゐるが、精神方面に於てはまだそれ程には注意されてゐない現狀である。然し精神の發育から見ても、乳幼兒の時期は身體と同樣に誠に大事な時期である。

本書を讀むものは如上の言葉が空虛にあらざることを知るのみならず、乳幼兒の心の動きを知ることが彼等の保育上如何に重要であるかをつぶさに知ることが出來る。子供の心身をはぐくんでゆく親たり、保姆たるものにとつて正しい知識をもつことがどれだけ必要であるか分らない。本書は實に適切に說明され、それらの知識を納得のゆくやうに細かに教示された稀有の書である。

第一篇には乳兒の心理を取扱ひ、第二篇は幼兒の心理が扱はれてゐる。幼兒の心理の方が詳しく、殊に目につくのは、創作、手工、社會性、遊び、習慣等の重要項目を詳細に檢出し、還境との交流に於て見てゐる點である。ことばかりでなく、本書は全體的に凡て最新の心理學的研究に基いて解明されてゐる。第三篇には幼兒の精神檢査方を說き、檢査の結果の表はし方も懇切に說明し、たゞちに日本の幼兒に施行出來るやう方法づけられてゐる。

本書の研究は殆んど日本の實際の幼兒についての資料によつて居り、保育及び教育實踐にむすびつけて述べてあるから、母や保姆にとつて親しいものとなるであらう。又本書の著者が序の中で「この書は母に讀んで貰ひ、保姆に讀んで貰ふために書かれた。だから出來るだけ平易にといふ事を心掛けてゐる」と書いてゐるやうに、理論的なところもなるべく噛みくだいて平明に述べ、圖表の如きも最初に少く、讀者がそれに馴れてくるに隨つて多く用ひて說明を便にしてゐるといふ風に、普通の母親、保姆が何處を讀んでも分るやうに出來てゐる。

本書の著者は愛育會の幼兒部主任として實際的に子供の教育保育指導に當つてゐる新進の心理學者であるから、安心して讀むことが出來よう。現在乳幼兒を膝下に持つて、日夜その保育教導に心を碎いてゐる母親や保姆等に、子供を扱ふ上のよい參考書、指導書として、本書は役立つものであり、薦めてよい書物である。

（昭和一三、七、五　神田區神保町二ノ二　巖松堂　四六倍判　四〇三頁　二・五〇）

大沼直輔著

學校少年團の理論と訓練

曩に本會並に文部省に於て推薦した三荒伯の「獨逸は起ちあがつた」、二荒伯・大日方勝共著「ヒットラーと青年」とは獨逸に於ける青少年團運動の發達並に現狀組織について說述されたものである。

前二著に於て多少共獨逸青少年團の現狀を理解したものは其の强固なる指導者陣の構成、潑剌たる獨逸青少年の活動に尠からず感激せしめらるゝと共に我國に於ける青少年運動について反省せしめられたであらう。

我が國に於ては獨逸の場合とは大に異なり、青年團と少年團とは現在に於ては形成上全く別個のものとして存在し少年團は本書に示されて居るやうに、大日本少年團聯盟・少年赤十字、岳陽聯合少年團、乃木少年團、帝國少年團聯盟、少年團協會等に分れて居り到底獨逸の如き統制ある活動は望めない狀態にある。

然し次の時代を双肩に擔つて起つべき青少年團の統一ある組織と活動とは閑却せらるべきでなく、時局は愈々切實にその必要を要求して居る。この時にあたり多年少年團運動に關

係して居る著者の勞作を推薦し、不振なるこの運動に對して一般の關心を高めることは、極めて緊急の事に屬するものと信ずる。

本書は理論と施設訓練編とよりなつてゐる。理論篇に於ては昭和七年末文部大臣より發せられた校外生活指導に關する訓令並に之に伴ふ通牒の精神を說明し、學校少年團組織の基礎條件を檢討し、施設訓練篇に於ては著者の體驗に基き少年團訓練の要綱及び具體的施設を實例をあげて懇切に說明して居る。

附錄に少年團訓練の參考事項を揭げて居る。

（昭和一三、五、一五　神田區神保町一ノ一　三省堂　四六判　三〇四頁　一・五〇）

二荒芳德伯の「獨逸は起ちあがつた」を讀む

小尾範治

われわれ日本人は一般にドイツに對して特に深い關心をもつてゐる。これは恐らく質實剛健の風を尙ぶことに於いて、兩者の間に國民性的な共通點があるからであらう。それが防共協定の締結によつて一層强められたのである。さういふドイツが大戰の慘禍に打ちのめされて、再起不能とさへ思はれたほどのドン底に陷りながら、祖國愛に燃えたナチスの救國運動によつて短い歲月の間に見ごとに起ちあがり、押しも押されもしない剛邦として全世界を睥睨する壯觀が、わが國民のドイツへの關心を强めたことは當然であらう。殊に重大時局に直面し庶政の革新が仕切りに要望されてゐるわが國としてはドイツに學ぶべきものが少くないと思ふ。

この時に當り、二荒芳德伯の「獨逸は起ちあがつた」といふ快著が公にされたことは喜びに堪へない所である。著者は三度ドイツを訪れ、殊に新興ドイツの原動力を養つてゐるヒットラー青年團や勞働奉仕團の實情を委しく視察され本書に於てどうしてドイツが起ちあがつたかを明かにして、わが國民の反省を促さうとすることが著者の意圖であらう。元來わが國民は單純である上に感激性に富んでゐるから、近年ドイツが雄々しく起ちあがつた勇姿に共鳴して徒らにこれを讃美し、それに追隨しようとするものがないでもないが、しかしさういふ模倣的態度は著者の取らざる所であつて、著者は「新しく目覺めた國として最も研究に値する」ものであるとしてゐる。

世界一般にヒットラー總統によつて獨裁政治が行はれてゐると見てゐるやうであるが、ヒットラー總統は全國民の總意によつて「指導者」として推戴されたものであつて、ドイツに於ては「民族」と「指導者」と「國家」とが全一の存在であるから、ドイツこそ「民族共同體」として眞のデモクラシー國家であるといふのがドイツ國民の信條である。しかしかゝる全我的國家は新しい世界觀に立脚するものであるから、次代の國民たる靑少年の敎育に於ては、この世界觀の把握とそれに卽した訓練とが最も重要視されてゐる。

またわが國ではナチスの運動を國家主義の側からのみ見ようとしてゐるが、ナチスの立場は「國家主義と社會主義との內面的合體」である國民社會主義であり、ナチスの國民社會主義によれば「個々の人は何ものでもない、黨も何ものでもない、國民と祖國とが全部なのである。」ドイツで勞働が非常に尊重されてゐるのも畢竟一面に於て社會主義に立脚してゐるからであつて、卽ち勞働奉仕を全靑年に要求したり、全國民が產業戰線に立つことゝなつてゐるのもそのためである。しかしこゝでは勞働は個人的生活の方便としてゞはなくて、寧ろ國家と國民とに奉仕するためであり、またそれは强いられた勞働ではなくて、歡喜を伴ふ力行である。等しく社會主義といふも、唯物論社會主義とナチスの國民社會主義との本質的相違はこゝにある。卽ちこゝには最早資本家對勞働者の對立關係は止揚されて、全國民を打つて一丸とした民族共同體があるのみである。そして民族共同體である國家と國民とを、ヒットラー總統は決して外から支配するのではなくて、それと全く一體となつて、全國民を內から指導する所にナチス政治の特質がある。

これについて著者はいふ「民衆と離れて政治は出來ない。民衆に引きずられても政治は出來ない。民衆をしてよく國家の指導精神の中に活かしめて始めて强力な政治が出來るのである」と。これは靑少年の指導者であると同時に經政家である著者が祖國の政情を顧みて、ナチスの政治に深い關心をもつてをられることを物語つてゐるものと見てよからう。

さういふドイツに於いてナチス黨が一九一九年以來苦鬪十四年にしてヒットラーを宰相に送つてこの方、新しい世界觀を信條として祖國再建の大業を着々完成し來つた過程が本書に於て明快に叙述されてゐる。けれども本書は初めから組織的に計畫されたものではなくて一面ナチス・ドイツの行脚記であり、從つてドイツ人やドイツ風土について親しみのある叙述が少くないから、今日のドイツを知らうとするものに取つてよい參考となるばかりでなく、本書を通してわれわれは新興ドイツから學ぶべき數々のものを發見することが出來るであらう。

（昭和一三、三、二五　京橋區銀座西一ノ三　實業之日本社
四六判　二八二頁　一・三〇）

二荒芳德・大日方勝著
ヒットラーと青年

「一國の興隆は屢々一個の英雄によつて成就される。而してその英雄は必ずや將來ある若き國民を背後に持つて來る。將來ある若き國民とは、その國の健全なる精神と躰軀とを有する男女青少年である。新興獨逸に於てヒットラーと若き國民とは一體となつて立つてゐる。此の如き國民の組織がヒットラー・ユーゲントである。我が日本の躍進期に於て誰しも青少年の教育を思はざるものはあるまい此のヒットラー・ユーゲントの組織は一つのよき實物教訓とし我々の前にある。出來るだけ新しい材料に基いてヒットラーの青少年の目的と組織とを紹介しようと云ふのが此の一著を世に送らんとする所以である。」

とはこの書に於ける序の冒頭の一節であるが、本書の目的を遺憾なく表はしてゐる。

曩に推薦紹介された二荒伯の「獨逸は立ちあがつた」は國民大衆に獨逸青少年運動の實情を紹介し以て國民の奮起を促されたものであるが、この書はより組織的に其の運動の由因と目標とを記述して、我國に於けるこの種の運動の指導者たらんとするものゝ參考に資せられたものと見て差支へない。

云ふまでもなくヒットラー・ユーゲントはナチスの所謂、第三國家建設の最も重要なる一翼としてヒットラーによつて築かれたものではあるが、その發祥に於ては世界大戰に打ちのめされた獨逸復興の念に燃ゆる青年の自發的運動に端を發して居る。又「青少年は青少年によつてのみ指導さるべきである」との標語の下に、當時年齒僅に二十歳にしてヒットラーにその指導建設の重任を委囑せられ、今や三十歳にして全獨逸青少年指導統監の位置にあるシーラツハによつて指導せられつゝあることは我等の特に留意すべき點である。

本書はこの驚嘆すべき運動の教育體系、並にその組織と活動の大要を述べたる後、このユーゲントの課程を終へたるものゝ入るべき勞働奉仕制度の教育的意義及び多くの猶太系の碩學藝術家を放逐した後に於ける獨逸新文化の意圖の一斑を指示して居る。

二荒伯が前著に於て述べられて居るやうに、固より彼我その國情を異にする。しかしながら「私は國民社會主義者である。然し國民社會主義者であると云ふことは必要ならば己の全力をまた己の全生命をも、國民と祖國との爲に置き換へるといふことに他ならない、個々の人は何ものでもない、黨も何ものでもない。國民と祖國とが全部なのである。」と云ふ指導者陣の氣魄は、我國の指導者は勿論、國民一般の三思すべき箴言であると確信する。

未曾有の國難に當面せる我國人は戰線と銃後とを問はず、この祖國愛に燃え東洋永遠の平和の爲めに進まなくてはならぬ。

（昭和一三、五、三〇　日本橋區通三ノ一　成美堂書店
四六判　二四〇頁　一・五〇）

青木　保　著
兵　器　讀　本

何と云つても兵器は近代科學の花形である。如何にも精巧らしい新兵器を、我軍が輕快に操作してゐる寫眞を見る時、我々は勇壯感を感ずると同時に、何となく安心をする。之とは全く逆に、新兵器をずらりと並べた外國軍隊の寫眞を見る時に、何とも云へない或る焦燥を感ずる。それ程兵器は我々の近代生活に喰ひ入つてゐる。之を常識的に知らうとする念は何人にもある。然し兵器には幾多の秘密がある。又近代科學の粹を集めたゞけに、之を知る爲には仲々の知識を要する故に從來、ほんの外形の說明に過ぎない樣な簡單な兵器解說書や、或は逆に極めて高級な專門書の外に、その中間を行く樣な本は餘り發行されてゐなかつた。本書はこの缺けた中間の部分を補ふものとして、誠に好個なものである。

序に「本書の原稿は數年前に、上級小學生、中學生、青年團の人々等に讀んで貰ふつもりで書きあげてあつた」のを今回出版されたとある。成る程、記述はその通り極めて平易であるが、何と云つても科學の粹を集めたものであるだけに相當專門事項に亙つて述べられてある。

內容は初めに總論的に兵器及び兵器の歷史の概略が記され以下火力兵器、火藥、砲身、銃身、砲架、彈道、彈藥、陸戰砲、自動火器、携帶火器、火藥の要らない砲、車輛兵器、近接兵器、軍艦、航空機、化學兵器、光學兵器等の順で、われわれが普通新兵器として新聞や雜誌の上で名前だけ知つてゐるやうなものはすべて揭げて、詳細な解說が附せられてゐる。勿論兵器一般を取扱つてゐて、日本の陸海軍の兵器だけに限つたものではなく、世界各國の兵器に及んで居る。寫眞や圖解の挿繪が極めて豐富で、むづかしい理論などはよく分らないながらも、相當興味深く讀むことが出來る。

（昭和一二、一〇、二九　京橋區京橋三ノ四　日本評論社
菊判　四六〇頁　一・八〇）

小澤　滋　著

日本兵食史論（上、中、下）

本書の著者小澤滋氏が、昭和六年三月、當時二十五歳の青年文學士として、陸軍糧秣本廠より日本兵食史の研究並に編纂の委囑を受け、日夜その困難なる史料の蒐集に努め、前人未踏の分野を開拓し、「日本兵食史」として同廠の名を以て刊行したのは、恰も滿洲事變當時であつた。本書は、それに若干增減整理を加へ、標題も「日本兵食史論」と改め、著者の名を以て、この度恰も支那事變に際し刊行せられることゝなつたものである。

本書は上、中、下三卷に分れてゐる。上卷は序說に次いで上代より鎌倉室町時代までの兵食を扱ひ、中卷は戰國、德川時代の兵食に就て朝鮮役までの分を扱ひ、下卷では中卷に續く部分と更に「軍學に於ける兵食」の一章を加へて全卷を終つてゐる。かく本書の結構を見れば、全く兵食獨自の歷史であり、一般人には殆んど興味のない記述に了つてゐるかの觀があるのであるが、事實はそれと全く相違して、本書は兵食の歷史といひながら食物史であり、一面また日本古來の戰爭側面史とも見られるものである。著者は資料を漁ること廣く、單に史料にのみ止らず文學その他の諸記錄に就て、詳細に亘り探究してゐる。その筆致また淡々として輕快であり、一見無味乾燥の如くであつて、實は讀み易く、且つ興味津々たるものがある。然しその反面難を言へば少しく冗長に流れ、煩雜に過ぎる傾がなくもないと思はれるから、一般人のためには、これを縮約して今少しく手輕なものとして、いはゞ普及版の如きものを出されたらよいのではないかと思ふ。しかしそれはともかく、本書は若き著者の苦心になる貴重な著述であり、一般人にとつても興味ある、得るところ多いものとして推奬に値するものである。

（上卷　昭和一三、一一、三　四六判　三二九頁
中卷　昭和一三、一二、三　四六判　三三六頁
下卷　昭和一四、一、二〇　四六判　二八六頁
神田區錦樂町二ノ八　峰文社　各二・三〇）

大久保弘一　著

陸軍讀本

國民皆兵である我國に於て、國防と軍備の眞の意義並に目的を知ると云ふことは、國民の義務でもあり又事實國民全體の最大の關心事でもある。特に今日、支那事變を繞つて東洋平和確立の爲に、我國の使命の益々重大を加ふるの折柄、一層この感を深うするものである。

本書は「帝國陸軍の一般と、國防軍事に關する概要とを記述し、國民の參考に資す」ることを目的としたものであつて、「讀本」の名の如く平易簡明を旨としたものである。

內容は初めの「國防について」「皇軍と國威發揚」の二項で國防軍備の眞意義と、我國陸軍の傳統と歷史とが略記され以下陸軍軍制概要、近代陸軍裝備の趨勢、兵器概說、列國陸軍概說、國防と國家總動員、陸軍關係諸條規の六項の中に我國陸軍の現狀並に列國との比較がなされてゐる。又徵兵令に關聯して、徵兵檢査に關する實際上の諸問題、志願、召集、點呼、演習、徵發等の細かい項目に至る迄網羅されてある。兵器の種類やその進步の事情の述べられてゐる個所、列國陸軍事情の記されてあるあたりなどは特に興味深く讀まれる。

著者が陸軍步兵中佐で新聞班部員であることはよく知れ渡つたことで今更云ふ迄もない。陸軍常識を平易且つ網羅的に一般國民に、殊に若き人々に敎ふるものとして推薦し度い。

（昭和一三、五、一一　京橋區京橋三ノ四　日本評論社
菊判　三六一頁　一・五〇）

第四　自然科學・醫學

大陸と科學

隈部一雄著

過去一ヶ年間我國は前古未曾有の大事變に直面した。而して國民の意氣は少しも衰へて居ない。まことに神國日本と感ずる事が度々ある。私はこの寡圍氣の内に包まれ乍ら、國民の一員として自分の本分に向つてしつかりやらなければならないと云ふ意識に絶え寸かりたてられて居る。著者がこんな心持の中に昨年の九月から今年の八月にかけての一ヶ年間の中に書いたものが本書である。

大陸と科學と云ふ名は別に直接本書の内容を示したものではないが、この書に集められた隨筆は著者の專門たる工學上の問題を通じて、亞細亞大陸に關係があると云ふ點からして選んだものである。講壇より、時局の線、研究所巡り、自動車國策、燃料問題、パイプ紫煙錄等の各部門のもとにインテリ向きの隨筆が集められて居る。著者は嘗つて「どらいぶうえ」と云ふ本を出版して歐洲大陸どらいぶ紀行を紹介した事があるが、本書も又同著者の味ひある教養深い隨筆風の讀物である。

（昭和一三、一〇、一〇　日本橋區通三ノ一　河出書房　四六判　二九六頁　一・五〇）

冬の華

中谷宇吉郎著

著者は故寺田寅彦博士の門下で北海道帝國大學教授、雪の物理學的研究では世界的に名を擧げて居られるそうである。

この本は「御殿の生活」「雜魚圖譜」「寅彦先生に關することども」「一日一文」の四つの部分から成つた隨筆集で、その中郷里加賀に於ける少年時代の回想その他二三篇を含めた「御殿の生活」だけは十年程以前の執筆で、分量から云つても五十數頁に過ぎないものであるが、他はすべて最近二三年來に執筆されたものである。

「御殿の生活」が回想的な浪漫的な文章で書かれた、著者の詩人としての一面を表はすものであるのに對し、次の「雜魚圖譜」「寅彦先生に關することども」はこの著者の最も本格的な隨筆と云ふべきで、量から云つても本書の大部分をなしてゐる。その一つ〳〵の内容を紹介することは却つて煩雜に終ることになるので避けるが、英國に留學して學ばれた、お茶の時間を嚴守しながら研究を續けると云ふ餘裕のある學風と、寅彦先生の訓陶に依つて養はれた、日常生活の中に物理的の研究主題を見出して研究を樂しむと云ふ態度とは、この隨筆の中に誠によく表現されてゐる。線香花火の火花を寫眞に撮つたり、雪の結晶を人工的に作つたり、作つた結晶を安全剃刀の刄で截つたり、又唾液とマッチの軸の折れ端を利用して結晶の側面寫眞の撮影に成功して英國の學界を煙にまいたり、之等の仕事は非常な根氣と細心の注意とを以て漸く完成される困難な仕事であるに違ひないのであるが、本書を讀むと、この著者は是等の困難を如何に樂しみを以て征服しつつあるかゞ誠によく窺へて少からざる感銘を與へる。「寅彦先生に關することども」も一見非常に個人的な題目の樣に思はれるが實はさうではないので、寺田博士が漱石並にその作品について語られた言葉、或は寺田博士の恩師である本多光太郎博士や長岡半太郎博士について語られた言葉をその儘筆錄されたものが多く、中に就き漱石の作品との關係に至つては、何人が讀んでも面白く、又著者が寺田博士より訓へられたと云ふ物をよく觀察すると云ふ態度、同じ實驗を何度も繰り返して不可能を可能ならしめる根氣等が、實は本多博士や長岡博士からの相傳の方法であつたことなどが面白く描き出されてゐる。

この本は隨筆として非常にすぐれたものであると共に、この中から多くのものを學び得ることが出來る。その最も大きなものは科學への親しみである。すべての學問はさうであらうが、特に科學の研究は生活と共に在らしめなければ生涯の仕事として不斷の努力をつゞけることは仲々困難である。勿論研究に沒頭して他を顧みないと云ふ研究態度もあるが、之は決して誰人にも適應される萬人向の態度ではない。社會人として又文化人としての生活を營みながら、然も物理學者は物の理を學んで居ると云ふ氣持を常に失はぬこと、この態度は著者が恩師寅彦博士より承け繼がれたものと云はれてゐるが本書を讀んで著者が完全にこの境地に入つて居られることを感じて非常に美しく思ふのである。この樣な態度こそは若い學生達には大いに學んで貰ふ可き處ではないかと思ふ。

この本に現はれた處では、著者は專門研究の上で寺田博士のよき門生であると共に、隨筆家としても吉村冬彦のよき後繼者であることを思はしめる。程度は殊更難解な物理學的内容を持つものではないから、一般知識階級の人々には誰にも

讀める筈ではあるが、特に理工科系統の學生に薦めたならば效果の多いものである。

（昭一三、九、一〇　神田區一ツ橋二ノ三　岩波書店
四六判　四三六頁　二・二〇）

吉岡修一郎　著

數學文化史

本書は數學の歴史を一般文化史の一面として平易に叙述することを目的としたものである。その爲に著者は西洋數學の母體であるエヂプトの數學が、ヨーロッパ文明の發祥地である希臘に如何樣に植えつけられて行つたか、更にこの數學が所謂希臘數學の建設者達――タレース、ピタゴラス、デモクリトス、ゼノン等――に依つて如何に展開されて近世數學への發展過程を辿つたかと云ふ樣な點に興味の中心がおかれてある。そしてこの興味は本書では古代に於て比較的よく表はされてゐるが、近世に至るに從つて、文化史には最も必要な時代から時代への因果關係が薄められ、個々の數學者達の記述が稍々孤立的な感がして來るのは、材料の豐富な割に紙數の足りなかつたせいとも思へる。その樣な點で多少の不滿はあるにしても、この本には幾多のすぐれた所がある。

第一に本書の樣に數學の各分野に亘つて記された平易な歴史は洵に數が尠い。又四角張らない、エピソードを主としたものだけに興味深く讀まれて、むづかしい專門用語や數式が入つてゐる割合に樂に讀まれる。そして數學史上見遺すことの出來ない重要事項、例へば微積分の發明された由來、內容、非ユークリッド幾何學、解析學、四元數等々には簡單ではあるが大體が分り得る樣に解說が附されてある。斯樣な點から一通り初等數學や物理學を終へた中等學校卒業生あたりに讀んで貰つたなら興味もあらうし、又極めて有益であらうと思はれる。

（昭和一三、一二、一〇　日本橋區通三丁目一　河出書房
四六判　三六三頁　二・五〇）

エーヴ・キュリー著
川口篤　等譯

キュリー夫人傳

最初この本を手にした時、一婦人科學者の傳記としては多すぎて退屈するのではないかと思つた。讀み始めて餘りにも童話的な少女マーニャ時代の記述に、いさゝかいら立たしい感がしないでもなかつた。然し讀んで行く中に、それ等の感じは間もなく解消し、少女時代の細かい記述も、實は極めて用心深く書かれた後年のキュリー夫人の不屈の性格への伏線であつたことが分つた。こんな樣なわけで最初の豫想を裏切つて、極めて感銘深く、少し誇張して云ふことが許されるならば、頁の減つて行くのが惜しい氣持で全卷を面白く讀み終へることが出來た。この點音樂家で閨秀作家であると云ふ原著者エーヴ・キュリー（キュリー夫人の次女）の才筆、と飜譯に當られた川口氏外三氏の並々ならぬ飜譯技術に敬意を表さゞるを得ない。

キュリー夫人マリー・スクロドフスカヤは、一八六七年ポーランドのワルソーで一中學教師の三女として生れてゐる。千八百年代のポーランドと云へばロシアの壓制極端に達し、ポーランド人と云ふポーランド人は只管民族的獨立を希求し、ロシア皇帝の度重なる壓迫にもかゝはらず獨立運動をし續けた時代である。キュリー夫人の不屈の魂も畢竟その樣な時代が育てたものと見ることが出來る。二十四の時に姉夫婦を賴つて巴里に出て來たことが、彼女の科學者としての輝かしい生涯のスタートである。彼女はこの地でソルボンヌ大學に遊ぶ間に、學問上のよき指導者であつたピエール・キュリーに巡り會ふことが出來た。このピエールこそ又彼女のよき夫となつた人であつたのである。この樣にして幸福な家庭と科學者としての良心的な研究との二つながらを完全に持ち得た以後のキュリー夫妻を、われわれは唯美しいものとして眺めるばかりである――假令研究上には血のにじむ樣な苦しみはあつたにしても。

云ふ迄もなくこの本は一婦人科學者の傳記ではあるが、著者の記す所は單に科學者としての面だけではない。よき娘として、よき妻として、よき母親としての人間マリーの高潔な姿が綜合的に描き出されてゐる。その結果、餘りにも完全過ぎるものを作り上げて了つたと云ふ批評は免れ得ないと思ふ。が、之は充分に恕すべき餘地が見出される。又この本はどの一頁を開いて見ても極めて明朗で苦悶の陰が少い。これは勿論原著者の性格の現はれでもあらうが、從つて生ずる深刻性の缺如は何と云つても惜しいものに思はれる。然しその爲に却つて讀物としての健全性が十二分に確保せられてゐるのは皮肉と云へば皮肉である。近頃出版された傳記類の中では最もすぐれたものゝ一つとして推薦することが出來る。

（昭和一三、一〇、二五　神田區小川町三ノ八　白水社
四六判　六四八頁　二・八〇　普及版　一・八〇）

山本一清編

圖說天文講座（全八巻）

この講座は昭和十一年十月以降月一冊（時に隔月のことあり）づゝの割で刊行され、昨年十月第八巻を配本して完結したのであつたが、更に更年十二月から第二刷が刊行されてゐる。最初の版は紙製假表裝で價格も一冊一圓八十錢であつたが、目下刊行中の第二刷は布の本裝を施されて、値段も一冊二圓三十錢となつてゐる。

全八巻の内容は

一、天球と星座　二、太陽　三、地球と月　四、遊星　五、恒星
六、銀河と宇宙　七、觀測機械と天文臺　八、東西天文學史

となつて居り、天文學に關するあらゆる項目を包含して居る。執筆者は責任編輯者山本一清博士を初め、東京・京都・東北の諸帝大の天文學教室の人々、及び天文臺員の方々、之に若干の學校關係以外の專門家が參加して居られる。記述は專門學術的と云ふのではなく、講座であるから畢竟アマチュアを對象としたもので、第一巻から順次讀んで行つて見ると、天文と云ふことに深い關心をさへ有つてゐる人ならば、誰でも豫備知識なしに充分に理解出來るような書き振りである。又一冊の中を幾題目にも區切つて說明が施されてあるので、一冊を第一頁から最終頁まで讀み通さなければならないと云ふ重荷が大分輕減されてゐて讀み易い。例へば第一巻「天球と星座」の中は、天球と星の運行（山本一清）、星座の歷史と境界線（村上忠敬）、肉眼に見える毎月の星座案内（水野千里）、双眼鏡、小望遠鏡星座見學（野尻抱影）等に分たれてある。アマチュア向きのものとしては極めて一般向きのした良書として推薦し度い。

（昭和十一年以降刊　麴町區六番町　恒星社・厚生閣
菊判　各巻約二五〇頁　假裝各一・八〇　本裝各二・三〇）

林髞著

生理學なぜ、何故ならば

慶大教授、醫學博士林髞といふいかめしい名前を知らない人でも、探偵小說家木木高太郎といふペンネームには馴染のある人は相當に多いことであらう。

本書はこのやうに一面科學者でありながら他面大衆を相手に小說を書いてゐる著者が、この双方の立場をうまく生かして書かれた一般讀物としての生理學の本なのである。

一體科學の大衆化といふことは、無論必要なことでもあり、實際にも屢々企てられてゐることではあるが、これが正しく行はれることは、實は甚だ六ケ敷いことである。

もとより眞に科學知識を普及させる爲には、或程度の嚴密さが必要であるが、さりとて單に嚴密一方で押通したのでは、なかなか大衆はこれに喰ひついて來ないのであり、却つて科學知識普及の本來の目的に添はないことになる。

そこで本書を見ると、題目としても「血液の恒常性とは何か」基礎新陳代謝と作業新陳代謝とはどの位違ふかといふやうな見るからに生理的な固い感じのものと、「なぜ酒は心の憂さの捨て處であるか」「猫が三味線に合はせて踊るのは條件反射か」といつたやうな興味的な、くだけたものがあるしまた說き方からいつても、可なり學問的に嚴格な態度のものと、相當ジヤーナリステイツクなものとが適當に臨梅されてゐる。

從つて、本書は讀む者の側の目的なり、態度なりによつて、固くも軟くも、また深くも淺くも讀まれるのである。

しかし結局本書の效用は、固苦しくなつて學問的に讀むことよりも、寧ろ所謂中間讀物として、寢ころびながら輕く讀むときに發揮されるのだと思はれる。そしてインテリ達の坐談に知的に洗練された感じを與へるに役立ち得るであらう。

（昭和一三、四、五　麴町區丸ノ内丸ビル内　中央公論社
四六判　四〇〇頁　一・八〇）

第五　工學・産業

岸田日出刀　著

聖（かど）

本協會ではさきにおなじ著者の隨筆集『覺』（いらか）を推薦した。本書はその後約一ケ年間に渉り、折にふれて書き記した隨筆や評論、その他二、三ラヂオ講演の稿本をまとめて上梓されたものである。本書は前著と同樣、收めるところ「新春建築三題」以下四十篇、大部分建築を主題とした隨筆錄である。前著はそれまでの十ケ年近い長い間のものを蒐め

たものであるのに、本書は一ヶ年に渉るものであるといふのであるから、それだけでも著者がいかにその方面で珍重せられ、活躍せられてゐるかゞわかる。著者の筆も一層巧みとなり、その輕快な、どこか垢ぬけのした瀟洒な筆致は、自ら讀者の感興をそゝるものがある。それに本書の中にも著者撮影の寫眞が數多く挿入されてあるが、それが又本書を一層雅致あるものとし、讀者を樂しませるものにしてゐる。

著者の日本古典建築、乃至建築における日本的なものに關する興味は、本書の中にも著しく見える。「法隆寺と室生寺」「日本的なもの」「建築の日本らしさ」「日本の住宅」「日本建築の美しさ」等々。そしてそれらに現はれてゐる著者の思想は、タウト氏などと共通した、甚だ妥當な見解のやうであり、心ある讀者の共鳴を得るところであらう。

著者のこのやうな隨筆を書かれるのは、「社會と建築との接觸を幾分でもよくすることの助けとなつたら」と思はれるからであるといふ。本書の役割はまさにさういつた建築文化といふやうなものに對する一般人の關心を高めるためのものであらう。都市の美觀とか建築と國民保健とかの問題についても、一般世人が全體として建築に對する意識をもつと高めた上でなければならないと思はれる。

なほ特に注意したいことは、茨城縣内原にある滿蒙開拓青少年義勇軍訓練所の宿舍即ち所謂「日輪兵舍」の紹介である本兵舍は國策上よりしてもつと建築家の關心と科學的檢討を要求してもいゝものと思ふ。

（昭和一三、一二、一八　日本橋區通二丁目四　相模書房　四六判　三一一頁　二・五〇）

平尾善保著

最新住宅讀本

本書は教養の書であるよりも、實用の書である。先づ卷頭に各方面の大家達の題字や序文が賑やかに掲げられてゐる點、書物の裝釘、寫眞版の寫し方等、何としてもスッキリしたものとはいひ難い。しかし内容の驚くべく豐富なこと、頁數寫眞版の多い割合に定價の安いこと等は本書の内容の適切さと共に本書を實用書として推薦せしめるに足るのである。

ひと頃、生活の合理化が喧しかつたことがあつた。そして日本住宅についても、その合理化が叫ばれたことであつた。しかし傳統を深く考へない單純な合理化は、大抵失敗に終つてゐるのである。われわれの生活は人間としての生活であつて、そこには單なる合理性では割り切れないものがいくらもあるのである。それかといつて、あらゆる不合理なものをそのまゝにして置いたのでは、生活の進歩發展は望まるべくもない。生活の進歩發展は矢張りその合理化によつてなされなくてはならないのである。しかし、かゝる合理化は決して建築家の手だけでなし遂げられることではない。

なによりも一般生活人の理解を地盤とすることが大切なのである。そこで本書はこのやうな一般讀者の建築常識を高めることも庶期してゐると思はれるが、本書の内容、體裁等から推して、實際にはかゝる一般生活者よりも、女學校等の高等科の生徒達の參考書として、よりよく役立つものであらう。

しかし本書が一番に役に立つのは、寧ろこのやうな教養のためよりも、實際に家を建てようとする人々のためであると思ふ。一度でも自分で家を建てたことのある人ならば、建築をすることが何んなにむづかしいことであるかを身にしみて感じることであらう。大工や請負人に任せ切りで建てた家に錄なものが出來た例がない住み初めたその日からもろもろの不滿と不愉快と共に暮さなくてはならないのである。これを避けるためには建て主自身が充分に建築常識を用意して置くことが絶對に必要なのである。

本書は簡單な建築史から始めて、家を建てるまでの準備から、設計・實施方法・契約の仕方・住宅の構造等を實に親切に詳細に説明し、且つ豐富な圖解・寫眞版等を入れて、住宅辭典をなしてゐる。しかも讀み易く書かれてゐるので、誰にでも樂に理解されるのである。

（昭和一三、七、一五　京橋區銀座七ノ三　日本電話建物株式會社出版部　菊判　四八七頁　三・五〇）

小川太一郎著

航空讀本（改訂版）

本書の第一版は昭和七年十一月に刊行せられ、既に本會より推薦せられ、又文部省の推薦圖書の中にも加へられてある。然しこの改訂版のはしがきに著者は「前の版が昭和七年末に發行されてから五年の間に、航空界は殆ど舊態を一變した。舊版を增補訂正して、出來るだけ新しい内容のものにしたのが本改訂版である」と云つてゐる。この度この改訂版を得て再び之を本欄に掲げて推薦せんとする理由はこゝにある。

この改訂版は單なる字句の訂正や數字の改新だけではない一例を示せば、前版では世界最大の飛行船として米國のアク

ロン號が掲げられてあるが、改訂版では獨逸のヒンデンブルグ號を以て之に代へ、從つて之に關する寫眞や數字の類は固より、文章まで書きかへられてある。之は全く一少例に過ぎないが、かゝる改訂が各所で行はれてゐる。從つて頁數も前版が附錄共三八五頁であつたものが、改訂版では四九一頁となつてゐる。

序に「最近の科學智識の普及の顯著なものに鑑みて內容は舊版より遙かに專門的にした」とあるが、記述は極めて平易で寫眞や圖解の挿入は豐富で、然も解說の巧みさは決して本書を無味乾燥に陷らしめてゐない。通俗科學書としては上乘のものとして再び推薦し度い。因に著者は帝國大學助敎授で航空研究所員である。

（昭和一三、二、一　京橋區京橋三ノ四　日本評論社
菊判　四九一頁　一・八〇）

氏家壽子著

家計讀本

今や我國は未曾有の國難に直面し、戰時經濟體制は益々强化せられ消費節約の方策は著々實行に移されつゝある。かゝる時局に對應すべき銃後の國民は國策の線に沿ふた經濟生活をなすことは勿論であるが、平和になれてともすれば陷りがちな放慢なる生活を統制して健全なる家計を樹立しなければならぬ。

本書は「人生と豫算生活」「家庭豫算の原則」「家庭豫算の實行」「食物費の生きた使ひ方」「住居費、家具等の生きた使ひ方」「衣服費、身廻品の生きた使ひ方」「家政費の生きた使ひ方」「公課と保險料の使ひ方」「無理せずに貯金の出來る新工夫」「敎化費の生きた使ひ方」「交際費、娛樂費の生きた使ひ方」「保健衞生費の生きた使ひ方」「特別費、小遣雜費の新工夫」「收入の研究と收入を增す工夫」「赤字の克服法と堅實な家計の設計」「上手に買物をする工夫」「家計の配給組織」「家計合理化と消費組合」「物價と臺所の經濟」「新時代の上手な家庭處理法」「職業婦人の家計と結婚貯金」「月收四十圓から二百圓までの家計實例と批判」「非常時の家計とり方秘訣」「時局下に家庭を省みて」より成つて居り、徹頭徹尾豫算生活を强調してゐる。

「豫算生活」が家計の常識であることは何人も理解してゐるであらうが、その實行に至つては頗る危まれる。然し與へられた收入によつて理想生活を目指して進んで行くにはこれ以外に適當な道がないとするならば多少の手數を忍んでも、是非斯うした科學的方法によるの外はない。各家庭の動きが直に資源愛護輸入品の制限、廢品更生等に密接な關係を有することが明白に觀取せらるゝ現在に於て、家計の擔當者たる主婦は萬難を排してその實行に着手すべきであらう。

著者は日本女子大學の助敎授、この方面の專門家であるが本書は總ルビ付平易を旨として記述されて居るから、何人にも理解されるものと信ずる。

（昭一三、五、二〇　麴町區九段四ノ一三　婦女界社
四六判　三二二頁　一・三〇）

暉峻義等著

生產と勞働

大西清治

本書の著者である暉峻博士はあまりにも有名な士である殊に近年氏の主宰する研究所が岡山縣の倉敷より華々しく帝都に移轉してから、一層氏の存在を大きいものにした觀がある。筆者は嘗て倉敷時代から同氏によつて培はれた所謂暉峻門下の一人であつて、素より現在も公私の上に非常に密接な關係を持つてゐる。從つて十數年來抱かれてゐた著者の學問的思想には、絕えず接觸しつゝあつたので、最近特に氏の思索の中に愈々多面的な發展と、圓熟した結實とを見せつゝあるを感じてゐたのであるが、玆に本書の成るを見て私は一層その感を深くした。著者は決して世の所謂學者型の人物ではない。日常極めて多忙な中にあつても、其の讀書慾の豐富なる點が氏をして一面學者型な素質を與へてゐるのであらう。然し最も氏を特徵づけるものは、その弱さうな體格に似あはぬ、あふれるやうな勢力と、鐵の如き實行力とを持つ點であらうと思はれる。更に近年氏の生活の全貌に、著しく精神的要素の加はつたことも、一層同氏をして時局下に大きくクローズアップせしめてゐるのである。

本書は四六判三百餘頁の小冊子であるが、其の內に盛られた諸問題は、是こそ現下の時局に對し、極めて重要なる役割を持つわが產業界にとつて、將に金科玉條とも云ふべき、貴重なるテーマであり、敎訓であり、多くの研究主題を提供するものとして、之を世に推擧するに私は何等の不安を感じない。本書は其の序文に書かれてゐる如く、一貫した學的體系を以て論述せられたものではなく、過去一年間に於ける著者の論稿と、講演の草稿とを修正補筆せられたものであると云はれてゐるが、却つて私は本書によつて著者の最近に於ける學的思索の本流を、最も明瞭に示されたものではないかと考へてゐる。

著者は先づ第一章に勤勞による國民能力發揚の必要性を叫び、第二章では勤勞による國民體力の振作について述べてゐる。既に此の二つの論文の中に私は著者の抱いてゐる新勞働觀を看取せざるを得なかつた。第三章以下は謂はゞ本書の各論である。即ち第三章では勞働力の涵養に關する諸問題を捉へ、産業從業員の生産能力を健全ならしむるには、過去の資本主義的な人世觀からでは到底駄目であると斷じ、第四章では時局下に於て特に重要なる熟練工養成に關する基本問題について論じ、人格的活動の基礎をなす諸般の能力を涵養し伸張してこそ、始めて工人養成の方途が達せられると述べ、第五章では本書の中心とも云ふべき勞働時間問題を捉へて、殆んど全角度からの觀察と主張を論じ、第六章に於いて勞働力の保持と强化策について、第七章では戰時體制下に於ける我國主要産業の勞働の現狀を詳述し、第八章では戰時軍需工業の交替制に關して貴重なる指針を示してゐるのである。

謂ふまでもなく、現時我産業界に課せられた最も大きい問題は、その生産力をして出來得る限りの擴大を圖ることである。それは單に物的施設の擴充をのみ以てしては、到底不可能の問題である。よく之に應じて健全なる勞働力をわが産業界に召集せられねばならないのである。かくして物と人との平衡狀態が完全に保たれてこそ、始めて所期の目的を達し得るものと云はねばならぬ。玆に幾多の困難と矛盾とが潜在してゐる。此の難局の打開に對し、本書は良く之等の諸問題を解くものと云ひ得よう。敢へて本書を世に紹介せんとする所以である。

（昭和一三、九、一五　麴町區有樂町一ノ二常磐ビル内
科學主義工業社　四六判　三一六頁　一・八〇）

大河内　正敏　著
持てる國日本

日本は持たざる國と云ふのが我々國民の通念である。だが持たないと云ふのは一體何を持たないのか。植民地を持たぬと云ふのならいさ知らず、國防經濟上重要なる資源を持たぬと云ふならば、その言はいさゝか早計ではなからうか、と云つて我々に反省を促してゐるのが、本書に收められた主論文「國防資源論」である。

一口に資源を持つとか持たないとか云ふにも二通りの意味がある。一つは素材としての天然資源で、他は之を實用化せしめる工業力である。百の天然資源を有する國も、之を實用化せしむる工業力が五〇しかない時は、五〇の天然資源に對

しての五〇の工業力を有する國と何等選ぶ所はない。故に强力な工業力を以て不足せる天然資源を創造することに依つて一躍持たざる國から持てる國に飛躍することが出來る。然も之は机上の空論ではない。之を證據だてる幾多の例を著者は用意してゐる。先づ曹達である、十八世紀に鹽から曹達を製造する方法が佛蘭西のルブランに依つて研究せられ、之は其後現はれたソルベー法と共に今日立派に工業として成功し、アフリカ、蒙古あたりの天然曹達を完全に市場から驅逐してゐる。空中窒素の固定に至つては更に目覺しいものがある。今世紀の初め、諾威のビルケンランドの電弧法の出現以來、獨逸のハーバー・ボッシの法、佛のクロード、伊のカザレ、日本の臨時窒素研究所法等々空中窒素の固定法は各國から踵續として現はれ、世界唯一の天然窒素資源智利硝石が其價値を完全に失はしめられてゐる。又科學の進歩に依つて、資源を創造しない迄も、從來資源とすることの出來なかつたものを資源化することも出來る。例へば從來棄てゝ顧りみられなかつた貧鑛も、採鑛術の進歩と共に貧鑛處理をすることが出來、こゝにも持たざる國より持てる國への飛躍の途があるのである。

著者がこゝに「持てる國日本」と云ふのは、決して現在豐富な天然資源を有してゐると云ふ樂觀的な意味ではない。科學工業の振興如何に依つて「持てる國日本」への飛躍が確實であることを敎へて居るのである。そして著者は「本統に持てる國」などは世界の何處にあるであらうか、若し夫れ食糧資源に至つては、日本こそ世界に最も富める國ではあるまいかと云つて居る。

我々は國防資源に關する限り樂觀することは決して許されない。然し「持たざる國」と云ふ卑屈な觀念から開放せられ昂然「持てる國」への途を辿り得ることは何と云つても愉快なことに違ひない。唯これが科學工業の振興如何に依つて決することを最後迄忘れてはならない。

本書には以上の他に「生産擴充」と「熟練工養成」の問題を扱つた二三の論文をも收めてゐる。

（昭和一四、一、五　麴町區有樂町一ノ二　常磐ビル内
科學主義工業社　四六判　一八四頁　一・〇〇）

池田　善長　著
農村社會學研究

農村社會學が社會學の一特殊部門として學界に生れ出てから僅々三十年か四十年の學史を有するに過ぎない。

我邦に於けるこの學問の發展も無論この年數以内であること

とは申す迄もないが、然し斯樣な新らしい學問にも拘らず、比較的農村社會學に關聯した著書の多いのは、恐らくこの二三十年來我邦農村に繼起した所謂農村問題が、一般の關心をこゝに至らせたものと考へるより外はない。これに關して著者は序の中に

何故今日斯樣に農村社會學研究の必要が生れたものであらうか。之は一口に申せば、今日の農村に繼起する問題乃至事業が單に經濟學理のみを以てしては到底解決し得ぬ程度に農村を構造的に行詰らせ且つ事態を深化せしめて居り、其處に何等かの異つた視角から之を檢討しなければならぬ過程に立つて居るからである。此異つた視角こそ農村社會學的立場である。此立場は一切の「個」の立場を離れて總ての事象を集團の立場から解釋せんとするもので、社會學に其學理を仰いで居る。

と云つてゐる。

本書の著者は北海道帝大農業經濟學教室に於て高岡・中島兩博士の指導の下に此の學問を研鑽される新進篤學の士であることは、卷頭に寄せられた中島博士の序に依つて明かである、又著者の自序の中にもそれと窺へる。

本書の內容について云へば凡そ三つの篇から成つてゐる。その第一篇「農村社會學の構想及び其一研究」に於ては斯の學問の基礎的問題を說き、方法論の上から農村社會學を理論づけてゐる。次の「農村社會政策の指導原理及び其一研究」はこの學問の應用的部門としての農村社會政策を、最後の「農村社會學的調査の指針及び其二研究」に於ては農村調査の指針を示し、その具體的事例として二つの調査研究を述べてゐる。

この樣にして本書には農村社會學の理論方面應用方面が網羅的に取り扱はれ、且卷末には詳細に亙る邦文參考文獻が附せられてある點などから、この學問への入門書として見ることが出來る。その意味で本書を推薦し度い。

（昭和一三、三、二五　神田區駿河臺三ノ六　刀江書院　菊判　二八〇頁　二・二〇）

松田甚次郎　著

土に叫ぶ

本書の著者は山形縣最上郡稻舟村大字烏越に住む三十歲の青年である。本書は著者が盛岡高農を卒業して鄕里に歸り、一介の小作人となつて鄕土鄕黨の生活向上のため奮鬪努力した十年間の體驗記であり、報告書である。

內容は次の十四篇から成つてゐる。

恩師宮澤賢治先生—鄕土・烏越部落—村芝居—隣保館—婦人愛護運動—精神鍛錬の實修—我家と私—私の農業經營主義と實績—最上共働村塾—日本協働奉仕團の結成—農村啓蒙行脚—來訪者を語る—善き父と善き友を語る—農村最近の動向と時局

本書を讀んで最も强く感銘せられるところはその猛烈な逞しい實行力である。あくまで農村の現實生活に立脚し、善しと信じたことは如何なる反對障害にあつても斷乎として遂行するのである。次に本書を讀んで快く思ふことは、極めて率直坦懷に語つてゐることである。凡そ書名の「叫ぶ」といふ語の暗示するやうな靑年客氣の空虛な悲憤慷慨はない。三十歲の弱年にしては稀に見ると思はれる堅實にして謙虛な態度を持してゐる。我々はこの態度を今後の著者に一層希望せざるを得ない。質實に、謙虛に、一步々々健鬪せられ、眞に昭和の二宮尊德たらんことを熱望するものである。

本書は農村靑年必讀の書、現下國民のあらゆる階級層の人が一讀して然るべきものである。

（昭和一三、五、三　日本橋區通三ノ二　エンパイヤビル　羽田書店　四六判　三九四頁　一・八〇）

橋本傳左衛門　監
加藤完治
永雄策郎　修

滿洲農業移民十講

本書に收錄せられた諸論文は次の十篇である。

第一講　滿洲農業移民の沿革　京都帝國大學教授 農學博士　橋本傳左衛門
第二講　移民に關する二三の辯妄　拓殖大學教授 東京帝國大學教授 經濟學博士　永雄策郎
第三講　滿洲農業移民の現況　拓務省拓務技師　淺川共二
第四講　農村經濟更生と分村計畫　農林省農林技師　遠藤三郎
第五講　滿蒙開拓靑少年義勇軍の重要性　滿蒙開拓靑少年義勇軍訓練所長　加藤完治
第六講　滿蒙開拓靑少年義勇軍の組織　農村更生協會理事　杉野忠夫

第七講　滿洲農業移民の生活
附　移住地の農家暦
第五次移民永安屯團長　木村　直雄

第八講　移住地の農業及び農業經營
農村更生協會八ヶ岳修練農場主任　久保　佐土美

第九講　移住地の主要作物と其の栽培
第二次移民千振團長　青少年義勇軍勃利訓練所長　宗　光彦

第十講　滿洲の畜産
農林省畜産局長　岸　良一

右の中第一講及び第五講は拓殖大學滿洲移民研究會初會式における講演である。橋本博士の講演は滿洲農業移民の沿革を簡潔に印象深く語られたもので、本書の序説としてもまことにふさはしいものである。これによつて一般の人々は滿洲移民の重要性とその先覺者加藤完治氏の功勞を深く腦裏に刻みつけられるであらう。加藤氏の講演も諧謔を交へながら自己の經驗と信念の一端を語られたものである。その他の講は何れも夫々の專門家による力篇であつて、就中第三講の「現況」は國民必讀のものと思はれる。第七講の「移民の生活」も誰もが讀みたいものであり、興味あるものである。新東亞建設のため貴重な著作として普く推奬したい。

（昭和一三、一〇、一五　神田區錦町三ノ二二　地人書館
四六判　三八四頁　二・三〇）

三浦定之助　著
魚の國

三浦定之助氏の「潛水業二十年」は既に昭和八年七月に紹介されてゐるが、再びこの魚の國を推すことになつた。三浦氏は現在、伊東水產試驗場長でその天職に對する研究熱のすばらしいことゝ、又水產技師には豫想されない文筆の持主である。氏は自己の發明になる潛水衣を身につけ、自ら海底に沈んで、つぶさに魚の習性、海水の物理的研究、海水中に於ける網底の運動等を踏査し、觀察し、研究し、記錄した。本書はかゝる貴重なる體驗に基いた隨筆である。と言つても決して片苦しい、讀み難いものではなく、精緻なる觀察描寫と洒脫な文體は大いなる魅力をもつてゐる。本書で取扱はれてゐるのは、鯛、鰤、鰹、鮪、鰯、玉藻、鱚、鮫鱶其他である。いまその二三をこゝにあげてその全貌の片鱗を示したいと思ふ。

卷頭の「鯛」ではトロール網による鯛の捕獲がいかにも興味のある讀物である。こゝには網が時速一哩乃至二哩で曳かれてゆくにつれて、これに遲れじと前進しつゝある潛水夫の眼を通して觀察されたる海底魚群の運動が微細に描かれ、最後に見事に鯛が網の中に吸ひこまれるところが述べられてゐる。刻々に收縮して行く網と魚群の運動が眼に見るやうに書かれてゐるのはなか〳〵の達文である。「鰤」の項では鰤一族の名稱の起原について興味のある考察が加へられてゐる。ブリとはその本場たる關西地方から起つたもので降りの魚の意味である由、卽ち霜が降る十一月頃からその漁獲が初まるところに〻の由來がある。更にアオといふ名稱が與へられてゐるが、これは東北地方に於ける名前である。これは同地方の大謀の發生地たる牡鹿半島西岸あたりから出た名である。この意味は靑田の魚、卽ち六月田植の頃から漁が初まるが故である。關東地方でその一年仔をいなだといふが、その沿革の灣內では少し風がたつと白濁を生じ易い。この濁りの中に一年仔が育つ。居魚濁り卽ちいなだの名が生じた。かうした興味ある記事が充滿してゐる。年額三千萬圓を超え漁業中の王座たる「鰯」の生活史は單に他の魚腹を肥やす爲に生れて來た樣な被殺戮史で、大は鯨から鰹、鯖、鰤、鯛等あらゆる魚に襲擊される由である。しかも陸上では食料としてはもとより家畜菜園から米麥肥料に至るまで萬物みな鰯の恩澤に浴するとは弱きものゝ偉大なる力に驚かざるを得ないのである。なほこの外いづれの一篇をとりあげても、飽くことのない興味深く、同時に得るところが多い。水產國日本に適しい優れた隨筆である。

（昭和一三、七、二〇　日本橋區通二ノ四　日本橋ビル　相模書房
四六判　三一六頁　一・七〇）

木村增太郎　著
戰時日本貿易論

現代の戰爭が尨大なる物資を消耗するものであり、且つ我國が、軍需品にせよ又輸出品にせよ、その原料を外國に求めねばならぬことは、支那事變勃發以來、我國貿易の樣相を全く變へてしまひ、今や爲替相場の堅持と時局必需品輸入の確保の二點を中心として我國貿易は强力に統制管理され、その運用如何は戰時經濟の全體制の死命を扼するとまでいはれてゐる。

更に時局は進んで、我國は軍事行動の傍、一面長期建設にその步を進め、軍需物資の調達と共に大陸に於ける新秩序建

設の爲に夥しい物資を必要とするに至り、我國貿易振興の計畫强化が決定的重要さを以て要請さるゝことゝなつた。加ふるに事變終局の大目標である日支兩國の共存共榮の基礎條件の中には、兩國の產業貿易調整の容易ならざる問題が伏在してをり、その適切なる解決が要望されてゐる。

かくて現下貿易の問題は、新東亞建設の重大使命を荷ふ我國民全般の深い理解と協力とを益々必要とする緊急問題となつてゐる。

今、本書の內容を見るに、世界貿易界における我貿易の特殊性と近年の發展、東亞經濟ブロック內の日滿支貿易の實相戰時下我貿易の果しつゝある役割及びその統制管理の强化過程、並に戰時貿易を繞る物價問題等現下貿易に關する各種の實際問題の本質を究明すると同時に、進んで貿易振興今後の一般方案と、特に圓ブロック內貿易の調整と、日支經濟提携の方策が力强く提議されてゐる。尙ほその記述は讀みよく、實情を明確ならしめる爲には幾多の統計が巧に加へられ分り易く說明され、然かも事變終局の目的大成の大局より貿易振興の必要と方策とを力說される著者の熱意は各所にあらはれ讀者に深い理解と感銘を與へることを確信する。

最初に述べた樣な見地からこの方面の良き讀物として一般の閱讀に本書を推奬したいと思ふ次第である。

（昭和一三、一二、一六　芝區新橋七ノ一二　改造社
四六判　三四三頁　二・二〇）

第六　美術・諸藝

東洋の理想

岡倉天心著
淺野晃譯

これは、天心岡倉覺三が、英文でものした著述『東洋の理想』—The Ideals of The East with Special Reference to The Art of Japan の譯書である。『この書がロンドンで上梓されたのは、明治三十六年、すなはち日露の風雲まさに急ならんとする時であつた。「それは言ふまでもなく、英語を通じて、汎く全世界の識者の前に、日本の眞實を明らかにしようとしたのであつた。」（譯序）

この書は日本人の間にも『茶の本』と共にあまりにも有名ではあるが、從來あまりにも讀まれてゐないものであつた。近年日本主義の勃興に促されて異常の注目を受けるやうになり、昭和十年『岡倉天心全集』が刊行され、本書の全譯も勿論載錄せられた。この譯書は若き日本主義者淺野氏の「多年の念願」になる譯出であつて、右『天心全集』の譯文をも逐一參照し、一字一句をいやしくもしなかつたといふ良心的な譯書である。

この書は東洋、殊に日本美術の歷史を概述したものではあるが、美術史といふよりも精神史である。極めて大所高所より東洋の美術を大觀したものであつて、その識見は廣大であり、卓拔であり、その立論壯大、文勢天馬空を行くの慨あるものである。美術に發現する東洋精神のうねり行く大きな流れが凝つて日本美術の粹となつて現はれるといふ奔放自在な論述は、高らかな理想の歌を聞く思ひがあり、全篇を貫流する浪漫的情熱の高鳴りは、讀者をして思はず感奮せしめ、一氣に讀了せしめずんばやまぬものである。かくの如く本書は內容を知的に受容するよりも感情的に享受し、崇高な理想に向つて鼓舞せられるといつた性質のものであり、今日若き日本主義者達によつて天籟の聲の如く尊重せられてゐることも故あるかなと思はれる。譯者は「この書以上に見事な日本精神史、東洋自覺史を、まだ知らない。」といふ。苟くも日本人たるもの今日かくの如き古典的名著を一讀して然るべきであらう。

（昭和一三、二、二　四谷區愛住町一九　創元社
四六判　三〇三頁　一・五〇）

あらえびす（野村胡堂）著

レコードによる古典音樂
レコードによるロマン派の音樂

レコードによる音樂鑑賞を、最初から音樂史的になすのが果して最も正しい方法であるかどうかといふ問題は別として一應西洋音樂をあれこれと聞いて之に親しみを持ち得た人は、次の段階として音樂史的に鑑賞態度を整理して行く必要がある。その樣な要求が生じた時、本書は洵によき伴侶となり得る。

こゝに掲げた二書の中「古典音樂」の方は昭和七年に「バツハからシューベルト」と云ふ書名を以て刊行されたものゝ追補に當るもので、同書はその折本會からも推薦されゐるがその後五ヶ年を經た今日、レコード界の進展に伴つて多くの增補を必要とした爲、前著の補遺と云ふ意味を加へて本書が上梓されたのである。勿論本書だけで獨立した新著とも見られるもので、前著はなくても一應は間に合ふ樣に企てられてあるが、やはり前者も併せ讀むに越したことはない。內容は音樂の父と云はれるバツハから初めてヘンデル、グルツク、ハイドン、モーツアルト、ベートーヴエン、シューベルトの七人が擧げられてあるが、大半はバツハとベートーヴエンとシューベルトに關する記述である。それ等の大作曲家の作品の全體的特色と云ふ樣なものを極く簡單に記して、あとは個々の作品を吹き込まれたレコードの種類に從つて、解說と云ふよりは寧ろレコードの吹き込みの出來不出來に關して感想を述べたものである。故に例へばシューベルトのリートの中どんなものがレコードになつて居り、そのレコードがどんな出來榮えであるかと云ふ樣な要求には、本書は最も適應したものと云ふことが出來る。

後者「ロマン派の音樂」は前者「古典音樂」に續くもので あつて、メンデルスゾーンから初まつて、ウエーバー、ロツシーニ、マイエルベール、ドニゼツテイ、ベリーニ、シューマン、ショパン、リスト、ワグネル、ベルリオーズ等が收められてある。記述の方法は「古典音樂」と全然同樣である。

レコードの蒐集に就いては本邦隨一と稱せらるゝ著者が、二十數年來の蒐集の經驗を基として、「後より來る若い蒐集家達に、時間と經費の無駄をさし度くない」ために記されたものであるから、この點大いに感謝と敬意を表して可なるものである。讀物風の記述ではないが、レコードに依つて音樂を鑑賞しようと云ふ人々には、本書を座右に備へつけることに依つてレコード選擇の良い指針となることを信じて推薦する次第である。

（昭和一二、一二、一五）

古典音樂　四六判　三二六頁　一・七〇
ロマン派の音樂　四六判　四二〇頁　二・三〇
京橋區京橋二ノ七　商榮ビル　レコード音樂社）

風卷景次郎　著

謠曲

能樂が五百五十年の茫々たる傳統をひいてゐることは誰もが知るところであるが、まことに室町時代の武家の素朴な觀賞物であつたものが今やコンクリートの能樂堂に於て演ぜられ、椅子に倚つて觀賞されつゝある。能樂研究の權威野上豐一郎氏の著に「能の再生」があるが、誠に嘗て衰滅に瀕した能樂は現代に見事に再生し、しかも創造當時に於ける寫實演劇は五百年に亘る洗練を經て高度の象徵藝術に昇華してゐる。更に東京音樂學校が洋樂と並行して和樂をその教授科目の中に加へるに及んで、謠曲も又その一科として取入れられ觀世、寶生の兩家元は教授として招聘されてゐる。藝術に底流する民族精神の力强い時代的示現とも云ふべきであらう。

本書は新時代の能樂觀賞者のための入門書であり、平易簡明な點が長所である。全卷を序篇・評釋篇・研究篇の三部に分け、序篇には謠曲の構成、各流謠本、文獻を網羅し、評釋篇には謠曲中の脇能物、二番目物、三番目物、四番目物、五番目物の各代表作卽ち高砂・田村・忠度・井筒・熊野・松風隅田川・砧・橋辨慶・融を擧げて、その各々に懇切な解說を附し、研究篇には能樂の歷史とその構成が述べてある。

因みに著者は東京音樂學校教授で、新進の國文學者である。

（昭和一三、一二、二五　京橋區京橋三ノ四　日本評論社
四六判　三五八頁　一・五〇）

第七　語學・文學・隨筆

山田孝雄著

「國語尊重の根本義」を讀む

五十嵐　力

本書は「國語尊重の根本義」、「語の本意と語感」、「國語と國民性」、「漢文漢語の影響によりて生じたる國語の諸相」、「一國の文字の輕々しく更ふべからざるを論ず」、及び「日本語の純粋性」の六篇から成立つて居る論文集である。日本諸學振興會が昭和十二年十一月に開催した國語國文學會で試みられた「國語尊重の根本義」が中心の意義を持ち、兼ねて指示性に富んでゐるので、之れを卷頭において全篇を代表せしめられたのであらう。

收められた六篇には、それ〴〵に異つた内容の分野がある。最初の「國語尊重の根本義」は現代の日本に於ける諸學振興の楔子として國語尊重の大切なることを説かれたものでこの中の辯を行るところが、實に本書獨得の壯觀である。

山田博士は云はれる。

國語といふものは、申上げるまでもなくそれによつて國民の精神が傳統的に傳はつて居る。この傳統的に傳はつて居る所のその歴史を無視し、傳統を無視するやうな態度で國語を尊重してみても却つて國を害する虞れがある。國語尊重の根本義といふのは正しい國語を正しく傳へるといふ所にある。國語の正しい歴史、正しい使ひ方正しい理解、正しい觀念を離れてしまへば、國語を尊重するといつても國は救はれませぬ。その正しいとは何ぞや、これは結局傳統を重んずるといふより外に正しいとはいへない。

これが博士の所論の全體に通ずる根本思想で、その熱誠に對しては、恐らくいかなる論敵も襟を正さずには居られぬであらう。

本書には細かい目次がない。索引も無論無い。從つて讀者は片端から着々と讀み進まねばならぬが、眞面目なる讀者は到る處に於いて、意義深く興味饒かなる收穫に報いられるであらう。博士の論は根本的で、用意周到で、獨創に富んで居る。而して本筋の論の内容が、充實して立派に開展して居る間々に、副産物として隨所に博士の餘滴が光つてゐる。語感論の中に、

今の一般の風潮は、國語に對して口で尊重すると申しますけれども、少しも尊重して居らないといふ證據が到る處にあります。往來を歩きますれば國語をぞんざいに使つて居るといふ見本は、我々は殆ど一足毎に見せ附けられて居るといつてよいのであります。曾て或る代議士が私の處に寄越した葉書に、親展といふことが書いてある。……これは語感どころの話でない。言葉そのものゝ表面の意味をさへ知らない。……さういふものは皆代議士の資格をもたないものであります。さういふ代議士は皆試驗して落第さして宜しい。私に言はせれば、さういふことが國語を尊重しない證據になる。

とあるが、痛快なる引例である。又同じ語感論の中に、西行法師の

何事のおはしますをば知らねども
　　忝けなさの涙こぼるゝ

を引き、かういふ歌に對しては、語感ばかりでなく、まづ當面の語義を知らねばならぬと云つて、

大體德川時代明治の初め迄は、坊さんは伊勢神宮にはお詣りは出來ませぬ。それで宇治橋を渡ることが出來ない。宇治橋のこつち側から五十鈴川に向つて右側の岸をずつと廻りまして大神宮樣の正門がこつち側にあります。その丁度眞つ正面に當るところに五十鈴川の向側に僧尼拜所といふものが明治初年までありました。そこから五十鈴川を隔てゝお辭儀するより外仕方ない。西行はどんなに偉い人でも坊さんですから、そこより奥へ行けませぬから、「何事の在しますをば知らねども……」と詠じたのでありませう。

と書いてあるが、恐らく多くの人の教へらるゝところであらう。

また「日本語の純粋性」の中に、

外國語の綴りには一字でも誤るまいとしながら、國語の假名遣ひなど、一字位どうでもよいではないかなどといふ輩は國語を愛せぬのみならず尊重もせぬものである。六七年前には實にかやうな不遜な言を雜誌に公にした校長や訓導が有つたものである。かやうな徒輩が國語を今日の危機に陷らしめたのである。

とあるが如きは、博士の熱誠が迸つて此の激語となつたのであらう。

本書には到る處に著者の學者的、國士的の面目が光つてゐる。たゞ國語尊重の爲めのみではない、國語を通して國民性を知らうとする者の、是非とも心讀すべき書物である。

（昭和一三、一一、三　神田區小川町三ノ八　白水社
菊判　二七四頁　二・〇〇）

東條　操著

方言と方言學

昭和の初年以來民俗學の興隆に伴つて方言の研究が熱心に

提唱され、爾來全國各地に篤學の士が輩出し、熱心な研究が繼續され、その業績にはまことに見るべきものがある。しかし一般の人に方言に就いて正しい理解が持たれてゐるとは思はれない。方言とは、都會で耳慣れない、妙な訛りのある、變つた言葉であつて、まことに滑稽なものであるなどと輕率に考へられてゐるのが普通のやうである。かゝる點に於て方言とはいかなるものか、その研究はどうして行はれるかを正しく敎へてくれるのが本書であり、しかも初學者にもよく理解の出來るやうに書かれた良著である。

著者は第一に「方言」の正しい意味を說明して「一國語が使用地域の相違によつて發音上、語彙上、語法上に於て相違ある若干の言語團に分裂した時にその各團を方言と云ふ」と述べてゐる。從て方言と標準語とは對立して考へるべきものでなく、又下品上品などの價値判斷などのなさるべきものでもない。そして方言の研究とはその地方地方の全言語現象を對象とし、これを音韻、語法、語彙の三面から調査を行ひ、更にその現象の動因を說明するため他地方のそれと比較を行ふものである。尤もわが國の方言研究は未だ方法論が確立されてをらず研究の統一を缺く憾みがある由である。次に江戸以前、江戸時代、明治以後に分けて方言資料が擧げられてゐるが、風土記、萬葉集、就中東歌・防人歌は東國の音韻、語法の特色を傳へた貴重な資料なること、室町末期にはロドリゲスの日本語典中にわが國最初の方言の科學的な記載があり江戸時代には安原貞室のかた言、越谷吾山の物類稱呼が注目すべく、明治以後には斯學の權威者の努力にかゝる數多くの出版のあること等が詳細に述べられてゐる。次に方言區劃と研究法が述べられてゐるが、まづ本州東部方言、本州中部方言、本州西部方言、九州方言に分かち、更に音韻、語法、語彙の三方面を考慮して細區分がされてゐる。この項は佛蘭西の言語地理學の項と對照すると興味がある。研究法は本書中の重心をなすものであるが、大體初學者に理解出來る程度に行屆いた說明がされてゐる。方言學者が方言の採集及び研究に當つて、いかに苦心を拂ふかゞ手にとる如く述べられてゐる。この項は研究の準備、音韻の研究、語法の研究、單語の研究、方言集の編纂、方言分布圖の作成の六項に分けられてゐる。この外、方言研究の歷史、各地方言の粗描、方言文學ところどころ、方言書目等がある。方言が一部篤學の士にのみ委ねられてゐて、一般が無關心でゐるのは斯學のために遺憾である。本書の如きが廣く讀まれることを希望したい。

（昭和一三、六、三　日本橋區通三ノ八　春陽堂
四六判　四七〇頁　二・八〇）

菊池寛著

日本文學案內

本書は著者菊池寛氏が文學者としての造詣を傾けて、一般人のために平易且簡潔に說かれた文學概論とも云ふべき書である。其所論は非常に大摑みではあるが、文學の道を案內して極めて分り易く說き去る間に、著者の個性的な血肉を通はせてゐるところ、流石に餘人の企て及ばざる美點がある。

內容を見るに、最初に「文學とは何ぞや」と題して文學の本質を闡明し、「文藝は人生の實驗室である、少しの危險も伴はない、人生の眞相を示す案內記である」と云ひ、人生の大處高處より文學の眞粹を直截に示してゐる。殊に「作家凡庸主義」を說くあたり、文學に携はる著者の人柄を髣髴せしめる。

次に文學の享受鑑賞のために便にし、作家を志す者のための手引として、日本の上代から德川時代、明治時代から現代までの文學及び外國文學の傑作名著及び文豪を網羅し、簡明の解說を以て必讀の書物を枚擧してゐる。更に文藝思潮、小說の分類と形式、戲曲の要件について懇切に說明し、著者の抱懷する理想や主張を知る上で、著者の他の著書に劣らざる內容を具へてゐると思ふ。

以上のやうに本書の價値は文學の本質から日本文學及び歐米文學を解說批判し盡した中に、菊池氏の文學體系或は文學する心が示されてゐることであつて、何人にも判るやうな親切な說き方で說かれてゐるが、實は數多の問題を含み、これを解決してゐるので、文學案內はまた人生案內とも云ふべきものである。

本書は文學を志望し小說を書かうとする人は勿論、文藝を常識的に知らうとする人によき指導書となるものである。

（昭和一三、一、一六　麴町區內幸町大阪ビル　モダン日本社
四六判　三五七頁　一・六〇）

小宮豐隆著

「夏目漱石」を讀む

森田草平

私ども、所謂漱石の門下生は、めい〳〵夏目漱石を自分一人の先生のやうに思ひたがる傾向があつた。これは何も漱石の門下生ばかりとは限らない、凡ての弟子が先生を敬愛するの餘り、其の愛がだん〳〵個人的になつて、終に自分一人の

もののやうに考へたがるのは自然の勢ひとも云はれよう。たゞ私どもの場合に於て、その傾同が強かつただけである。特に小宮豐隆君に於いて強かつた。で、彼は自分こそ主として先生の遺業を纒め、整理し、自分こそ先生の傳記を書く唯一の資格を有するものだといふ信念を抱いてゐた。そして、着々それを實行に移した。その結果として生れたものが、この「夏目漱石」傳である。

さう云ふ信念の下に書かれたものだから、この書は實に用意周到を極めてゐる。誰からも指を差されないやうに、文句を云はせないやうに、公平で、無私で、科學的で、周到精緻であることを期すると共に、漱石の弟子だからといふので、我が佛尊しの弊に陷らないやうに、彼としては慘憺たる注意を拂つてゐる。もと〳〵彼は私どもの仲間では一番學者的な頭腦の持主であるから、用意の周到といふことにかけては、この書は些の遺憾がないと云つていゝ。夏目漱石の作品や論述は勿論、日記、書簡、談話筆記を始めとして、苟も漱石に關係のある文献は悉くこれを捗獵して、縱横に引用すると共に、その間の聯絡をつけて、内外兩面から漱石の生活の機微を闡明にしてゐる。まことに「事苟も夏目漱石に關すれば、掌を指すが如し」とは、この著者の謂ひであり、この書のことである。しかも、あれだけ漱石先生に昵近した間柄でありながら、自分自身の個人的な觀察や記憶に據る所見を可及的避けて一々文献に徴してゐるところにも、著者の用意が窺はれる。實際、この書のやうな方針で書かれた夏目漱石傳としては誰が書いてもこの書の上に出ることは適ふまい。唯一無二の漱石傳であることを如實に示したものである。

要するにこの書は夏目漱石の解説である。同じ著者が最近の漱石全集の卷末に附した作品の解説の連續である。勿論著者はこれに依つて漱石の全貌が窺へるやうにしてゐるには相違ないが、餘りに個々の事實と文献に重きを置いて、その解説に專念した結果個々の事實から歸納して「夏目漱石とはかくの如き人間なり」といふ結論を得、その大前提の下に、逆に個々の事實を説明し去ると云つたやうな痛快味を缺く。私は前に一度さう云つた批評を下したことがあるが、小宮君は「それは青いものを赤くないと云つて攻擊するやうなものだ」と辯駁して來た。勿論さうだ。私はこの書がこの種類のものとして無二の漱石傳であることを承認すると共に、又別の種類の漱石傳があり得ることを暗示したに止まる。つまり著者が餘りに學者的、良心的であるために、讀者としての私どもは、私どもの頭の中を整理してくれる恩惠には浴するが、私どもの知つてゐる以上の漱石をこの書に依つて知ることは出來ない。一般の讀者としても隔靴掻痒の感を免れなからうと思はれるのである。

例へば漱石は明治二十九年の春都落ちをして松山に赴任した。その動機は失戀にあると一般には噂された。が、著書の博引旁證と理詰めのロジックによつて、それが失戀でなかつたことだけは成程と點頭かれる。然らば何であつたかと云ふとそれは分らない。神經衰弱と精神異常の問題についても、さうである。私どもゝ先生を精神異常だなどゝは一度も思つたことがない。しかし傳へられるが如き行動を果して神經衰弱だけで説明することが出來るだらうか。疑ひなきを得ないのである。要するに著者は漱石を勞はり過ぎてゐる。が、これは何うも致し方がない。例へば博士問題の如きも、辭退は先生の主義の問題で、その間に一點私心のなかつたことは云ふ迄もない。しかし先生の親友狩野亨吉先生も、弟子の湯淺麗村氏の如きも、先生のために遺憾としてゐられる。想ふに先生があの場合全然閑却された一面の見方もあつたのである。著者は先生を裁く立場にゐないから、それに觸れないのは固よりその所であらうが、漱石傳を書いたとなると、これがたゞ辯護のために書かれたものゝやうに世間から受取られるのは、是非もない。むづかしいものである。

私は本書の前半は比較的精讀したつもりだが後半はこの紹介を書くために、ほんのぱら〳〵と通讀したに過ぎない。本當にこの書を批評するためには、更に精讀の上、私自身の態度も極めてかゝる必要がある。それに與へられた紙數では、通讀の感想だけでも大部分書く餘裕がない。切に著者及び讀者の諒恕を望む。

（昭和一三、七、一　神田區一ッ橋二ノ三　岩波書店
四六判　八八六頁　二・五〇）

大熊信行著

文藝の日本的形態

經濟學者にして歌人である著者が、現在日本の文藝を享受者の立場から論評した文藝時評集である。この著作は現代日本のヂャーナリズムの純粋の所産だと、著者自身本書の序文に云つてゐるやうに、ヂャーナリズムの要求に適應する諸藝術の存在形式を考察し、その奥底にひそむ日本的形態を剔抉してみせたのである。

その剔抉の仕方は、事物の本質に肉迫するために最も遠い外側から無觀念で接近するといふ方法であつて、事實著者は文壇の外にゐるだけに混亂緩急する文壇的流行の轉換に捉はれず、いかにも見事に獨特な文藝時評論を建設してゐる點、

讀者に新しい感興を與へるのである。これは、文壇の外にゐるとはいへ、文學的教養を充分身につけ文學の內部感覺にも相當に通曉してゐる著者にしてはじめて爲し得るところであらう。

收むところ、すべて諸雜誌・新聞等に登載されたものであるが、全體を貫く糸は確かにあるので、鑑賞の生理、作品の壽命、近代文學の默讀性、ラヂオ藝術、映畫、文學その他に通ずる筋の問題など文藝の存在形式から觀た性格を取扱ひ、いづれも現實の生きた問題ならざるはない。特に本書の內容の主位を爲すものは、日本の新聞に連載される新聞小說論である。さうしてその連載といふことは、ひいては作者と讀者との交流といふやうな別な形式的可能性も考へられ、享受者としての日本人の日本的性格が發見されて、甚だ興味深い研究である。尤もかういふ考察には、小說自體の形態の歷史的考察が必要であるが、これは他日を期待し、この研究の完璧を望みたい。

同じ著者の「文學のための經濟學」の續篇として、日本文學の推進力となるものを特に經濟的頭腦によつて綿密に模索して、最も遠い距離から文學の最も中核の生きた諸問題を興味深く發展させてゐるのである。「最も遠い外側から」とは著者自身の云ふところであるが、小說、ラヂオ、映畫等の讀者、聽取者、享受者としての立場からの發言は、現在餘りに等閑に附されてゐる直接の問題である。この意味で非常に新らしい內容をもち、注目に價する社會的文藝論であるといふことが出來る。

（昭和一二、一〇、三〇　神田區神保町一ノ一　三省堂
菊判　二一四頁　一・五〇）

大澤　衞　著

日本文學と英文學

著者は福島高等商業學校教授で英文學を專攻してゐる。本書は文藝を通してみた文化を中心に置いたエッセイ集である。「文藝に於ける闇の精神」「宣長と外國文化」「日本文化への覺書」「渡り」「大郷と田園」「喜劇精神を包む喜劇」の六篇が收められてゐる。いづれも稀に見る才筆を以て縱橫にその蘊蓄を傾注したものであつて、第一頁より讀者を魅了して放たさないものがある。著者はその序文の一節に於て

北歐人がその傾向を强めて世界にしたあの地球の機械化といふことは、人類の興味を、自然界の物質的征服や、生活の外的組織や、科學的探究にばかり局限し勝ちである。それは現象の下にひそんでゐる生きたものさへ掘り下げる無能力を意味し、人間の本性に關する知慧を、非科學的、非合理的なものとして疎外し、人格喪失といふ危險にみちびく、カイザリングはこのやうな傾向を、人間の物質化の最後の段階とし、人間の昆蟲化であるといひ、それは魂の衰滅の必然的過程であり、人間の人間脫却であり機械による生命の奴隸化を、窮極に於て馴致する一切の機械化し得るものゝ、過重評價であると言つてゐる。（中略）

自國の文化は自國のものゝみの執着からは究められない。自國のものゝ精髓は、他を俟つて「成極化」するのである。英人が英國の大學の英文學や英語を研究し講義することは凡そ拙劣な訓練だと、エリオットが言つたことがある。自己を自己のものだけから抽象することは初めから誤りなのだ。

この二點こそ本書の全篇を貫いてゐる基調である。そして同時にこれこそ我々が心の底から叫びあげない聲ではないか。本書の各文字が我々をしつかりと惹きつける所以のものもまたこの精神でなくてはならぬ。

卷頭の「文藝に於ける闇の精神」は本書中の壓卷である。著者は世界諸民族を光と闇の兩面より分けた。古來東南地方の民族は光に、西北方の諸民族は闇に重きを置くとする。卽ち古代埃及から始まつてバビロン、アルメニア、ペルシヤ、印度より日本に至る地域の民族は光明を愛好し、太陽を崇拜する。然るに希臘、羅馬より更に北方の北歐民族は闇に生る梟人種である。而してこの闇の精神こそ世界の文化を建設し思想の深さを形作る偉大なる精神である。闇の精神とは「不斷の否定」の精神であり、「現世的價値に對しては、個人的にも、社會的にも、歷史的にも常に不斷の否定」なのである。この精神は光明析求の樂觀主義の民族が文化の躍進から顚落するに反し、高く人類の文化を揭げつゞけてゐる。しかし幸ひにしてこの光明崇拜の民族系中から印度の佛教によつて闇の精神を作りあげ、又日本はこの佛教を通し、又逸早く西歐の文化を吸收同化することによつて闇の精神をしつかりと受入れた。これが日本が單なる光明思想に終らなかつた點であり、その飛躍の源をなしたものであるとする。

以下の諸篇いづれも又この闇の精神を延長して說いたものである。

（昭和一二、一一、二八　神田區神保町三ノ三　協和書院
四六判　三三九頁　一・五〇）

久松潜一著

日本文學評論史

古代中世篇
近世最近世篇
總論歌論篇

本書は三卷より成るものである。第一卷及び第二卷は昭和十一年十月二十九日の發行にかゝり、第三卷は本年四月三日に發行され、漸く完結を見るに至つたものである。本協會においては、さきに第一第二兩卷の推薦を決定しておいたのであるが、今第三卷の刊行を待つて纒めて推奬紹介することゝした。

本書は久松博士が多年に亘る研究の成果を集大成せるものであつて、あくまでも學術的研究著作ではあるが、周知の如く博士の學風は極めて平易明快なものであり、寛厚博大、各種の學說を包容し、而も獨自の透徹した見解を展開せられるのである。蓼然として一絲亂れざる溫雅な學風は眞に集大成者たるにふさはしいものである。それ故本書は專門家達にとつて無限の寶庫たるに止らず一般讀者にとつても容易に理解せられ、日本文學理念を把握するに好箇の解明書となつてゐるのである。

本書は評題の如く評論史であり、文學史ではない。本書の闡明せんとしたところは、文學理念の發展であり、延いては日本精神史の一面の展開である。第一第二兩卷によつて古代より最近世卽ち明治に至るまでの史的展開は說き了つてゐるのである。總論篇はそれらで說いてゐるところと多少重複の感もないではないが、それだけに、却つて獨立した意義も持たせられる。日本文學史に一應の觀念を有する者にはこれだけでも十分に理解せられ、幾多の示唆を得ることか出來るからである。

思ふに製本技術上の考慮もあつたのであらうが、第三卷は單に總論篇のみにすべきであつた。歌論篇は今後の計畫にある小說篇戲曲篇などと共に特殊篇として刊行すべきであつたやうに思ふ。こゝでは歌論が特殊の重大な意義をもつといふ意味は全然ないのである。

（一卷、一卷　昭和一一、一〇、二九　菊判　一四八八頁
三卷　昭和一三、四、三　菊判　六四九頁　各六・〇〇
牛込區拂方町二七　至文堂）

岡山巖著

短歌鑑賞論

さきに「現代歌人論」「現代短歌論」等の力作を公にし、短歌革新論の大刀をふりかざして今や歌壇のみでなく文壇注視の的となつてゐる著者の三部作といはれる鑑賞論である。元來氏は鑑賞家、批評家として現歌壇に重きをなす人であつて、短歌鑑賞論はいはゞ最も氏の本領を發揮した舞臺なのである。もつとも短歌鑑賞論といかめしい標題になつてはゐるが、鑑賞、批評に關する論說は本書の前三分一位を占めるに止まり、最も多く頁を費してゐるところは、第三篇及び第四篇の現代歌人小論の部分である。こゝでは齋藤茂吉氏ほか十數氏の歌風の素描を試みてゐるのである。「現代歌人論」は數氏を捉へて本格的に堂々の論評を試みたものであつて、初學のもの、一般の人にとつては稍々取りつきにくい感もあるとおもはれたが、これはほんの素描で、淡々とその片影を示したものであるから、親しみ易く、面白くも讀めるだらうとおもふ。こゝと第六篇の「歌壇鑑賞」のところを讀めば、現歌壇なるものが大體どのやうなものであるか、一般の人にも大凡そわかるであらう。第五篇は現在歌壇に一大衝動を與へてゐる戰爭短歌の問題である。これはおそらく誰しもの注意をひく興味あることではあるが、こゝでは戰爭短歌の鑑賞を主としたもので、問題を十分に論說したものではない。あつさりと時々の感想を語つた程度のものである。

總じて本書に收められたものは皆小篇で、著者の持前である嚴めしく、構へこんだ風はあまりなく、どつちかといへば碎けた、あつさりとした書きぶりになつてゐるから、一般の人々には適當した讀物となつてゐるやうであり、そしてまた氏の歌論の特色も十分に窺へるやうにも思ふのである。その意味で、さきに出た二論著のかはりに、本書をとりあげて奬めてみることにした。

（昭和一三、一二、二五　京都市河原町二條下ル　人文書院
四六判　三三三頁　二・〇〇）

大日本歌人協會編

支那事變歌集　戰地篇

大日本歌人協會の編纂にかゝる事變歌集で、續いて刊行せられる「銃後篇」と併せて上下兩卷をなすものである。尙本集に收められたものは昭和十三年十月迄に發表されたものに限るから、今後機會を見て續集の刊行を豫言してゐるとい

ふ。本書編纂に當つて集るところの歌數三萬首以上、その中收められたるものは二千七百四首、作者五百名に上つてゐる。本書の編纂愼重を期したものといつていゝであらう。編輯は作者別、氏名五十音順とし、卷末に作者略歴を附すること、體裁全く「新萬葉集」と同樣である。もつて後世に傳へんとする用意も思ふべきである。

未曾有の聖戰に際會して、夥しい所謂事變歌なるものが發生し、それがたゞに歌壇に旋風を捲き起したのみでなく、日常の新聞や雜誌に現はれて、一般世人の眼にもふれたのであつた。また某新聞は特に事變歌の募集を行つて、二人の選者が交互に選を擔當し、その成果が別に事變歌として出版せられてゐることも、周く世人の知るところである。ほかにも一二の集が世に出てゐる。本集がそれらに比して一段と整備せられ、精選せられてゐることは明らかである。蓋し大日本歌人協會の有意義な事業として推奬せらるべきであらう。

事變歌はいろ／＼な意義を包藏するであらう。最も庶民的な文學としての短歌は、事變に際會して現はれた國民各階層の聲を最もよく反映してゐるであらう。所謂戰爭文學として見ることの出來るものであるかどうかは別としても一般國民の體驗の聲として、その記錄として、他に比類のない意義を持つであらう。この點後世に傳へるものとして、他の戰爭記錄、戰地報告の類と並び、或はそれ以上にも意義を有するであらう。また短歌文學の領域にいかなる意義を有し、いかなる成果を持ち來すものか、それは尙今後の問題であらう。

（昭和一三、一二、一一　芝區新橋七ノ一二　改造社
菊判　四一八頁　二・八〇）

潁原退藏著
俳諧文學

書名が「俳諧文學」となつてゐるので、まづ著者は本書の序言の中で、「俳諧文學」といふ用語に就いて定義を下してゐる。それによると「俳諧文學」と云ふのは、俳諧に關係した文藝作品の總稱であつて、その文藝的特性として「俳諧性」を根柢としてゐる。そして「俳諧性」とは、和歌や連歌がもつてゐるその貴族性に對立する庶民性又は通俗性、自由性の文藝美を指すのであると述べてゐる。この定義によつて單に俳諧性を基調とした文藝と云へば、相當、廣い範圍に亙ることになる譯であるが、本書では特にかゝる文藝の中で、俳句に中心を置いて、その歴史的事實の展開に基いて、俳句の持つてゐる俳諧性を闡明しようとしてゐる。そして著者は俳句の發生からその展開してゆく各期を通じ、俳句のもつ俳諧性の全貌を明確に示した。一〇六頁の僅かな紙數の中で、かゝる大きな問題を要約してみせたのは恐らく類書に見られないところであると云つても過言ではなからう。著者に對して深い敬意を表せざるを得ない。

內容は俳諧と連歌、俳諧の通俗性、蕉門の俳諧、天明の俳諧、月並調の五章からなつてゐる各章いづれも太平の滋味であつて、よく味つて讀むべきであるが、就中、前三章に於ては、俳言から俳味へ進んだことによつて、初めて俳諧の文藝性が確立されたことが述べられてゐるのは注目すべきである。即ち連歌から出發した俳諧は、初めは俳言の使用を眼目としたもので、それによつて連歌になかつた通俗性を確立し同時に文藝的獨立性を定めることが出來たのであつた。そしてこの先驅者として山崎宗鑑、荒木田守武、松永貞德の三人があげられてゐる。しかも何が故にこの三人が和歌連歌を離れて俳諧に進んだのであるか、これに對する三人三樣の心理をその時代、身分、教養から明確に指し示したのはまことに巧妙である。次に西山宗因を總帥とする談林派の登場が述べられてゐるが、これも前三者の時代と異り、この當時には貴族文化に對立した庶民文化が、德川幕府の封建制度の確立と共に興隆して來て一大勢力となつた。從つて俳諧も又その通俗性と自由性とを徹底せしめる機運に逢着し、談林派はこの潮流に乘つて主權を獲得して、貞門を壓倒した。談林派は俳諧史上に大なる一時期を劃したものである。しかし談林もなほその眼目は俳言のおかしみに留つたものであつた。之に對して上島鬼貫がまことの說を唱へ、芭蕉が風雅を說き、こゝに俳諧は俳言から轉じて俳味へ進み俳諧の文藝的價格は大成されたのであると論じてある。

正風の解釋は類書と變るところはないが、その歿後における十哲の顚落の姿が簡潔に描寫されてゐて、讀者に容易に理解されるのはよい。

天明時代に於ける芭蕉への復歸運動も、時代背景を基調としてゐる。卽ち芭蕉への復歸は、四分五裂した俳壇を今一度昔の正しい姿に再歸させたいといふのが、輿論であつたが、しかし時代は旣に芭蕉生存時代とは異り、封建制度の完成は素朴なる正風に滿足するとは限らなかつた。こゝに大祇蕪村等の如き教養を基調とし、古典に材をとるやうな句が主流を形づくつた譯であることを述べられてゐる。

以上本書の主要點を擧げたが、わが俳諧文學の正しい知識を要求する讀者に本書を最も優れたるものとして勸めたい。

（昭和一三、七、二〇　日本橋區三ノ一　河出書房
四六判　二〇六頁　一・二〇）

山口誓子著

俳句鑑賞の爲に

著者は新興俳句界の驍將として令名高き人である。本書は「自句自解」と「他句自解」の二編に分れてゐる。前編は著者の自作句、大正十三年より昭和九年に至る五十一句に就て鑑賞を與へ、「一面、私の作品の成り立ち、私の作品の繰り方と作り方を暗示してゐる」のである。總じて本書は「謂はゞ俳句の考へ方と解き方である」と同時に作り方をも暗示するものである。後編は「ラヂオ俳壇選評」と「サンデー俳壇選評」とである。前者は一般俳句試作者の指導であり、後者は俳壇新人の作品批評である。

右の中最も自由であり、光彩あるものはやはり「自句自解」である。自作自解といふものは實は最も困難なのであるが、この作者は「こればかりは誰が何と云つたつて、頭は下げない」といつてゐるほど自信に滿ちてゐる。著者の作品には次の如きものがある。

除夜たのしわが踊手は齒をかくさず
かりかりと蟷螂蜂の顏を食む
煖房や外人肉を貪れる

著者の文體は輕快で、纖細で、瀟洒としてゐるいかにも新興俳句の俊敏な作者を思はせるものである。本書を通讀すれば著者の俳句觀、句作態度を具體的に理解することが出來、俳句の鑑賞實作に示唆するところが多いであらう。また一般の讀者にとつても、新興俳句の動向を看取するに便利なものである。

（昭和一三、五、一二　神田區神保町一ノ一　三省堂
四六判　一八八頁　一・〇〇）

井伏鱒二著

さざなみ軍記

井伏鱒二氏はわが文壇の中堅作家であり、その特異な風格を以て知られてゐる。氏の作品はよくユーモア文學とされてゐる併しこの名稱は必ずしも當らないものであつて、氏の持味は決して所謂ユーモアではない氏が好んで描くのは人の世の風俗習慣の埒外に住んでゐる人達である。かうした人達が自らにして滲みださせる雰圍氣には讀者をして心の底から微笑せしめるものがある。しかしこの微笑は單なるユーモアではない。これは塵勞の巷に齊命する我々をして魂の故郷を感ぜせしめるものである。氏の作品には必ず清水の如き清冽なものが流れてゐる、それは云ひ得べくんばリリシズムであり、ペーソスである。そしてこれが優れた氏の風格を形作る所以なのである。「朽助のゐる谷間」によつて文壇に地歩を確立して以來、數多くの作品が發表されたが「ジョン萬次郎漂流記」により直木賞を受けた。

この「さざなみ軍記」は平家の都落ちに取材した作品である。その第一部を發表して以來、擱筆まで約十三年の歲月をかけてゐる由である。これは平家物語を現代文に飜譯したものではない。又その飜案でもない。純然たる創作である。全體が新中納言知盛の一子武藏守知章なる十六歲の少年の筆にかゝる陣中日記の形式をとつてゐる。この公達は家子郎黨に守護せられ一軍を率ゐて海上を西に逃れてゆくが、その途次における數度の小合戰や或は偵察戰の有樣が活寫されてゐる。殊に見るべきは作中人物の性格描寫であつて知章を初め作者の風格を如實に傳へるものゝある僧兵崩れの覺丹なる家來の面目等が見事に描きわけられてゐる。

（昭和一三、四、二一　日本橋區通三ノ一　河出書房
四六判　二二八頁　一・三〇）

山本有三著

戰爭と二人の婦人

本の表題が示すやうに、この本には二人のアメリカ婦人「はにかみやのクララ」と「ストウ夫人」の、二篇の小說が收められてゐる。小說と云つても、實在した人物を取扱つたものであるから、傳記小說といふべきものかもしれない。併し普通の傳記と違つてゐるのは、やかましい出典や何かをあげず、この二婦人の異色ある日常生活に沿ふて、生涯の主なる出來事が、簡潔に、要領よく記されてゐる點である。この二婦人はいづれもアメリカの南北戰爭に關係の深い婦人である。

クララ・バートンは、生來はにかみやの物におちやすい性質であるが、人の爲めに働く時には思ひもかけぬ强さを現はすといふ事實を、小學校の先生、特許局の官吏、從軍看護婦と次々に起るその畢生の事業を敢行してゆく經緯によつて示し、遂にアメリカ赤十字社を創設し、その初代の總裁になつた女丈夫の性格を書きあらはしたもの。

ストウ夫人の方は、南北戰爭をまき起したといはれる有名な小說「アンクル・トムス・キヤビン」の著者として、その

日常の生活を通じて「臺所から立ちあがつた作家」をみ、ドレイ解放のために生命のつゞくかぎり書かうとした決意の根據をつきとめたものである。

言文一致體の平易簡明な文章で、讀み易く、讀みゆくに從つて、しづかに感激を催すものである。卷末には「この本を出版するに當つて」といふ著者の國語に對する意見が可成り長文で附加されてゐる。それはルビの全廢といふことが要點であるが、そのために、漢字が制限され易しい言葉に置き換へられたり、片假名で書かれてゐるが、全體として少しの不自然もない許りか、簡明で、字ヅラがきれいで明るく、讀者の眼に快感を與へる。國語問題の喧しい今日、作家が自己の創作に實踐してみせた一試案として、成功したものである。

本書は感激深い物語の性質から云つても、その文章の美しさから云つても、近來の秀逸であると思ふ。小學校の上級生から中等程度の學生、一般の家庭の讀物として上乘のものである。

（昭和一三、四、三〇　神田區一ッ橋二ノ三　岩波書店　四六判　二一四頁　〇・九〇）

火野葦平著

麥と兵隊
土と兵隊

昭和十三年中の事變報告の全分野を通じて、火野葦平氏の「麥と兵隊」「土と兵隊」ほど國民の心に慰へたものは無いと云つてもよい。其の價値の一つは、著者自身が今度の戰爭に參加してゐる軍人であり、砲煙彈雨の危急の間生死の境に鬪ひつゝ書かれたと云ふ事實にあると思ふ。而もその境地が文學的眼光によつて極めて冷性に緻密に把握されてゐる其の筆致の美しさにあるのである。何故なら事實の記錄といふことだけがあの感動を與へるものならば、他の戰場記錄、例へば幾つかのルポタージュ、新聞記事も同樣な、或ひは、それに近い感動を與へるべき筈である。だがそれがないとすればそれは、無論著者火野葦平伍長の作家的眼光の修練によるものに相違ない。其の戰歷によつて鍛へられた精神が戰爭の凄慘と悲哀に理性を失はず、常に自己の部下を護る責任感と暖かい情感とを以て文學本然の魅力を發揮し得たのである。

著者火野葦平氏は北九州の文藝同人雜誌「文學會議」から「糞尿譚」の一作によつて芥川賞を獲得した新人である。作家としての鋭利な觀察眼と質實な描寫力は、この二作に於て戰場の生活記錄として、日本文學の最大の傳統を生かしてゐる。卽ち大體日記の形式で見たままを刻明に記述してゐるのである。本書の內容は、「土と兵隊」では杭州灣敵前上陸に就て、「麥と兵隊」では徐州殲滅戰に就て最高潮に達し、かの果しない曠野を背景とした巧妙な描寫が、よく地形的實感を與へ、祖國のために死ぬる覺悟をきめた日本兵の心理と奮戰する實相を再現してゐる。

此の兩書を讀む者は、殆んど實際に戰爭そのものを通過してゐるごとき感を受け、日本の兵隊の現地に於ける模樣を手にとるやうに知ることが出來る。兵隊の日記だと思つて讀んでゐる間に、何時の間にか釣り込まれる面白さ以外にその中に織り込まれた日本兵の覺悟を語る感想は悲痛壯烈といはんより莊嚴崇高なものとして襟を正さしめ、敵地に於けるエピソードの種々相は不圖破顏一笑させるかと思へば、思はず眼頭を熱くさせる程のものである。實に飾らざる戰ひの記述であつて、作者自身「もとより小說ではありません」と斷つてゐるにせよ、それはごく狹義に解した小說文學といふなら別であるが、讀者に與へる感動の質に於て驚くべき戰爭文學であることを否定出來るものは一人もあるまい。更にそれは戰爭が單に戰爭として終るべきでなく、それに續いて來るべき意志をさへ暗示してゐる點に注目すべきである。今次事變の持つ戰爭報告文學の中で、最も優れたものの一つとして、汎く江湖に推薦するものである。

麥と兵隊　昭和一三、九、一九　四六判　二三六頁　一・〇〇
土と兵隊　昭和一三、一二、一一　四六判　一八四頁　〇・六〇
芝區新橋七ノ一二　改造社）

スヴェン・ヘディン著
小野　忍　譯

馬仲英の逃亡

著者スヴェン・ヘディンは瑞典出身の地理學者であるが、二十五歲にして初めて中央亞細亞の探檢に從事して以來四十餘年、中央亞細亞探檢史上不朽の功績を殘してゐる。就中、タリム河の調査、ロプ・ノール問題の解決、西藏高原の研究、東トルキスタンの地理學上の諸問題の闡明等は最も有名なものである。然るに彼は既に齡七十を越えたる一九三二年二月南京政府の委囑により、三度、新疆省に於ける水利と道路の調査に從事するため、一隊の探檢隊を率いて哈密（新疆省東の關門）に到著したが、これより庫爾勒に向つて西進中、折柄勃發せる新疆省の內亂卽ち省政府の督辨盛世才と東干軍の

首領馬仲英の間に行はれたる主權爭奪戰の渦中に捲き込まれ幾度か死地に陷りながら辛くも免れることを得た。本書はその間の詳細を極めたる記錄であるが、著者の優れたる文學的才能によつて單なる記錄として終らず、スリルに富んだる好個の報告文學である。

哈密を出發した一行が天山南路の惡路に苦しめられつゝ西進して庫爾勒に至る間の地理的描寫はタクラ・マカン沙漠の風貌と天山山脈の峻嶮と點在する宿驛の風俗習慣を傳へて餘りあるものがある。更に庫爾勒に於て一行は達坂城にて盛世才軍のために擊破されて西走する馬仲英軍に捕へられ、トラツク二臺を徵發され、更に追擊して來た盛世才軍に抑留されるのであるが、この間に於ける危險と焦躁とに充ちた數日間の記錄は、內亂の傍杖を喰つた彼一個の體驗記にあらずして實に新疆省に於ける政情を遺憾なく描寫し盡したものである本書の大なる功績は邊境事情として新聞雜誌に報道されたる新疆省の政情を具象的に記錄したところにある。

本書に描寫されてゐる內亂は單なる地方軍閥の政權爭ひではないのであつて、新疆省政府なるものは實は全くソ聯の傀儡であり、從つて盛世才軍はソ聯の手によつて裝備されたる優秀なる近代軍隊であり、飛行機を有して居り、就中その麾下の部將には往年の露國々軍の將校であつた白系露人が多數

任ぜられてゐるのは最も注目すべき點である。これに對峙する馬仲英は甘肅省出身の廿八歲の將軍であつて、その慓悍を以て知られてゐる。彼は省政府の暴政に反抗する纏回（土耳古族）の招聘により、部下の東干軍を率いて新疆省へ侵入し、こゝに省政府の督辨たる盛世才と雌雄を決するに至るのである。因みに東干とは甘肅省に居住する回教徒であり、言語風俗は全く支那人と同じであるが本來は土耳古族であり、纏回と同一系統に屬するものである。從て盛と馬との政權爭奪は實はソ聯勢力と新疆省の六割を占めると云はれる回教徒との衝突である然して近代的裝備を有せざる馬仲英軍は一敗地に塗れてカシュガールに逃れ、これより馬は國境を越えてソ聯領トルキスタンに遁入し生死不明となるが、東干軍は彼の異母弟馬虎三に率ひられてヤルカンド方面の山地に據り再擧の機會を待つことゝなる。ヘデイン自身は直接、馬と會見せざりしも、徵發されたトラツクの運轉手二人の口を通じて彼の風貌を活寫してゐる。壯年の美丈夫馬の人間味は讀者をして薄命なりし小英雄に一脈の同情を感ぜさせる。天山南路の地理的紹介と新疆省の政情を傳へた好個の報告文學として本書をお勸めしたい。

（昭和一三、一〇、二〇　芝區新橋七ノ二一　改造社
四六判　三八三頁　一・三〇）

鏑木清方著

蘆の芽

さきに「銀砂子」を紹介したことがあるが、こゝに再び清方氏の隨筆集「蘆の芽」を得た。去秋第一回文展の數多くの作品のなかに清方描く「鰯」を見た人は、その淡彩をもつて描かれた江東あたりのまづしい巷のしみじみとひとの心に滲みいるもののあるのに、立去りかねたであらう。明治に好んで取材する氏が、いまその畫材を求めるとすれば、そのかみの匂ひのそこはかとなく流れる江東の地に、更に又足を東へと向けてゆくのは極めて自然の成り行きと思はれる。

卷頭に收められた「蘆の芽」の一篇は江戸川區篠崎の河原に蘆の芽をみるの記である。しかしもとより「堤の櫻八分のながめ、江戸川の水ぬるみ、武藏、下總の流れゆきかふ岸邊の洲のひたひた水のよせるなかに、たけ六七寸、生きもののやうに、すくすくと簇つて萠え出でた、夥しい角形の芽」の美しさを繪心から求めたのみではあるまい。蒼惶として渦まく都心の濁つた、どよめきの外にのがれでて、一刻の靜寂を茫々たる江戸川の蘆原の中に訪ねて、ほつと一息をつくためであつたらう。同じく常に明治を語り、明治の面影の滅び去るのをなげきつゝある永井荷風が、頃來しきりに江東に足をはこぶことを書いてゐるが、同じく荒川放水路のやがて海に入らんとするところ、たゞひたすらにひろがる蘆原のしかもやがて暮れゆくうす闇の中に佇んで、そのよろこびを述べた一文を物してゐる、兩巨匠の心懷おのづからして相通ふものあり、もつてその風格を傳へるものがある。

この一篇のほか、繪に關するもの、芝居に關するもの、さては美人說、日本髮などいづれも清方氏を直ちに聯想させる諸篇が多く收められてゐる。なかに「藝術院初會」なる一篇は、昨年七月安井文相主催の晩餐會に打集つたわが國一流の藝術家の中に、梅若萬三郎、實生新の二氏が折目正しい袴、白足袋の美事な運び、鶏群のうちの二羽の鶴の足取と譬へたところは、さすが清方氏なるかなと思はせるものである。

（昭和一三、六、二〇　日本橋區二ノ四　日本橋ビル　相模書房
菊判　二一二頁　二・五〇）

曾宮一念著

いはの群

曾宮一念氏はわが洋畫壇の中堅であるが、特にその優れた

描法と取材との故に嘱目されてゐる人である。はじめ二科會に屬してゐて、その詩情を含んだ柔かい畫境は一部の人々に親しまれてゐたが、次第に筆に力と鋭さを加へて來て「けし」「無花果」「桐」「いは」等の優れた作品が續々と生みだされるに及んで押しも押されもせぬ一家の風格を具へるに至つた。その後、獨立美術協會に移つて現在に及んでゐる。氏は以前から病身で、そのため畫筆をとる時間さえ制限を受けてゐる由であるが最近健康すぐれず、作品の發表尠く、氏の愛好者を淋しがらせてゐる。その際に當つて、氏のすぐれた隨筆集「いはの群」の刊行をみ、文章を通じて氏の風格に接することの出來るのはまことに喜ばしいことである。從來も畫家の隨筆がよく上梓され、その中にはいづれもその畫境と一脈相通ずるところのものが含まれてゐて、なかなかすぐれたものが多いが、本書も又、氏の畫作をみる時に感ずると同じ喜びを傳へるものがある。

「いはの群」は内容から云ふと大體四つの部分に分かれてゐる。氏が好んで取材する花に關するもの、寫生旅行についてのもの、交友の印象を書いたもの、それに數篇の詩である。そのどれにも一貫して感傷的な美を却けて、もつと高い、素朴な、力の籠つた、本當の美を求めんとする氏の作畫についての信念、物の見方といふものが示されてゐる。わが洋畫壇の數多い、低調な作品の中に、氏のものが光つてゐる譯がこのどの篇からも汲みとることが出來る。そしてそれが氏の藝術家としての良さを裏書きしてゐるのである。

（昭和一三、三、一五　日本橋區江戸橋二ノ八　座右寶刊行會　四六判　三三〇頁　三・〇〇）

大澤章著　丘の書

この本の著者が八年間も住み馴れたと云ふ福岡の飯倉原の丘と云ふのを筆者は少しも知らない。然も尙本書に依つて、南に筑肥國境の山脈を控え、北下りに海に臨んだ樹木と池に惠まれた、そして春ともなれば菜種の黄に彩られ、秋さり來れば地に墮つる落葉の音さへも聞ゆると云ふ閑寂で、丁度少年雜誌の挿繪に見る樣な清楚な丘を想ひ見ることが出來る。それ程著者の叙景は純眞である。そしてこの美しい丘でモオリス・バレスを反芻し、人生を深く省察される著者を心から羨むの外はない。これが卷頭の一文「丘の手記」から受けた印象である。其の他本書にはすべて十四篇の感想やら旅の印象を記した隨筆やらが收めてあるが、著者の高い教養と、

基督教に對する眞孜な信仰態度とが全篇に溢れてゐる。就中「修道院の現代的意義」と云ふ一文は全篇中での最長篇で、「古い修道院制度、特に其の精神が今日の複雜な社會とその文化とに對して有する意義が何であるか」と云ふことを考察の對象としたものであるが、之などは明かに近代の利己的な個人主義的な實利萬能の諸傾向に對する嚴重な抗議と見ることが出來現代文明に對する根本的な救濟の道を示唆するものであると云ふことが出來る。

又アッシジの聖フランチエスコの信仰を描いた「一つの生涯」「アルヴェルナの山の告別」に示された著者の信仰態度は、動もすれば陷り勝ちのインテリゲンツイアの韜晦癖を征服して、敢然とした處が見受けられる。その他「ハンテイントン圖書館」「或る人の仕事」の二つの短章はアメリカの二人の富豪ハンテイントン氏とヘボン氏の文化事業に對する功績を稱へたもので文化と平和を愛好する著者の姿を最もよく感ずることが出來る。

著者は九州帝國大學で國際法を擔當せらるゝ著名な法律學者であるが本書に於ては唯基督教に深い信仰を有たるゝ教養の高い一紳士の隨筆集と云ふことだけで專門の法律に關するにほひはどの一頁からも感ずることが出來ない。近頃稀に見る眞面目で高い教養をもつた隨筆集として一般に薦め度い。

（昭和一三、七、五　神田區一ッ橋二ノ三　岩波書店　四六判　三四五頁　二・二〇）

内田百間著　丘の橋

本協會から曩に内田百間氏の「百鬼園隨筆」を推薦したことがあるが、これは同じ著者の新しい隨筆集である。「朝の雨」以下二十八篇、すべて著者の最近作を收めてある。

曩にも述べたごとく著者の筆綴は正確、丹念を極めてゐて而も洒脫の雰圍氣は隨所に漂然として漲つてゐることは、本書でも變つて居らず、相變らず面白い。集中「蒙禿少尉の出征」「軍歌の悲哀」「留學生」等は今度の事變にも幾分關係のある隨筆である。「鬼苑道話」「養生訓」「飛行機と箏」「彈琴錄」「百鬼園箏談義」等は著者獨特の教育談や著者の得意とする箏琴の演奏談で、巧妙な話術と底力の籠つたものである。

この隨筆集は「丘の橋」と題する如く、著者が合羽坂界隈に住居した折に書いたものが多く合羽坂と四谷の丘との間に陸橋が出來ることから諷して、常識と非常識とを繋ぐ橋のやうなものであるとみることが出來る。主に諷刺といはんより著者自らの凜然たる風格の自らに形をなした呈の文章で、巧

まずして飄逸の人生を垣間見せるものである。最後の「東京日記」は二十三節の多きに亙つて、それ〳〵趣向の異つた淒味をみせた怪談である。また附錄には著者の精選せられた俳句がのつてゐる。

今日の文學界に特異の存在として遇せられる著者の境涯を展望せしめる優れた隨筆集として興味豐かなものである。

（昭和一三、六、一　牛込區矢來町七一　新潮社
四六判　三六三頁　一・七〇）

正宗白鳥　著
思ひ出すまゝに

白鳥氏のやうな特異な眼光を有する人の見るヨーロッパ、といふことは文壇の內外に於てひそかに期待するところであつたであらう。正宗氏夫妻は一昨年か、また再び飄然と西歐の旅に出られた。本書にある「魯領通過」「思ひ出すまゝに」「鄕愁」「亞米利加素描」などはみなその旅の隨想隨筆である。本書の主要なものもそれらであり、本書の最大興味ある部分もまたそれらである。それら諸篇はそれ〳〵雜誌に發表せられる毎に愛讀され、賞讃せられたところのものである。

今また一本に集められたものを再讀してみれば、更にいひがたい味をおぼえ落寞たる人生の風景が消しがたく心に殘るといつたところである。なかでも「鄕愁」副題「伯林の宿」最もよい。おそらくは氏の小說作品の最高傑作にも比肩し得るものではあるまいか。人によつては、氏の小說作品より遙かに自由であり、滋味があると評するかも知れない。氏の文學に現はれてゐる心境をなんといつたらいゝであらうか。上司小劍氏は本書を紹介して芭蕉の心境に通ずると評されてゐたが芭蕉の心境ともちがふと思ふ。風雅のゆとりなどはない。さりとてつきつめた悽慘の光があるといふわけでもない。たゞ凝然と見据え一種奇怪な光を放つてゐるのである。蕭條落寞たる人生の姿とでも評するほかないものであらう。人生が退屈の姿であるといつても氏は退屈がつてゐるわけではない。時に咏嘆めいた言葉を吐いても氏には咏嘆はないのである。結局やはり一種の觀照といふものであらう。一脈日本傳統の「ものゝあはれ」に通ずるところがあるのであらう。思はず聊か書評をはなれてしまつたが、本書にはほかに北海道・樺太に遊ぶ「北遊記」と「北京印象記」との二篇の紀行、「無用人」「獨斷語」「龍之介・武郎・抱月」「大磯の家」「英雄論」の諸篇があるが、なかでも「英雄論」最も興味深い、ナポレオンを論じた日本文中第一等に位するものではないかもおもはれる。

（昭和一三、三、二〇　京都市河原町二條下ル　人文書院
四六判　二五七頁　二・〇〇）

三好達治　著
夜沈々

本書は昭和十年頃から最近に至るまでの、著者の散文の仕事を輯めたものである。大別すれば三つの部分から成り立つてゐる。

第一には詩人としての著者が生活の環境に偶目した「小動物」とか「山」とかいふものに對して、一種の心境を吐露した隨筆であり、第二には現代詩や短歌や俳句に寄する意見を盛つて、著者獨自の詩論を述べたものであり、そして第三は改造特派員として昭和十二年の暮に上海に赴いた折の現地報告である。

最初の部分にある「小動物」以下十四篇の隨筆のうちに、蛇や河鹿や鼠や蜂や蟬や鶯や鴉や燕や鶯や鵜鴒などいふ吾々の日常生活のまはりに飛んだりうろついたりしてゐる、これらの蟲獸、小禽の類が親しみ深く捉へられてゐて、著者の詩的感覺が如何にもデリカに美しく現はれてゐる。著者が佛蘭西文學になじんでゐるせいであらうか、ファブルの「昆蟲記」やルナアルの「博物記」にみると同じやうな、暖かな親切な眼がそれらの小動物に注がれてゐる。ほんの思ひ附きのやうなところが多いが、かういふ感受性は稀有に屬するので少年達のために著者はもつと本腰を据ゑてかういふ仕事をやつて貰らへたら有益であらうと思ふ。

第二の「現代詩の難點」以下十一篇の評論は著者の抱懷する詩歌に對する意見を一まとめにしたもので、これ亦隨所にその卓拔なる詩眼を窺ふことが出來、日本の詩歌の將來に寄與するところ少なくないと思はれる。

第三の「上海雜記」は流石に詩人のルポルタージュだけあつて見たまゝの報告ではあるが、落着いた筆致で、文章も簡潔で美しく、報告文學として、拔群の出來榮である。勿論その底には愛國の情熱が動いてゐるが、また一面支那難民への哀憐の情も含まれてゐて泌々と讀むことの出來る名文である。

（昭和一三、八、三　神田區小川町三ノ八　白水社
四六判　三九六頁　一・五〇）

吉田絃二郎　著

わが旅の記

吉田絃二郎氏が三十年來の旅の記錄をこの一卷に收めたものである。氏の十數冊に上るであらうところの隨筆集にも數々その旅の記錄は含まれてゐるが、ここに一冊の下に編輯される時「野さらしを心に風のしむ身かな」といふ芭蕉翁の心がまへはまたすべての旅人のそれでなければならぬと云ふ氏の旅に對する心情をも味ふことが出來るであらう。

虔しい「島の秋」によつてわが文壇にその名を知られて以來、氏の文學に於ける精進は既に長く、數多くの作品が次々に發表されてゐる。氏の人間愛と人生の寂寥を凝視せんとする作品に愛着を感ずる讀者は數多く。出版書肆は氏の著書の刊行を爭ふ有樣である。しかし一方その作品は士人の雅懷に入らざるものとの批評もある。そしてこの批評は又必ずしも當らざるものではない。氏の作品は限りなき人間愛に出發し人生の寂寥を究むるものであると云はれるが氏の作品を一貫してゐるものは、實はさうした心情から發する色濃い感傷である。感傷は所詮感傷であり、嚴肅なる人生の眞實を描き得るには力乏しく、むしろ故意にこれを逃避するものであるのは已むを得ない。氏の作品に大いなる缺けたるもののあるのはこの爲である。芥川龍之介の基督を扱へる「西方の人」を一讀する者は心ゆ次の一節に心うたれるであらう。

天に近い山の上には氷のやうに澄んだ日の光の中に岩むらの聳えてゐるだけである。しかし深い谷の底には石楠や無果花も匂つてゐたであらう。そこには又家家の煙もかすかに立ち昇つてゐたかも知れない。クリストも恐らくはかう云ふ下界の人生に懷しさを感じずにはゐなかつたであらう。しかし彼の道は嫌でも應でも人氣のない天に向つてゐる。

文學の正しい道も又この天に向つてゐる筈である。そして數多くの作家は谷の底の人の世の中にゐる。吉田絃二郎氏の作品も亦、その表皮にも拘らず實は最も凡俗なる吾々市民のものである。氏の感傷は吾々市民の心に必ず通ふところのものである。氏の著書が出版會社の弗箱たる所以のものも實にここにある。そして萬人愛好の文學を營むで之を米鹽の資とするも又その人に課せられたる人生の一つの勞作ではないか或は奥の細道を行き、或は中部山脈の山嶺に雨にうたれ、南國霧島の山の湯に佗しむこの一卷の紀行集も又座右にをくに大いなる意義なしとしない。

（昭和一三、八、五　麹町區三番町一　第一書房
四六判　四五一頁　一・三〇）

第八　兒童圖書

鈴木三重吉　著

古事記物語

本書は日本の古典たる「古事記」の物語を子供に解り易く書き改めたものである。著者が畢生の事業として童話雜誌「赤い鳥」を編輯してゐた時分、著者自身筆を執つて同誌に連載したもので、當時世評高かりし名作である。上卷下卷を併せて玆に本書一冊にまとめ、その內容は悉く原著に忠實によつたもの、いはゞ今日の少年少女に讀ませるために古事記を口語譯したものと云つても差支へない。

從來外國の神話の如きは、所謂童話物語として多く紹介されてゐるのに、日本固有の神話を巧みに叙述し、以て少年少女にこの國の由來、國柄を理解せしめるものは割合に少いのではないかと思ふ。本書はその缺を補ふばかりでなく、藝術的に洗練された筆を以て日本の古典を平明に再現し、光輝ある皇祖の御事蹟、我が建國の歷史を美しく述べてゐる。從つて單に神話傳說としてばかりでなく、日本人として讀後一種の宗教的感銘を深からしめるものである。

以上の意味に於て本書は我が建國の神話を敎へるものとして、少年少女に與へるに寔に適當したものであらう。文章もさすがに一流の文學者の手に成つたゞけあつて、やさしく美しく而も興味深く書かれてゐるから小年少女が讀んで感銘を覺えること疑ひない。著者自身序に於て本書を書いた趣旨を丁寧に述べ、本書中に出てくる主なる地名・人物・事項について索引を附して讀者の便にしてあるこれだけに纏つたものが出來ることも稀有であり、類書中群を抜いてゐる良書である。

（昭和一二、一二、二〇　麹町區丸ノ內丸ビル　中央公論社
新菊判　二七四頁　二・五〇）

長沼依山　著

忠烈美譚　輝く肉彈

この本は子供のために書かれた支那事變の忠烈美譚である。一部分には例の南京空爆の華梅林大尉や、敵前上陸で名高い倉永部隊長や加納部隊長等既に新聞で度々報ぜられた美譚もあるが、大部分は新聞にも餘り現はれない、然も壯烈極

まりない武勇譚や思はず涙を催す樣な悲壯な物語りが五十數話收められてある。資料は相當精査されたらしく、すべて固有の姓名、實際の兵種階級名が用ひられてある。唯この種のものは題材が一樣であるから、餘程すぐれた文章を以てしないと動もするとマンネリズムに墮する傾向がある。本書も若干この難なきにしもあらずである。然しこれだけの美譚を一冊の本に收めて少年少女に提供し、今事變に於ける皇軍奮鬪の樣を認識せしめることは大いに意義のあることである。日清、日露兩役にも、今事變に劣らない忠烈美談が多かつたらうと信ずるのであるが、その切實さが今事變程でないのは、要するに我々がその時代に住んで居なかつた爲である。その意味で本書の如きを少年少女に與ふれば彼等は古戰記を讀むよりは遙に切實な氣持ちを以て讀むであらうと思はれる。

（昭和一三、八、一〇　三版　神田區神保町一ノ三五　興文閣　四六判　五四九頁　附錄　八〇頁　一・三〇）

原田三夫著

子供の天文學

子供に限らず、一般に初學者に科學知識を與ふるのに、斷片的ではあるが興味本位に與へて行くのと、學者の業績を中心に系統的に與ふるのと二つの途がある。各々理由のある方法ではあるが、子供の心に與へられた知識が、將來發芽して技や葉が生じ實の結ぶことを冀ふならば、學者の業績を中心にして系統的な知識を與へ、知識を探求する方法を敎ふべきであつて、若し興味を必要とするならば、當然叙述の方法なり學者の業績中に現はるゝ言行なりに依つて補ふ可きである。本書の記述は大體この方法に依つてゐる。

この本は題名の示す通り子供の爲に書かれた天文學で、程度は小學校なら上級生、大體中學二三年生位迄のものと思はれるが、この樣な科學知識には年齡の關係は少ない。故に初學者であれば大人が讀んでも得る所は多い本である。

同じ自然物でも天體程子供の好奇心に訴うることの大なるものはあるまい。鳥や草木や、或は山や川の自然の姿に接し得ない都會の子供でも、月や星には自由に接してゐる。その意味で天文學は非常にむつかしい學問でありながら然も子供には最も普遍性のある科學知識なのである。あの茫漠としてわけの分らぬ空間に浮いてゐる月や星が宇宙の大きな理法に從つて一定の運行をなして亂れることがないと云ふことを敎ふるだけでも、子供には大きな敎訓だと思ふ。

內容は天動說、地動說を最初にもつて來て、以下地球、太陽、月、日食月食、惑星、彗星、流星、恒星、星雲、星座の順で記述し、その後に綜合的に宇宙の話をもつて來て、最後に人類との關係と云ふ意味で曆とか天文觀測とか云ふことに言及してゐる。平易な記述で、挿畫寫眞は豐富で、又筆者は通俗科學では名のある人であるから讀んで面白く、少年少女には相當興味深く迎へられることと思ふ。

（昭和一三、五、二五　神田區錦町一ノ一九　誠光堂　四六判　三七三頁　二・〇〇）

久保田万太郎著

一に十二をかけるのと十二に一をかけるのと

これは少年少女のための劇集である。久保田万太郎・伊藤喜朔兩氏の協力によつて成る美しい結實である。

久保田氏の脚本は「北風のくれたテーブルかけ」「ふくろと子供」「ロビンのおちいさま」「春のおとづれ」「ミルクメイドの踊」「おもちやの裁判」「一に十二をかけるのと十二に一をかけるのと」「雨のふる日はわるいお天氣」「對話三つ」の九篇である。久保田氏は本書の「あとがき」に「少年少女のための脚本か、少年少女の演ずるための脚本か」の質問に對し、「兩方である、どつちに解釋して下すつてもいゝ」と斷つてゐる。どれをよんでも易く頭に入つて來て、舞臺にのぼせてみて面白からうと思はれるもの許りである。東京の下町物の名脚本家たる久保田氏は、これらの兒童劇に於ても臺詞まはし、言葉の受渡し等に特色鮮やかなものが出てゐるが、舞臺の仕組みや登場人物等はひどく西洋さくいのである。これも「あとがき」に「赤い鳥」の鈴木三重吉氏からたのまれて西洋の童話の本を漁つて、片つ端から讀んで行つたあと、たまたまその中から拾ひだした一つの筋をおよそ自分勝手に書き直したものであることを斷つてゐるから、久保田氏の持味である下町趣味とは異つた西洋趣味に則つてゐることに氣づくのである。これを舞臺に登せる場合の配慮は、伊藤喜朔氏に依つて程よく施されてゐる。それは各脚本の後に、舞臺に關する注意、大道具・小道具の作り方等を懇切に示したものである。伊藤氏は舞臺裝置家として當代第一人者で、この人によつて挿畫が畫かれ、裝置の形式・照明法の模樣其他が手に取つて敎へるやうに示されてゐるのは本書の强みである。

本書は以上の如く久保田・伊藤兩氏の協力を俟つて出來たものである故、裝幀・挿繪共に內容としつくり合つて、童話集として成功したものである。美しい原色版が三十頁もありその上本文の隅々まで二色・一色の挿繪が入り、活字も全部オフセットといふ頗る凝つた贅澤なもので、價の高いのも此

の爲であらう。このやうな豪華本であるから一般家庭に推めるには少々不都合であるかもしれないが、少年少女の童心の空想によつて舞臺を作り出し、劇をやる時の好伴侶となるものとして、學校・圖書館には備へつけてよい本である。

（昭和一二、一二、二〇　麹町區丸ノ内　丸ビル　中央公論社　新菊判　二六二頁　三・八〇）

川端康成著

級長の探偵

本書は小說家川端康成氏の少年少女小說集である。「級長の探偵」「開校記念日」「弟の秘密」「愛犬エリ」「夏の宿題」「駒鳥溫泉」「翼にのせて」「コスモスの友」「學校の花」の九篇の可憐な物語が收錄されてゐる。

著者獨特の感覺の世界は、少年少女を主題として極めてナイーブなものを展開し、小學上級から中等學校初年級の花のやうな可憐で感じ易いこの年頃の少年少女の心理を巧みに描出してゐるので、このやうな精巧な效果は何人にも容易に書けるといふわけにはゆかない。殊に花や禽獸に對する特殊なやさしい著者の愛着がおのづから滲み出てゐて、仔犬を扱つた二篇のほか、山雀・駒鳥・傳書鳩・鳩使ひの少女、コスモスの花といふ類に事件と動物の習性とをからみ合せて、器用に仕上げられてゐるのである。

少年少女の多感な感傷性に訴へるには非凡なもので、その間に教育的な意味も含まれてゐるものである。

少年少女の讀物の適當なものがないことを嘆ぜられてゐる今日、純文學者の手でこのやうに手のこんだ、着想優れた小說集が現はれたことは喜ぶべきで、我が兒童文學の上に一つの佳品を加へたといふべく、敢へて推薦する所以である。

（昭和一二、一二、二〇　麹町區丸内丸ビル五八八區　中央公論社　新菊判　三一〇頁　二・五〇）

昭和十四年三月二十七日印刷
昭和十四年三月三十一日發行
皇紀二千五百九十八年
定價　金二十五錢
編輯兼發行者　社團法人　日本圖書館協會
代表者　松本喜一
印刷所　財團法人　鐵道弘濟會印刷場
東京市麹町區櫻ヶ岡三丁目四番地文部省内
發行所　社團法人　日本圖書館協會
振替口座東京二四一八一番

第一書房
戰時體制版
東京市麹町區三番町一
振替東京二四六二三三

杉浦重剛謹撰　倫理御進講草案　四六判四三〇頁　價七十八錢
日本精神の眞髓を說いた天地と共に不窮の貴重書、萬人がひとしく以て生活思想の基本となすべき精神の糧である。

中里介山著　大菩薩峠　四六判各四五〇頁　價各七十八錢　第一冊　第二冊　第三冊
日本が世界に誇る眞の日本的大文學。正に國民的偉大を表徵する大金字塔。明治大正昭和の文學界に聳え立つ大山脈。

土田杏村著　人生論・宗教論・人間論　四六判四二六頁　價七十八錢
土田氏の代表的三部作で、人生を語り、宗教を論じ、人間の意義を正しく把握せんとする人達にとつて、唯一の指導書。

高神覺昇著　般若心經講義　四六判三三〇頁　價七十八錢
JOAKより放送して、一聽天下を風靡した將若心經の名講義。現代人の煩悶と焦慮は本書によつて完全に一掃される。

山田靈林著　禪學讀本　四六判三二五頁　價七十八錢
深遠なる禪の妙味を洗練された現代感覺をもつて表現した無二の禪學讀本。著者が一年有半の尊い心血の結晶

新居格譯　大地　四六判各四〇〇頁　價各七十八錢　第一部　第二部　第三部
パアル バック
バック夫人の傑作中の傑作。今や新東亞建設の進められつつあるとき、『大地』の意義は益々重大なものとなつた。

深澤正策譯　母の肖像　四六判三三六頁　價七十八錢
パアル バック
これはバック夫人の母を描いた眞實のみが語り得る眞珠の如き魂の記錄。あらゆる女性の終生の座右書である。

深澤正策譯　母　四六判三三八頁　價七十八錢
パアル バック　長篇
支那貧農の妻の一生を描き、暗黑と神秘に覆はれた農民生活の赤裸なる性本能の悲劇を描いた世界的農民文學。

深澤正策譯　風と共に去る　四六判各四五〇頁　價各七十八錢　第一卷　第二卷
ミッチェル
戰爭と戀愛のクライマックスを描いた世紀の大小說。而も、飜譯の努力と誠實を遺憾なく發揮した良心的名譯。

戸川秋骨譯　神國日本　四六判四二六頁　價七十八錢
小泉八雲
アメリカ海軍の當局は本書を以つて世界屈指の日本研究必讀書となし、海軍將校以上には必ず讀ませめたと云はれる。

堀口大學譯　ソヴエト紀行　四六判二七四頁　價五十八錢
アンドレ ジイド　修正
ソヴエトの社會的缺陷を指摘した痛烈な反駁書。世界の喝々囂々の聲の中に文豪ジイドが敢然放つた正義の矢。

林房雄著　青年　四六判四二七頁　價七十八錢
長篇小說
作家的運命を賭して描き上げた寧明期日本の巨像。封建日本の殼を破つた青年の魂は茲に一大敍事詩を展開する。

林房雄著　壯年　四六判四三四頁　價七十八錢
長篇小說
『青年』の姉妹篇をなすもので、明治維新の大業成り愈々新しき第一歩を踏み出さんとする日本を描いた大野心作。

鍵田研一著　石川啄木　四六判四〇六頁　價七十八錢
事實小說
不世出の天才歌人石川啄木を描ける堂々八百枚に亘る大事實小說。情熱の詩人啄木は今こそ高らかに生きて歌ふ。

新・居格譯　農民　四六判四〇五頁　價七十八錢
レイモント　秋の卷
土の思想と感情を描いてノオベル賞を受けた世界的農民文學。『大地』の譯者によつて新譯成る。

日本圖書館協會 推薦圖書

數學文化史

吉岡修一郎 著

好評重版

四六判・上製函入本文三六〇頁
定價二圓五〇錢(〒・一四)

本書は專門家の立場からでなく、一般文化史の一面として、極めて素人向きの數學史を提供することを目的としてゐる。然し數學史上重要な專門事項に就いては、出來る限りの平易な解說が用意されてある。

然し文化史なる以上、數學史發展の諸相を客觀的に把握することが本質的問題であるが、斯る著述は西洋にも稀なるに拘らず、著者は絕えず目標を玆に置き、數學史上の逸話・民間傳說、更に政治的發展との交流を添へて、興を惹かしめてゐる。

獨裁政と法律思想
高柳賢三著
四六判 四三〇頁
價二・五〇 〒一四

大陸と科學
隈部一雄著
四六判 二九六頁
價一・五〇 〒一四

俳諧文學
頴原退藏著
四六判 二四〇頁
價一・二〇 〒一〇

さざなみ軍記
井伏鱒二著
四六判 三四三頁
價一・六〇 〒一四

ヒットラーと青年
荒芳徳・共勝共著
大日方
四六判 二四〇頁
價一・五〇 〒一四

新版出版圖書目錄御申込越第進呈

東京市日本橋區通三丁目一番地
振替東京一八〇一番
電話日本橋二七七二番
河出書房

久留島秀三郎 著

印度・印度支那

四六判上製本模紙二色刷函入
松宮實畫・三色刷布表裝
原色刷・寫眞・地圖六十八頁挿入
定價二・八〇 送料・一四

著者は前昭和製鋼現岸本鎭業專務の重責にある鐵鋼界の權威である。氏は印度・印度支那に於ける產業資源を視察かたがた親しくその國情を見聞されて、現地報告的に記されたものが本書である。即ち現印度及び印度支那の產業資源の實狀から各地都邑、民俗、風景、建築、交通、文化はもとより、その歷史的發展並びに政治、經濟、宗教の諸般に亘る詳細を說き明かしたものである。今日印度及び印度支那が支那事變に如何なる位置を保ち、如何なる國際關係を生んでゐるかを思ひ知る秋、本書は吾人を示唆すること甚だ大なるものがある。今や、我が日本の興亞建設に必要缺く可らざるものは彼の地の物的資源である。然るに容共援蔣政策などと誤れる認識の下に徒らにその大資源を眠らせてゐるところの英佛を、速かに啓蒙し、新東亞平和の道に協力させねばならぬと、著者は本書上梓に際して國家的抱負を持つて語つてゐる。亦牧むる著者自撮影の百葉に餘る寫眞並びに數多の地圖スケッチも生き生きとこの時局的背景の下に光彩を放ち、吾人を啓發して止まないであらう。印度及印度支那に關する文獻として本書の出現は江湖を稗益するものと確信する。

內容

船出 上海 基隆・臺北 香港 コロンボ迄 コロンボ マドラスを經てカルカッタへ カルカッタ パーンとベンガル製鐵所 カルカッタ炭坑 パラジヤムダの鐵山と其炭坑 タタ製鐵所 印度の歷史 印度の宗教 佛陀耶 ベナーレスとサルナート コンボーアからアグラへ アグラ城 タジマハール アグラ郊外 デリー・シムラ デリーからボンベイへ ボンベイからカルカッタへ ダージリン 印度を去るにのぞんで 空を行く パンコック 舊都アユーチヤ シヤムの印象 アンコールへ アンコールワット アンコールトム アンコールワット ノムペーン・サイゴンへ 佛領印度支那 徹底せる排日關稅 佛領西の印度支那經略 サイゴン サイゴンから北上 海防から香港へ 大日本たらんには 印度の鐵工業と日本の鐵の問題

五月十七日

日本圖書館協會 推薦 重版發賣

鏑木清方著 **蘆の芽** 定價二・五〇 送料一四

伊原青々園著 **團菊以後** 定價二・〇〇 送料一四

岸田日出刀著 **堊(かべ)** 定價二・五〇 送料一四

伊原青々園著 **續團菊以後** 定價二・〇〇 送料一四

岸田日出刀著 **甍(いらか)** 定價二・三〇 送料一四

三浦定之助著 **魚の國** 定價一・七〇 送料一〇

相模書房

東京市日本橋區通二丁目一番地
振替東京一八〇九・八〇
電話日本橋二八〇四番
東京市日本橋區通二丁目一番地

氣候學

中央氣象臺長岡田武松博士序文　輓近本邦では、地理學や衞生學を專門とせらるゝ人士で、氣候學に關心を持たれる方が隨分多くなり、或は學會を起されたり、或は專門の會誌を發行される樣になつた。斯學の爲め誠に慶賀に耐えない。然し不思議なことには、氣候學研究の指針ともなる可き書物の發行せられたものが殆んど無いと云つても誇言ではない。老生は青年時代に熟讀したウキコフやハーンの氣候學に比す可き成書が、本邦に是非とも欲しいと豫ねてから思つてゐた。この間福井英一郎氏がやつて來られて、今度こんな本を出したいがと云ふお談があつた。お談を伺つて見ると、待望久しかつた氣候學書であつたから、非常に欣快に耐えなかつた。

早速原稿を拜見して見ると、先づ序論に於て氣候と氣候學を解說し、氣候學の發達史と資料を記るし、氣候調査に用ゐる數理の一班を叙してある。第一篇は氣候の理論であつて、玆には所謂數理氣候を詳述し、第二篇では各氣候要素を說き、第三篇では氣候の因子、氣候帶等を說き、第四篇に於ては氣候の變化を述べ、第五篇に於ては輓近の發達になる微氣候や氣塊氣候なぞを略說し、附錄には數理解說として調和分析法その他氣候學の研究に入要なる數理的研究を揭げてある。又本書に於て特に專門家を喜ばせるのは參考書と參考文獻の目錄を揭げてあることである。卽ち本書の內容は實に豐富であつて、先年クノッホ氏が增補したハーンの氣候學に優るとも決して劣らない。

老生なぞが本書の如き優良の書物の卷頭に何を書いたとて敢て光彩を增す譯ではないが、著者とは斯學の研究に就いて年來御交誼をお願してゐるから、御依賴によつて玆に一言を書いて本書を斯學に關心を持たれる人士に弘く御紹介をする。

福井英一郎著

菊判總六〇〇頁
挿圖組込二〇〇個
數度別二頁大氣候圖一葉
定價六・五〇　送料三三

東京市神田區
駿河臺二丁目十番地
古今書院
振替東京三五三四〇番
電話神田三七七三番

日本圖書館協會推薦

文部省推薦

ラヂウムを發見せる

キュリー夫人傳

エーヴ・キュリー著

川口 篤・河盛好藏・杉 捷夫・本田喜代治共譯

四六判・648頁・寫眞五　特製 2.80　並製 1.80　各送・14

全く珍しい傳記

——讀者を宗教的にならせる力——

東京高等師範學校主事　佐佐木秀一

キュリー夫人が娘としても妻としても母としても祖母としても最もあたゝかい女性らしい一生を經過しつゝ一面にあの不滅の功績を殘し得た事には、かへすゝ心ひかれるのである。

キュリー夫人傳は、その愛孃エーヴ・キュリーによつて編まれ邦譯されて以來我が國にも熱心な讀者を有してゐる。文學上優れた才能を有する一女性が、その最も敬愛する母の傳記を記したといふだけでも十分女性の關心をひくであらうのに、ましてその母なる人が人類にとつて永久に記憶せらるべき大科學者であるとすれば、この作品は二重の意味に於て特に女性の注意を集めるであらうことはいふをまたない。その序文にも——神話にも似たこの物語に些少でも修飾を加へたならば、私は罪を犯したことになるだらう。私は自分で確かでないものは唯一つの逸話と雖も語らなかつた。私は肝腎な言葉の唯一つも變更しなかつたし、着物の色に至るまで作り事はしなかつた。——とあるやうに、この書はあくまで事實に卽して、稀にしか世に表れぬすぐれた天才の生涯について、その幼時より死に至るまでの映像を忠實に記錄再現しようと骨を折つたものであり、しかもどの斷面にも愛子がその慈母に寄せる純粹な愛情がゆき渡つてゐる爲に、無味乾燥に陷り易い日常瑣末な出來事まで濃やかな人間性の流露として、恰も雨に濡れた庭石のやうな味深さを示すに役立つてゐる。……私も忙しいあひまにも讀み出せば息つぎまも惜しい程の愛著をもつて繙いた思出に、家庭人としてのキュリー夫人の面影をとり出してしるしてみたい。（抄）「文部時報」十四・三より

文部省督學官　堀口きみこ

私は、初めてこれを讀んだ時、忽ち事實は小說より奇なりと云ふ語を聯想した。けれども、この傳記の作者、キュリー夫人の次女エーヴさんが云つて居るやうに、この傳記は單にさうした生やさしいものではない。本當に波瀾を極めた、傳說めいた夫人の一生こそは、晴い少女時代から、惠まれない運命に弄ばれつゝ、長き忍耐も續けかねて、遂に巴里に逃亡し、こゝでキュリー氏と結婚して、初めて異常な大天才を發揮して行くが、やはり學者の生活難と闘ひつゝある間に、不幸キュリー氏の死に逢ふなど、女性の運命としては、世の常の型と全く異つた途を辿らなければならなかつた。然も十六の名譽ある賞牌、百七の世界學界からの稱號、凡そ歷史上、女性として、こんなに輝かしい業績を人生苦の中から築き上げた事實は、これまでも亦其後にも出たであらうか。偖かうした力は、果して何處から來たかを靜かに考へて來て、私は何時の間にか、宗教的思索と感情の領域に引入れられて居た。何としても、これは珍しい、又聖き人生記である！

東京神田駿河臺下
振替東京33223
白水社

露光量違いの為重複撮影

良書推薦

文部省及日本圖書館協會推薦書

大正大學教授 塩入亮忠著 **傳教大師** 四六上五八〇 定價二・〇〇 送料・一四

大日本報德社 佐々井信太郎著 **二宮尊德傳** 四六上六五〇 定價二・三〇 送料・一四

元商工大臣 吉野信次著 **日本工業政策** 四六上三五〇 定價二・三〇 送料・一四

九州帝大教授 波多野鼎著 改訂 **經濟學入門** 四六上二四八 定價一・六〇 送料・一〇

九州帝大教授 波多野鼎著 **經濟講話** 四六上五〇〇 定價二・〇〇 送料・一四

經濟學博士 土方成美著 **國民經濟讀本** 菊判上二四〇 定價一・五〇 送料・一四

法學博士 穂積重遠著 新訂 **民法讀本** 菊判二五〇 定價一・二〇 送料・一〇

農學博士 鈴木梅太郎著 **榮養讀本** 菊判三三〇 定價一・二〇 送料・一〇

陸軍歩兵中佐 大久保弘一著 **陸軍讀本** 菊判上四〇〇 定價一・五〇 送料・一四

航空研究所員 小川太一郎著 **航空讀本** 菊判上五〇〇 定價一・八〇 送料・一四

工學博士 青木保著 **兵器讀本** 菊判上四九〇 定價一・八〇 送料・一四

文學博士 佐佐木信綱著 **萬葉讀本** 菊判上二九〇 定價一・八〇 送料・一四

高濱虚子著 **俳句讀本** 菊判上三四八 定價一・八〇 送料・一四

元商工大臣 伍堂卓雄著 **伸びゆく獨逸** 四六上三〇〇 定價一・五〇 送料・一四

東京市京橋三ノ四 振替東京一六番 **日本評論社**

大日本圖書

新刊四六判 洋布製 總函入美本

定價各冊金一圓 送料金十錢

好評重版出來 分賣選擇自由

◆既刊書◆

皇室と日本精神 文學博士 辻善之助
佛教の精神 文學博士 常盤大定
哲學と文學との間 文學博士 桑木嚴翼
婦人世間道場 文學博士 春山作樹
女性の道 文學博士 下田次郎
國防論 陸軍少將 宇山熊太郎
現代の陸軍 陸軍少將 伊藤政之助
現代の海軍 海軍少將 匝瑳胤次
最新論理學綱要 五高校長 十時彌
社會教育概論 日本放送協會教育部長 小尾範治
社會病理學 —不良少年篇— 醫學博士 杉田直樹
日本の魚類 理學博士 田中茂穂
日本の鳥類 農學博士 内田清之助
優生と結婚 理學博士 大島正滿
日本文化と佛教 文學博士 辻善之助
日本文學の精神 文學博士 久松潛一
儒教の精神 文學博士 高田眞治

文學博士 加藤玄智著 菊判紙作布裝 函入四二〇頁

神道精義

好評三版 定價三圓（送料十四錢）

本書は世界宗教發達の史實に比照して、神道の宗教史的通有性を闡明すると共に、我が無比絶倫の國體を明徴にし、日本精神の本色をば表詮したものである。御中臣越次第本書に對する諸家批評驚嘆。

文學博士 入澤宗壽著 四六判洋布裝 函入三五〇頁

日本教育の本義

最新刊 定價二圓（送料十四錢）

本書は我が教育の内容及び方法を反省せる著者最近の論文集である。眞に日本教育の根本義を論り、教育革新の方向と内容とを考ふるに裨補すべきこと大なるを確信する。敢て識者の御精讀を乞ふ。

東京市京橋區銀座一丁目 **大日本圖書株式會社** 振替東京二一九番

露光量違いの為重複撮影

大日本圖書

新四洋總 六布裝 判函 美入 本

定價各册金一圓 送料金十錢

好評重版出來 分賣選擇自由

◆既刊書◆

- 皇室と日本精神　文學博士 辻善之助
- 佛教の精神　文學博士 常盤大定
- 哲學と文學との間　文學博士 桑木嚴翼
- 婦人世間道場　文學博士 春山作樹
- 女性の道　文學博士 下田次郎
- 國防論　陸軍少將 宇山熊太郎
- 現代の陸軍　陸軍少將 伊藤政之助
- 現代の海軍　海軍少將 匝嵯胤次
- 最新論理學綱要　五高校長 十時彌
- 社會教育概論　日本放送協會教養部長 小尾範治
- 社會病理學 —不良少年篇—　醫學博士 杉田直樹
- 日本の魚類　理學博士 田中茂穂
- 日本の鳥類　農學博士 内田清之助
- 優生と結婚　理學博士 大島正滿
- 日本文化と佛教　文學博士 辻善之助
- 日本文學の精神　文學博士 久松潛一
- 儒教の精神　文學博士 高田眞治

神道精義

文學博士 加藤玄智著　菊判 洋布裝 函入 四六判 總 四二〇頁

好評三版　定價三圓（送料十四錢）

本書は世界宗教發達の史實に比照して、神道の宗教史的通有性を闡明すると共に、我が無比絶倫の國體を明徴にし、日本精神の本色をば表證したものである。御申越次第本書に對する諸家批評集呈。

日本教育の本義

文學博士 入澤宗壽著　四六判 洋布裝 函入 三五〇頁

最新刊　定價二圓（送料十四錢）

本書は我が教育の内容及び方法を反省せる著者最近の論文集である。眞に日本教育の根本義を識り、教育革新の方向と内容とを考ふるに裨補すべきこと大なるを確信する。敢て識者の御精讀を乞ふ。

東京市京橋區銀座一丁目
大日本圖書株式會社
振替東京二一九番

良書推薦

文部省及日本圖書館協會推薦書

- 法學博士 塩入亮忠著　**傳教大師**　四六上製 定價一・五〇 送料・一四
- 文學博士 佐々井信太郎著　**二宮尊德傳**　四六上製 定價一・五〇 送料・一四
- 元蔵相 子爵 吉野信次著　**日本工業政策**　四六上製 定價一・五〇 送料・一四
- 九州帝大教授 波多野鼎著　**經濟學入門**　四六上製 定價一・五〇 送料・一四
- 九州帝大教授 波多野鼎著　**經濟講話**　四六上製 定價一・五〇 送料・一四
- 經濟學博士 上方硯美著　**國民經濟讀本**　菊判上製 定價一・八〇 送料・一四
- 法學博士 德植重遠著　**民法讀本**　菊判 定價二・五〇 送料・一四
- 農學博士 鈴木梅太郎著　**榮養讀本**　菊判 定價一・〇〇 送料・一〇
- 陸軍少將 中佐 天久保弘一著　**陸軍讀本**　菊判上製 定價一・五〇 送料・一四
- 海軍砲術學校教官 小川太一郎著　**航空讀本**　菊判上製 定價一・八〇 送料・一四
- 工學博士 青木保著　**兵器讀本**　菊判上製 定價一・八〇 送料・一四
- 文學博士 佐佐木信綱著　**萬葉讀本**　菊判上製 定價一・八〇 送料・一四
- 高濱虛子著　**俳句讀本**　菊判上製 定價一・八〇 送料・一四
- 元帥 子爵 伍堂卓雄著　**仲びゆく獨逸**　四六上製 定價一・五〇 送料・一四

東京市京橋區三ノ四
振替東京一六番
日本評論社

!! 斯界に冠たる新刊名著選

日本教育の將來

東京高師附小主事 佐々木秀一先生著（全二冊）菊判上製 定價二〇、〇〇 送料、三八

【忽再版】 本書は著者十有餘年前よりの意圖に發し愈々その着想が機を得、胸中に具體化するや、三年の大努力を擧げて專心書續けて成つたもの、先づ著者が今後の日本教育を如何に再建せんとするか、その論據、方法、方針、資料等を遂次研究し內外の教育實狀に照し論述した。堂々二千頁に亘る各教員必讀書。

教育目的論

文學博士 吉田熊次先生著 菊判上製 定價三、八〇 送料一四

【忽三版】 本書は純教育學的見地より教育目的論を究明し、從來の教育學に於ける最大根事とも言ふべき教育學上の目的論と教育法令上の目的規定との對立に關し、特に意を用ひた斯界權威者の大斷案にして、實に教育活動全般の指針たるべき書。

孝經啓蒙略解

文學博士 西晉一郎先生著 藤樹先生原著 四六判上製 定價一、七〇 送料一四

【最新刊】 孝經啓蒙は中江藤樹先生が、心魂を打ち込んで述作せられた孝經の詳解であるが惜むらくは漢文であるが爲に、今の世に親しみ難い。西博士これを遺憾とせられ、筆を執つて懇切にこれが略解を試みられ、加ふるに自己の所信を以てせられたもので、誠に本書こそ後世に殘るべき國民道德の經書である。

戰勝國民の實踐哲學

日本大學第二普通部校長 中野八十八先生著 菊判上製 定價四、〇〇 送料三三

【最新刊】 本書は古來日本には日本に特有なる忠誠哲學の實が嚴存し、しかも今次の事變に於ては皇軍將士の活躍中に、それが烈々たる實踐の事實を無數に敬仰し得ることを說き、進んで戰勝國民としての哲學が絕對的に必要なる所以を闡明し、轉換期教育を實踐せしめんが爲に叙述したる大著である。

神道史講話

文學博士 清原貞雄先生著 四六判上製 定價二、五〇 送料一四

【最新刊】 從來神道史に關する著書は、何れも專門家を對象とし、專門家以外の人殊に教育家の要求に應ずる手頃の書は殆んど皆無の狀態であつた。我が國歷史教育の權威たる著者はこれを遺憾とし、神道史の概念を把握せんとする人々の爲に、特に明解平易を期して翻說せられたのが本書である。

東京市神田區三崎臺一 駿河 目黑書店 振替口座東京第二八〇九番

終